

IDE

2014 年度 IDE 大学セミナー報告書

.....
これでいいのかFD

IDE 大学協会北海道支部

2014 年度 I D E 大学セミナー 報告書

これでいいのか F D

I D E 大学協会北海道支部

編集

細川 敏幸 (北海道大学 高等教育推進機構 教授)

川畑 智子 (北海道大学 高等教育推進機構 准教授)

2014 年度 I D E 大学セミナー 報告書

目次

プログラム	1
概要	3
開会式とオリエンテーション	7
1. 特別講演 I 一橋大学のFDとその課題—大学教育改革の進展とFD—	9
2. 特別講演 II 京都産業大学の組織的かつ対話する“楽しそうな”FD活動	27
3. シンポジウム 北海道におけるFDの現状	51
3.1 北海道科学大学のFD活動	51
3.2 学生と共に考えるFD	71
3.3 旭川医科大でのFD—より多くの参加を得るために—	102
3.4 北海道大学の新たな試み	121
3.5 総合討論	147

プログラムと概要

2014年度IDE大学セミナー「これでいいのかFD」

プログラム

平成26年8月28日（木）～29日（金）

ホテル札幌ガーデンパレス（札幌市中央区北1西6）

第1日 8月28日（木）

15:00 受付

15:30 開会式

挨拶 IDE大学協会北海道支部長・北海道大学 総長 山口 佳三
オリエンテーション 北海道大学 教授 細川 敏幸

15:40 特別講演 I

「一橋大学のFDとその課題—大学教育改革の進展とFD—」

一橋大学 理事（教育・学生担当）・副学長 落合 一泰
司会：小樽商科大学長 和田 健夫

16:50 特別講演 II

「京都産業大学の組織的かつ対話する“楽しそうな”FD活動」

京都産業大学 教育支援研究開発センター長・総合生命科学部 教授 佐藤 賢一
司会：北海商科大学商学部長 阿部 秀明

18:00 懇親会

第2日 8月29日（金）

9:30 シンポジウム

テーマ「北海道におけるFDの現状」

司会：北海道大学 高等教育推進機構 教授 細川 敏幸
シンポジスト 北海道科学大学 副学長・FD委員長 有澤 準二
札幌大学 准教授 堀江 育也
旭川医科大学 教育センターFD・授業評価部門長 教授 吉田 成孝
北海道大学 教授 細川 敏幸

12:00 閉会式

挨拶 北海道科学大学長 苫米地 司

概要

FDの実施が大学設置基準に組み込まれ義務化されてから、5年が経過した。どの大学でもFDを導入したはずだが、年1回の講演会程度でFDとしている場合も多いであろう。「授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究」（大学設置基準第25条の3）が効果を上げているのだろうか。何をすればいいのか悩んでいるのではないだろうか。

このような現状を考慮し、今年度は教員研修について積極的に展開している国内の事例を学ぶとともに道内の動向も紹介し、今後の各大学の活動の参考となるよう企画した。この5年間の歩みを振り返り、新たな方向や手法など今後の指針を得るためである。

1. 主催 IDE大学協会北海道支部・北海道大学共催

2. 主題 「これでいいのかFD」

3. 日時 平成26年8月28日（木）～29日（金）

4. 場所 ホテル札幌ガーデンパレス

5. 構成

・特別講演（1日目）一橋大学のFDとその課題ー大学教育改革の進展とFDー

一橋大学 理事（教育・学生担当）・副学長 落合 一泰
司会：小樽商科大学長 和田 健夫

・特別講演（1日目）京都産業大学の組織的かつ対話する“楽しそうな”FD活動

京都産業大学 教育支援研究開発センター長・総合生命科学部 教授 佐藤 賢一
司会：北海商科大学商学部長 阿部 秀明

・シンポジウム（2日目）北海道におけるFDの現状

司会：北海道大学 高等教育推進機構 教授 細川 敏幸

北海道科学大学のFD活動

北海道科学大学 副学長・FD委員長 有澤 準二

学生と共に考えるFD

札幌大学 准教授 堀江 育也

旭川医科大でのFDーより多くの参加を得るためにー

旭川医科大学 教育センターFD・授業評価部門長 教授 吉田 成孝

北海道大学の新たな試み

北海道大学 教授 細川 敏幸

1. 特別講演

最初の講演は、国立大学のFDの例として一橋大学副学長の落合氏にお願いした。次に要約する。一橋大学の全学FDは平成15年から始まる第1期中期計画に含まれており、「本学教員の教育力向上・授業改善」を目的として、大学教育研究開発センターが主催し、討議会スタイル（講演、パネルディスカッション、質疑応答）で毎年実施されてきた。また、本学の大学教育改革の課題（大学のグローバル化：学生や教員の国際流動性の強化、教育プログラムの国際通用性の向上）達成のため、カリキュラム改革や教員の教育力強化を含む改革実践を目的とした全学FD（毎年2回）あるいは部局FDが実施されている。

平成22年度からの第2期中期計画には、部局別FDが明記された。まず、部局別に検討を要する施策については、担当者が各学部に出向いて説明し議論を導く「出前ミニFD」が、月例教授会に30分程度挿入される形式で効果的に実施されている。これまでに、アカデミック・プランニング・センター職員によるGPA制度の実施経過報告、キャリア支援室大学院部門職員による大学院生の進路支援の内容と成果報告、保健センター医師による学生・院生や教員のメンタルヘルスの説明等が行われてきた。

部局別FDでは「教育力向上・授業改善」がテーマになっている。たとえば、商学部では前期ゼミ必修化を教育改革の一環と位置づけ、部局別FDでその実践と振り返りを重ねている。また、近年の大学教育改革については、大学本体による全学FDが開かれている。

若手教員のためのメンター制度が期待されるが、本学ではその代わりに平成18年度からTF（ティーチング・フェロー）トレーニングコースを開講している。このコースは、事前講習・授業観察・授業実習・事後講習の4段階から構成され修了者には「TFディプロマ」が授与される。今後の課題は、教育改革と連動したFDや、非常勤講師へのFDの実施である。

次の特別講演は、私立大学の立場で健闘している京都産業大学の佐藤氏であった。要約すると、京都産業大学は全学的・組織的なFD活動の一環あるいは同活動の肝となる取組みとして2000年に授業評価アンケートをはじめた。わたしが着任した2007年には教育支援エクセレンスセンターが実施した「新任教員研修会」に参加した。具体的には「先輩教員と新任教員が授業運営上の気づきや困りごとについて意見交換する（授業改善）」「授業評価アンケートの内容と実施方法を知る」など教員個人のレベルでの職能開発であった。その一方でわたしは、授業担当という仕事の成り立ちや、様々な所属学部や専門領域、年齢層や性別を構成要素とする教員集団の中における自身の立ち位置などを認識し理解することを促す集団レベルでの職能開発、すなわち学部や大学全体レベルでのFDの重要性を大いに感じたのである。そして何よりもそのイベントは日頃孤独に自室で教育研究活動に勤しんでいたわたしにとって、多くの人との対話・情報交換をベースとするとても楽しいひとときであった。FDって楽しいと感じた。

現在本学のFDを担当している教育支援研究開発センターは学長の直下に位置し、11名

の教職員で構成され、対話を重視したFDを展開している。すなわち、新任教員研修会（2～3回／年）、全学FD/SD研修会（3～4回／年）、学部センターまわり（2～3回／年）の実施、紀要である高等教育フォーラム（1回／年）の発行などである。本学の教育の質向上のためのPDCA活動は組織の上から下に向けて、トップレベル、ミドルレベル、ボトムレベルに分かれるが、センターはすべてのレベルで支援している。ボトムでは、およそ30名からなる学生FDスタッフ燦(SUN)は、学生FDサミットへの参加や、「京産共創プロジェクト」の企画・運営を行っている。

対話を重視するFDとして、「学生と教員がともに考えるFDフォーラム」や「授業の相互評価アンケート」、「学習成果実感調査」を実施している。その結果、各学部の課題が「見える化」されるとともに、これを利用した「学部による公開授業&ワークショップ」が毎年秋に実施されている。

2. シンポジウム

翌日のシンポジウムでは道内の4大学が新たな試みについて説明した。

北海道科学大学からは有澤氏がFDの仕組みと内容について話された。北海道科学大学のFD委員会は事務局員3名、3学部12学科の教員12名の計15名で構成されている。この内、教学担当の副学長が委員長、学生支援センター長、自己点検委員会委員長が副委員長、その他キャリア支援センター長がアドバイザーとして加わっている。

FDの目的は大きく2つあり、教員個人の授業改善と教員団の職能開発である。教員個人では授業の公開を義務付けられており、各学科前期3科目、後期3科目を毎年行っている。その場で参観シートに記された内容については、カリキュラム編成会議を開催し、自己点検委員会に報告され、最終的に学長が加わった自己点検幹事会で承認を受けている。また、学生による授業アンケートの結果を定量評価し、評価点の低い科目については、カリキュラム編成会議で改善策を提案している。今後授業は全科目一般公開する予定である。

全学FDでは1年生の入学直後の学力調査の分析と年度末の補習教育（国語、数学、英語）の定量評価を行って初年時教育の成果を検証している。また本学は2014年度より学士教育課程を全面改訂しており、アクティブ・ラーニング、PBLなどを取り入れたプロジェクトスキルⅠ、Ⅱ、Ⅲなどを開始した。現在は効果を検証しながら、シラバスの手直しを計画しているところである。

札幌大学の堀江氏は、学生FD委員会、通称「おこし隊」の活動を次のように解説された。学生FDは、道内では本学以外に5大学で組織されており、全国的には60大学を超えるまでにひろがっている。年に数回、情報交換やワークショップなどを行っており、春と夏に開かれる学生FDサミットにおいては、全国から400名を超える学生と教職員が集まっている。本学は、2008年に学生FDが立ち上がり、当初は、学生と教職員が集まり、授業改善をテーマにグループワークを行ったり、気軽にコミュニケーションをとれる場として、おこし隊がカフェを開いた。そこでは学生の授業に対する思いなどを聞けるのではな

いかと、歩み寄る教員が多く見られたが、最近はずつと遠のいているように感じる。しかし、FDは担当授業のアンケートによる授業改善だけでなく、広く教員と学生との双方向のやりとりが大切なのではないかと考えている。そこで、本学では学生と教員が語り合う会「サットーク」や学生発案型授業「スキサポ」を企画・実施している。サットークで話し合われた「こんな授業があったらいいのにな」を受けて、新たな授業を開始したのである。これまで「賢い消費者になろう」や「北海道の政治学」、「映画で学ぶ現代世界」が開講された。また、他大学と共同の現地体験宿泊型「大地連携ワークショップ」にも参加している。これらから、学生同士のネットワークや大学間連携の重要性を認識している。

旭川医科大学の吉田氏は医科大学の特殊性を説明した後「出前型FD」について以下のように説明された。本学では臨床系教員が多いのでFDに参加しづらい。そこで、教員が都合の良いときに参加できるように、同じ内容のものを年に複数回、しかも複数年にわたり企画して、多くの教員に浸透するように工夫している。さらに、臨床系教員への教育FDを充実させるために、平成24年度から“出前型”のFDワークショップを企画している。つまり、講座単位で希望日時を設定してもらい、7名～十数名の講座関係教員が参加し、2名程度のファシリテーター役の教員と共にFD活動を行うものである。1回の内容は15分程度のミニレクチャー「カリキュラム・プランニングと到達目標」に引き続き、30-40分程度のワークショップ「授業の到達目標の作成」を行うもので、あわせて1時間弱の所要時間である。この方式は開催担当教員の負担はやや多くなるが、確実に参加者を広げる方法である。

北海道大学からは細川が次のように説明した。本学では、1998年から1泊2日のFDワークショップ、1日で修了する新任教員研修およびTA研修を毎年実施してきた。2007年からは新任教員研修とワークショップを統合し、年2回実施している。シラバス記述を目的にグループ学習を取り入れた北大型の研修は全国に広がっている。これらの研修に加えて、2009年頃から学内の要望に応えるための研修を実施している。

①将来大学の運営に関わる教員のための教育マネジメント研修、②英語で講義をする教員のための研修（マイクロティーチング、発音修正など）、③新しい教育技法の研修（ELMS：e-Learning システム、アクティブ・ラーニング、ディベート）などである。特に、①と②は、毎年開催している。③は新渡戸カレッジの教育を担当する教員のために開催されており、グローバル人材養成のための教育を支援している。今後も、新たな教育プロジェクトの実施にともない研修が実施される予定である。

（北海道大学高等教育推進機構教授 細川 敏幸）

開会式とオリエンテーション

挨拶 I D E大学協会北海道支部長・北海道大学 総長 山口 佳三

オリエンテーション

北海道大学 教授 細川 敏幸

開会式とオリエンテーション

細川：みなさんこんにちは。今回は暑い中お集まりいただきありがとうございます。私は全体の司会を承っております北海道大学の細川でございます。よろしくお願ひいたします。それでは、全体のオリエンテーションにそってご説明いたしますので、まず初めに開会式のご挨拶を、IDE北海道支部長並びに北海道大学総長であります山口先生に願ひしたいと思います。山口先生よろしくお願ひいたします。

山口総長：みなさんこんにちは。IDE大学協会によろこそいらっしやいました。私は北海道大学総長でIDE北海道の支部長をしております山口でございます。実は私がこのIDEに関わりましたのは、先代総長中村睦雄先生に勧められてからなので、今年で14年目で、皆勤でございます。その間大学の法人化等ございました。IDEはその前後を通じてかなり形を変えて参りましたが、北海道内の国公立の大学短大および全ての教育機関を一同に集めて、教育問題を議論し分かち合うという会です。今後もこれを北海道内唯一の集まりとして大事にしていきたいと思ひます。本日の話題は「これでいいのかFD」というテーマで学部のみならず大学院としてもやらねばいけない、取り決めねばならない事業でございます。形の上ではやっておりますが、実質的にあまり機能していないという議論もございます。本日は一橋大学の落合先生、京都産業大学の佐藤先生からそれぞれの大学の取り組みを紹介していただきます。明日はそれを踏まえて北海道内の大学の現状をお話してもらいたいと思ひます。どうぞ闊達な議論ができますようよろしくお願ひいたします。

細川：どうもありがとうございました。それではみなさんのお席にネームプレートがあると思ひますけど、これは今日明日固定でございます。それからネームカードは最後に受付にお渡しください。本日は懇親会が6時からございます。懇親会にご出席の方のネームカードは、懇親会終了後にお返しくください。続きまして配布資料を確認してください。封筒と昨年度のセミナーの報告書が皆様の机の上にあると思ひます。封筒の中にはこれからお願ひしてあります講演の資料、各講師の配布資料、パワーポイントであります。それから参加者の名簿、それにIDEの入会の案内をお入れさせてもらっております。入会をご希望される方は、入会の申込書に記入の上、受付へお出しください。受付には、会誌のバックナンバー、昨年の9月号を5冊用意してあります。本日、2人の講師に講演をお願ひしてありますけども、その記事もありますので、ご興味のある方はご購入下さい。1冊1000円です。IDEは学会の形式をとっておりますが、会誌に出ております内容は、論文ではございません。日本の各大学、いろんな大学がございまして、そこで行われている教

育改革の試みあるいはその成果が、テーマごとに毎回報告されています。ご自分の大学の改革をどうすればいいかというようなことでお悩みの場合ここに入ってくださいと、毎月送られてきます。毎回違ったテーマで、しかもアップトゥデートでございますので、ご興味のある方は是非入会してください。さてそれでは、セミナー全体の今日明日の予定を紹介いたします。お手元の資料をご覧ください。1枚めくっていただくと、右側に日程と書いてございます。この通りに実施していく予定でございます。今年度の予定は、先ほど総長からもご説明がありましたけれども、本日はFDをうまくやっておられる国立大学と私立の大学を1つずつお願いしており、どんなことが展開されているのかをおうかがいしたいと思います。明日は道内の4大学、私も発表に入っておりますが、北海道科学大学、札幌大学、旭川医科大学、そこに北大が入りまして4つの大学でFDがどうなっているのかお話しをいただきます。いろんな形で展開されているようです。この報告により2日目のシンポジウムとしたいと思っております。以上で簡単ではございますが、オリエンテーションとかえさせていただきます。それでは特別講演第1から始めたいと思います。まず司会を小樽商科大学長和田先生と交代したいと思います。よろしく申し上げます。

特別講演 I

一橋大学のFDとその課題 -大学教育改革の進展とFD-

一橋大学 理事（教育・学生担当）・副学長 落合 一泰

司会 小樽商科大学長 和田 健夫

1. 特別講演 I

一橋大学のFDとその課題—大学教育改革の進展とFD—

一橋大学教育・学生担当理事・副学長 教授 落合 一泰

和田：一番目の講演の司会を務めます小樽商科大学の和田と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。まず、1つ目の講演は、一橋大学教育・学生担当の理事・副学長の落合先生から「一橋大学のFDとその課題」としてご講演していただきます。落合先生のご経歴はお手元の資料にありますので、ご覧いただければと思いますけれども、ご専門は文化人類学だそうでございます。東京大学の農学部農業経済学科を卒業後、東京大学の大学院を修了され、その間ニューヨーク州立大学でPh.D.を取得され、その後中部大学、帝京大学、茨城大学で教鞭をとられたあと97年に一橋大学に移られました。一橋大学社会学部学部長を経て2010年に現職に就かれております。それでは落合先生よろしくお願ひします。

概要

ただいまご紹介にあずかりました落合です。どうぞよろしくお願ひいたします。

今回は、「これでいいのかFD」という刺激的なタイトルの下でお話させていただくことになりました。さきほど一橋大学は「うまくいっている大学」とのご紹介をたまわりましたが、日々「これでいいのか」と自問しているのが実情です。今回は、IDEの559号(2014年4月号)の「FDの反省と課題」という特集に寄せた「教育改革とFD」という拙文がお目に留まってここに呼んでいただいたものと思っております。それは、天野郁夫先生から一橋大学の事例を書いてほしいとの打診があり、お引き受けしたものでした。小文では、一橋大学の教育改革の一環としてFDがどのように位置づけられてきたのか、それは計画通りに実施されてきたのか、それは所期の成果をあげてきたのかなどを検討しました。

今日の私の発表タイトルに「大学教育改革の進展とFD」という副題が付されていますのも、同じ問題意識によるものです。スライド2が示しますように、FDは大学の教育方針や内容、教員の教育能力の向上等を目指す組織的な取組と実践として捉えられてきました。しかし、今般の大学教育改革のなかでFDを捉えるならば、FDをひとくくりにしてしまいますと実像が見えてきません。「全学FD」という形もあれば、「部局別FD」という形式、またテーマ別に大学執行部が各部局に出かけていって開催する「出前ミニFD」などもありえます。一橋大学の場合、大学教育研究開発センターという学内組織を基盤に、発表と討議を通じて教育力の向上、授業改善を図る「全学FD」が平成15年に始まりまし

た。大学教育研究開発センターは全学共通教育科目（他大学の一般教育科目，教養科目）を統括していますが，合わせて，「全学FD」の企画運営も業務のひとつとしています。

「全学FD」は過去10年実施されてきましたが，近年は大学教育改革との連動性が弱くなっているように私には感じられます。それはなぜなのか？また，「教授団」「研究会」「研修会」のような集団的な捉え方や資質改善・開発の取組も重要ですが，イギリスの大学で行われているような教員ひとりひとりの能力の向上を図る本来の意味でのFDを実践するには，新任教員への個人的・個別的ガイダンスやメンター指導が必要です。一橋大学ではテニュアトラック制度をもつ経済学研究科を除き，それは実施されていません。ただ，論文完成と就職活動の両立を図らねばならない大学院後期博士課程の学生を対象とする，将来に備えた教育技能向上研修はかなり組織的に行われておりますので，のちほどその一部をご紹介します。と思っております。

最近，「部局別FD」や「出前ミニFD」が盛んに開かれています。「部局別FD」は，各部局においてそれぞれのアドミッション・ポリシー，カリキュラム・ポリシー，ディプロマ・ポリシーをどのように具体的に実現するかを議論する場です。こうしたFDは各部局で行ったほうが「全学FD」より現場性と実質性があることから，実施されるようになりました。参加者が多いほうが望ましいので，しばしば教授会の前後に開かれています。

「出前ミニFD」は，大学執行部（学長・副学長）やその所管にかかる組織が部局に出向いて開催するものです。たとえば，キャリア支援室が把握している就職状況や進路の問題を各学部で報告して議論してもらい，障がい学生の実態とあるべき支援について保健センター医師に報告して知識を深めてもらう，教育担当副学長の補佐らが各学部学生のGPAの動きについて伝え知識を共有してもらうなどの「出前ミニFD」を，これまで行ってきました。教授会の休憩時間などで短時間集中的に行いますとディスカッションもあり，多くの人に話を聞いてもらえ，しかも自分たちの学部のテーマにかかわりますので，当事者として熱心に参加してもらえます。「全学FD」で行いますと，残念ながらそこまで参加者が増えません。

大学教育改革とFD

このように，一橋大学ではいろいろな形式でのFDを実施しております。それは大学教育改革というより大きな動きとどう結びつくのか。そこにはどのような困難があるのか。ここ数年の動きに目を凝らせば，そうした部分がよく見えてきますので，そのあたりをお話ししたいと思っております。

一橋大学の場合，大学の教育研究などの質の向上を達成するために採用されるべき措置が，第1期中期計画に書き込まれています。冒頭に置かれているのが，教育に関する目標達成のための措置です。その3番目に教育実施改革達成のための措置が記されており，その中に枝番号を付した形で，教育結果の評価そして質の改善を図る方策が示されています。その第一として，平成16年に大学教育開発センターを中心に，授業評価，FD，授業教育

支援、カリキュラム開発と連携した教育向上システムの構築などを進めるという文言で、教育の質的改善のあるべき具体的な姿が明示されています。スライド3にありますように、中期目標にはFD実施が明記され、それを「全学FD」の形で大学教育開発センターが担当することになりました。こうして、教育力の向上・授業改善という当初の目標の達成に向けて、「全学FD」がこれまで毎年開催されてきました。スライド4は、今まで行ってきた「全学FD」のテーマをまとめた表です。第1回目では、一橋大学の授業文化を問い直すことから始めました。そして2回目には、全学共通教育のカリキュラム改革に向けてということで他大学の改革に学ぶ取組を行いました。このときのテーマ設定は、大学教育研究開発センターが全学共通教育を統括する組織であることと関係していました。3回目は授業評価と授業改善でした。一橋大学ではずいぶん前から授業評価を実施しておりまして、そのデータを基に議論をいたしました。4回目は授業評価の射程と活用法、5回目は新しい学士教育課程システムの構築に向けてということで、シラバスやGPAを議論しました。このあたりから国際通用性を備えた大学教育改革に取り組む姿勢が出てきました。

科目を履修することによりどのような能力が身に付くかを受講生に示す新たなシラバス様式は、教育の国際通用性の観点からも重要性を増してきています。今日ここに北海道大学の鈴木久男先生がいらっしゃいますが、先生には、教育改革推進懇話会12大学（旧七帝大、筑波大学、東京工業大学、一橋大学、早稲田大学、慶応大学）のチューニングをテーマとするワーキンググループに参加していただいております。このワーキンググループでもシラバスを討議しました。シラバスは大学によって形式も異なりますし、他大学の人にはあまり見せないのですが、12大学は、よりよいシラバスを構想するために、それぞれのシラバス様式を見せ合い、質疑を行って互いに参考にするということを行っています。その意味では、平成17年度くらいから、国際通用性を目指す大学教育改革への具体的関心が一橋大学には芽生えていたと言えます。

シラバスは教育する側が教育の質を保証しようという表明のひとつですが、GPAは学生が学修成果すなわち自分が身に付けた能力や質を保証する数値と言えます。一橋大学では一定のGPA値を全学部で卒業要件化しています。これは教育改革の大きな一歩でしたが、その前に解決すべき課題として、学期あたりの履修可能単位数の上限の設定（キャップ制）、成績評価方法の標準化、非常勤講師への協力要請などがありました。こうした課題に関する議論は学内では「全学FD」が始まる以前の平成11（1999）年から行われていましたが、「全学FD」という場を得て、さらに議論が進むようになりました。こうした議論や調整を経て、実際にGPAを卒業要件化したのは平成22年度入学者からでした。その年には「GPA制度本格導入後の成績評価を考える」というタイトルで「全学FD」が開催されていますが、キャップ制の導入から成績評価基準の公開やGPAの試行を経て卒業要件としてのGPA制度の導入、その後の制度評価・調整まで、最初の全体的PDCAには10年以上を要していたことが分かります。

一橋大学では、学長裁量経費の一部を学内教育改革に向けた取組に配分する「教育プロ

ジェクト」が平成17年度に始まりました。学内競争資金の形式をとり、それを基盤に学外の競争的資金にも応募することを視野に入れており、それが教育改善のダイナミクスを生むと考えて続けてきました。その稼働状況や成果を学内で共有する会が、平成17年度から毎年1回、「全学FD」に組み込まれることになりました。これは、年2回の「全学FD」のいずれにおいて授業改善について議論をしていたのが、1回に減ったことを意味します。大学教育研究開発センターは、メインの国立キャンパスから少し離れた小平キャンパスに置かれていた教養課程が廃止されて後に全学共通教育を統括する組織として発足したものであり、大学執行部が推進する教育改革を後押しする組織ではありません。専門教育教員を含めた全教員の教育能力向上の実践を全学的にリードし続ける組織ではもともとなかったということでもあります。

「全学FD」では、平成19年度に「公共的資金の活用」、20年度に「学生調査」、21年度に「レポートの剽窃」などがとりあげられました。23年3月に東日本大震災があり、直後の「全学FD」では教育改善とは異なる観点から「大学の災害対応を考える」というテーマが取り上げられました。24年度は「男女共同参画と大学教育」。このように、近年、大学教育研究開発センターは大学と社会を結ぶより一般的なテーマを取り上げるようになりました。見方によっては散発的という印象があるかもしれません。25年度には、法学研究科の研究会「求められる研究者の倫理とは何か」を大学教育開発センターが共催する形で「全学FD」を開催しました。この年、大学教育研究開発センターは発達障がい学生支援という話題を当事者学生に登壇を求めて取り上げたいとの方針でしたが、障がい学生の登壇は個人情報保護の観点からも現時点では困難ということで具体化しませんでした。一橋大学では学生支援センター長である私のもとに障がい学生支援室を設け、支援を推進していますが、授業改善、教員の能力開発を趣旨とする「全学FD」で大学教育研究開発センターがこのテーマを取り上げることには違和感もありました。

第2期中期計画におけるFD

すでに第2期中期計画期間の「全学FD」にも言及してしまいましたが、第2期になり、大学の教育研究等の質の向上に関する研究を達成するために採るべき措置として、FD活動を継続的に実施するとともに、効果的な教材蓄積システムの構築が中期計画に記載されました。では、第1期と第2期では「全学FD」の位置づけにどのような違いが生まれたのでしょうか。スライド5にまとめましたように、第2期では「全学FD」のみならず、部局においてFDをやっけていこうとなった点が大きな違いです。以前から部局において自前のFDが行われておりまして、それをこういう形で書き込んで正式に位置づけたのです。平成23年度以降になりますと、大学教育研究開発センター及び各部局において実施するFDの資料をどのように全学的に共有するかも検討課題とするようになりました。以上を图示したのがスライド6です。主体の異なるFDの成果をいかに共有し全学で活用するか、というのが大きなテーマになりました。全学に共通するテーマをめぐる「全学FD」とは

目的も主体も異なる部局別のFDを公式化し、全学的な教育課題をめぐる学部ごとの課題について、教育・学生担当理事・副学長が教職員を部局に派遣して討議する「出前ミニFD」も部局別に始めました。大学改革を進めるなかで、全学共通の話題を設定した「全学FD」だけではFDの目的を達成できないことが明確になってきた結果でした。意思の主体の多様化を認めつつ改革を推進する必要性が出てきたからでもありました。「全学FD」は大学教育開発センターを主体とする授業改善を目的としていましたが、より一般的なテーマを中心とする集会に変わってきていました。また、先ほど申しました研究者倫理に関する研究科主催の「全学FD」のほかにも、学長を本部長とする国際化推進本部主催のグローバル化に関する全学向けFDが開かれています。一橋大学の学部入学生は卒業までに全員が留学し、現在20%弱の留学率を100%にしたいというのが山内学長の考えであり、それに向けての試行の成果が発表され討議が行われました。全学向けのFDを開催するのが大学教育研究開発センターだけでなく、大学改革のなかで部局や大学執行部も行うようになってきたわけです。

個別のFDでは、「出前ミニFD」もありますし、部局ごとの教育課題に関する「部局別FD」もあります。スライド7の表が示しますように、一橋大学のFDはこのように多様化してきました。右から3つ目の言語社会研究科のコラムに空欄が多いのですが、これは資料が残っていないということであり、実際にはいろいろ開催されていたようです。一番左の商学研究科を見ていただきますと、学部が独自に科目化している導入ゼミ、前期ゼミ、古典講読の成果について話し合いが「学部FD」の形式で行われてきたことが分かります。一橋大学の教育の要は少人数ゼミナールで、3・4年必修になっています。商学部はそれを、1、2年生から始めようと試行し、その成果を討議しているわけです。

それからカッコの中に「出前」と記してある「出前ミニFD」は、必要に応じて適宜開催しているものです。右の2つ、国際・公共政策大学院と法科大学院は専門職大学院です。意見交換会という名称ですが、実際には「部局別FD」の性格を持つものです。

スライド8の写真は、2014年4月に行われました「学部研究のグローバル化に向けて」という国際化推進本部主催のFDの様子です。50人を超える教職員が集まりました。先ほど申しましたように山内学長は全員留学を目指しており、その試行として2014年2月から3月にかけて海外の9教育機関に100人の学生をモニターとして4週間送り出しました。そして、行く前と帰ってきた後の英語の成績、行く前、行っている最中、帰国後に細かなアンケートを取りました。海外経験の興奮が落ち着いた帰国後3か月でまたアンケートを取っています。このような綿密な方法で短期留学の効果を調べています。その最初の成果を全学で共有するために、全学的なFDを開いたのでした。

今後の課題

一橋大学におけるFDに関する今後の課題のひとつは、教育力の向上、授業改善というFDの本来の目的を達成してきたかどうかです（スライド9）。また、たとえばイギリスにはベテランの先生が新任の先生を鍛えていくという制度があります。一橋大学では、院生の博士後期課程で教育能力をつけることを目指し、さまざまな取組を行っています。ティーチングフェロー・プログラムと言い、平成18年に始めました。事前講習、授業観察、授業実習、事後実施講習の4段階からなるトレーニングコースです。スライド10にまとめました。事前講習には、一橋大学で博士号を取得して大学教員になった若手に来てもらい、経験を語ってもらうセッションも含まれています。授業観察のあと、参加する院生には自分の指導教員等の授業の一部を代講してもらいます。院生はたいへんに緊張して最初は下ばかり見えています。だんだん回数を重ねてきますと、ある程度慣れてきて、自信もついてきます。毎回、指導教官がメンターとなって教場での授業や教場外での指導についていろいろ教えてもらいます。コースを修了しますと、修了証ディプロマを出します。これまでに57人がディプロマを取得しております。院生が非常勤講師に出るとしても、こうした事前講習は必要でしょう。

スライド11に記しましたように、非常勤講師を含めたFDも今後の課題です。一橋大学の場合、専門教育科目の中で非常勤講師の占めている割合は24%です。FDと一緒に開くといっても、勤務時間外に来てもらうわけにもいきませんので、今のところ文書での説明やお願いにとどまっています。成績の標準化ひとつにしても、非常勤講師は頻りに人が入れ替わりますので、前の先生にお話して納得していただいていたことを新たな講師に改めて説明しなければなりません。どのような形式で一橋教育の一翼を担う非常勤講師の先生方に参画してもらうのがよいのか、今後考えていきたいと思っております。

GPAとIRの連携・連動についても、学内で機能や情報を共有化させたいと考えています。まだ十分ではありませんが、学修IRの整備は少しずつ進んでいます。理想は様々な教学データが車のダッシュボードのように並んで表示されており、それを参考に教学の今後方針を立てていくという形です。

以上の私の話を3点にまとめたいと思います。スライド12に示しましたように、第一に、教育力向上・授業改善を目的とする大学教育研究開発センター主催の「全学FD」は、当初の色彩を変えてきたという点です。それは大学改革が解決を求める具体的な課題を議論するには、「全学FD」という形式は十分でないということです。最近の「全学FD」ではレポート剽窃問題、災害時対応、男女共同参画、研究者倫理などが取り上げられています。それぞれ大事なことばかりですが、これを教育力向上・授業改善を趣旨とする「全学FD」で行うことには少し無理があるのではないかと感じております。第二に、授業改善や教育力向上に関しては、部局においてその3ポリシーの実質化に向けてFDを行ったほうがよいのではないかとということです。そして第3に、大学の教育改革に責任を持つ学長・副学長が中心となって「全学FD」、「出前ミニFD」を行うようになってきたということです。

今日お集まりの皆さんの大学でもさまざまな取組がなされていることと思いますので、後ほど是非そうした事例をお教えいただければと思っております。

どの大学におきましても、教職員はますます多忙になってきていておりますので、FDまで手が回らないといった面もあると思います。一橋大学もそうした状況にあります。学生の国際的流動化の向上と教育の国際通用性の強化という大目標の達成に向け、FDをいかに機能させていくかを今後も考えていきたいと思っております。

ご清聴、どうもありがとうございました。

質疑応答

和田：落合先生ありがとうございました。大変興味深いお話をお伺いいたしました。複数学部を抱えている大学のFDをこれからどのようにやっていかなければいけないかということで、先ほどお話がありましたように多様な次元で統合しながらやっているという非常に新鮮なお話でございました。また国立大学は、大学改革を進めなければいけないこととFDとの関係はどの大学でも課題として悩んでいるところだろうと思います。時間が若干ございますので、もし落合先生のご講演に対してご質問があればお受けしたいと思いますけれども、如何でしょうか。

新田：北海道大学の新田でございます。興味深い話をありがとうございました。私、特に「出前ミニFD」が非常にいい試みであるというようにお話で感じていたのですけれども、スライド7にあります部局別のFDの表がございましたけれども出前と書いてあるのがそれでしょうか。

落合：はいそうです。

新田：そうですか。毎年各部局でやっているという形でもない？

落合：はい、学長・副学長が所掌している組織が必要に応じて出向いています。

新田：これは始めたきっかけというのは大学が部局の方に働きかけたのか、部局の方から働きかけてきたのでしょうか。

落合：両方です。その最初は、平成22年度入学者から卒業要件化したGPA制度について教員が大変心配していたので、各学部に出かけて行ってその学部の学生のGPAデータ等をもとに実施しました。大学教育研究開発センターではなく、教育担当副学長の私のイニシアチブで行いました。副学長として部局に働きかけたということです。GPAを担当していた役員補佐を中心に準備をしてもらいました。別の機会に行いましたメンタルヘル

スに関する「出前ミニFD」は、部局の要望でした。社会学研究科で具体的な問題が発生しまして、教員は意識を高めるべきとの意見に基づいて大学の保健センターに打診があり、センターを所掌する学生担当副学長でもある私が出前をしようと決めました。のちには他の部局でも行いました。また、24年度には学生相談室の活動紹介を行いました。問題を抱えた学生の特徴は何か、教員はどのように対応すればよいのかなどの問題意識が社会学研究科にあり、学生相談室も賛同してくれましたので、「出前ミニFD」の実施をお願いしました。

和田：ありがとうございました。他に如何でしょうか。それでは、司会の方からなんですけど、非常に興味深いのは大学院の博士課程の学生むけのトレーニングコースという制度ですね。勤めている先生によって授業改善というのは難しいとしても、院生のころからそういうことを叩き込んでおけば、大学で中心的な働きをしてくれるのではないかと思います。やっぱり大学院生の頃からそういうことをやるのは大事なことだと思っております。一種の教育実習といえはよろしいのでしょうか。そうすると今のお話ですと社会学研究科でやっておられるということだったのですが、その点でおうかがいしたいのは、まず全学的な広がりがないと考えていいのでしょうか。なぜ社会学研究科で行われるようになったのかということと、他の研究科に広がる可能性はあるのかをおうかがいしたいと思っております。

落合：ありがとうございます。平成18年度にティーチングフェロー・プログラムを社会学研究科が始めたのは、当時、私が研究科長を務めていたからでした。他の研究科の院生で関心のある者も参加できるようにしました。実際に経済学研究科などから何人も来てくれています。そういう場合は経済学研究科の指導教員の先生に頼んでいます。そうした実績に基づいて、平成23年度に大学院生のキャリア支援を全学化しました。こうした取組を始めたのは、大学院重点化をして院生数が増えましたが、その進路支援が不十分だったからです。具体的には、3人の相談員を特任講師として雇用しています。社会学修士号とキャリアカウンセラーの資格を持ち、民間企業での勤務経験もある特任講師は、大学院後にアカデミズムの外に進路を求めようとしている院生を支援しています。もうひとり海外でPhDを得たのちイギリスでポスドクの経験をもつ若手で、アカデミックキャリアを積みたい院生を多面的に支援しています。そして3人目が、今ご質問のあったティーチングフェロー・プログラムを担当し、また大学院レベルの英語コミュニケーションスキル科目や量的研究法・質的研究法などについて研究科横断的に学ぶ科目をオーガナイズする特任講師です。

和田：よその大学院生を受け入れるってことはないのですか。

落合：今のところはありません。私見ですが、横つながりでも実施したいものです。院生同士が知り合うのも大切です。北大はこうした試みを行っていらっしゃいますか？東大、北大、広島大学が進めているという印象をもっているのですが。

細川：北大はTA研修がありますが、これは1日だけです。それからもう1つは、4回実施したのですが、1週間の英語による集中講義で、英語での教育と論文の書き方。それからもう1つは我々の方で、日本語で開講している15回の科目として開講しているもの。理学院で開講していますが、どの学部から来てもいいですよということで、実施しています。もっとも参加者が多いのはバークレーの先生をお呼びする英語の集中講義です。グループ学習をするので参加者数の上限を決めています。30数名で4回実施しました。我々が日本語で開講しているのはそれほど人気なくて、少ない年ですと4、5名ですね。多い年ですと20名ぐらい、これも過去4年ぐらい実施しております。以上です。

落合：ご教示ありがとうございます。さきほども申しましたが、一橋大学ではこれまで57人がティーチングフェロー・プログラムを修了しています。そのなかにはすでに大学教員になっている者がいます。そうした元院生が講師としてプログラムに戻ってくるという循環が始まったのは嬉しいことです。

寺山：名寄市立大学の寺山と申します。GPAのことについておうかがいしたいのですが、本学もGPAは導入していますが、卒業要件化はしておりません。一橋大学は平成22年度から卒業要件化されていますけど、実際には基準値といえますか何点以下だったらダメになるとか、あるいはGPAでもって卒業できない学生が何パーセントぐらいいるのか、差支えなければ教えていただきたいと思います。

落合：成績評価はA B C D Fの5段階です。GPAに換算する場合は、A=4、B=3、C=2、D=1、F=0です。Fは落第です。卒業要件としてのGPAは2.0以上すなわち平均してC以上としていますが、当面の措置として1.8以上で運用しています。この措置は、卒業要件化に先立つ5年の試行期間中の数値に基づいて決められたものと思いますが、今後2.0に戻るのが基本方針です。平成26年3月にGPA卒業要件化第1期生が卒業しましたが、低GPAのために卒業できなかった学生はひとりもいませんでした。単位が足りないとか卒論が書けないとか別の要件を満たさず、卒業できなかった学生はいましたが。卒業要件化した年に入学した学生にはまだ情報もなく、教員にも初めての経験でしたので指導の方法が十分に分かっていませんでした。しかし、2年、3年と年月が経過するうちに、学生の間でも情報が行き交うようになり、上級生がいろいろ教えるようにもなりました。また

教員も指導方法が分かってきました。やはりGPAを急激に上げることはできませんから、1年生の時からコンスタントに勉強しなければなりません。学生にはその癖が付き始めました。大学も主体的に勉強ができる広々とした学修スペースを用意しています。静粛を求める図書館とは異なる、いわゆるコモンズです。

GPAの推移を見ますと、年々少しずつ高くなってきています。要因としては、教員の成績評価が甘くなった、評価の甘い科目に学生が流れた、学生が勉強するようになった、などが考えられます。IRで教員の採点行動を追っていますが、甘くなったようにはみえません。また、学生がいわゆる楽勝科目に流れたという兆候もありません。となりますと、GPA平均値が上昇したのは学生たちの勉強量が増加した結果だというほかありません。実際、教員への個別インタビューによれば、最近の学生はよく勉強しているという印象をもつ教員が増えていきます。学生が自分自身の能力の質を示す上で、GPAはよい手段になっていると思います。学生にそれを意識してもらうためにも、大学の費用で留学したい場合にはGPA何点以上という要件を付けたり、学士課程と修士課程を合わせて5年で修了できる5年一貫プログラムへの応募資格をGPA何点以上としたり、卒業式のときにGPAトップ10に入った学生の名前を点呼したり、というモチベーション作りにも努力しています。卒業式での高GPA学生の点呼は学生たちに評判が良く、とくにGPA4.0のような満点の学生の名前が読み上げられますと、歓声と拍手万雷が講堂を満たします。

逆にずっと低空飛行でGPAが1.8を下回る成績が続く学生をいかに支援するかも非常に大切であり、支援組織を作りサポートしています。特に初年次の滑り出しが大切ですので、出席率などもチェックしています。学生が自主的・主体的に勉強する環境をさらに整えていきたいと思っております。

和田：ありがとうございました。これで第一番目の特別講演を終了したいと思います。皆さんありがとうございました。

平成26年度
IDE大学セミナー
IDE大学協会北海道支部・北海道大学共催



一橋大学のFDとその課題

大学教育改革の進展とFD

2014年8月28日

一橋大学理事・副学長(教育・学生担当)

落合一泰

1



FD: 大学教員の教育能力の向上を目指す実践

中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像」答申(平成17年1月)

「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。[中略]具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催など[後略]」

有本章・著『大学教授職とFD』(平成17年)

「[FDは]広義には、広く研究、教育、社会的サービス、管理運営の各側面の機能の開発であり、それらを包括する組織体と教授職の両方の自己点検・評価を含む。

狭義のFDは主に諸機能の中の教育に焦点を合わせる。[中略]教育に関するFDは総論的には教育の規範構造、内容(専門教育と教養教育)、カリキュラム、技術などに関する教授団の資質の改善を意味する。」

絹川正吉、館昭・編著『学士課程教育の改革』(平成16年)

「FDは大学教員個人の資質開発を基礎とするが、必然的に各教員個人を超えて、教授団としての取組みを必要とする。その意味で、FDを「教授団資質開発」といわなければならない。」

(文科省ホームページより) 2

一橋大学第1期中期計画におけるFD



3

全学FD 平成15～25年度

(大学教育研究開発センター主催)

期	年度	回(通算回数)	テーマ
国立大学時代	平成15年度	第1回(1)	一橋の授業文化を問い直す
		第2回(2)	全学共通教育のカリキュラム改革に向けて—他大学の改革に学び大学の改革を考える—
	平成16年度	第1回(3)	授業評価から授業改善へ
第2回(4)		授業評価の射程とその活用法—授業評価の現状と課題、個々の教員は授業評価をどのように生かしようか?—	
国立大学法人第1期	平成17年度	第1回(5)	新しい学士課程教育システムの構築に向けて—シラバス・成績評価・GPAの相互連関を考える—
		第2回(6)	一橋大学における教育プロジェクトの取組み
	平成18年度	第1回(7)	大学評価と教育改善
		第2回(8)	教育改善のダイナミクス
	平成19年度	第1回(9)	教育プロジェクト成果報告会
		第2回(10)	大学教育における競争的資金の活用
	平成20年度	第1回(11)	教育プロジェクト成果報告会
		第2回(12)	学士課程教育の改善と学生調査
	平成21年度	第1回(13)	教育プロジェクト成果報告会
		第2回(14)	レポート剽窃問題を考える
平成22年度	第1回(15)	GPA制度本格導入後の成績評価を考える	
	第2回(16)	教育プロジェクト成果報告会	
国立大学法人第2期	平成23年度	第1回(17)	大学の災害対応を考える
		第2回(18)	大学の国際化と英語教育
平成24年度	第1回(19)	能動的教育手法への挑戦—heuristicな学習経験のために—	
	第2回(20)	男女共同参画と大学教育	
平成25年度	第1回(21)	障害学生支援(延期)	

4

一橋大学第2期中期計画におけるFD

第2期中期計画

- I 大学の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置
- 1 教育に関する目標を達成するための措置
- ③ FD活動を継続的に実施するとともに、効果的な教材・資料の提供・蓄積システムを構築する。

第1期と第2期の違い

- 第2期中期計画期間中の年度計画は、全学FDと部局FDの並立を構想。たとえば、平成25年度年度計画には、「大学教育研究開発センターによる全学的なFD活動を継続的に実施する。」とともに「各学部・研究科においてFDを継続して実施する。」と記載。
- 23年度以降は、「大学教育研究開発センターや各学部・研究科FDを通して得られた教材・資料を共有するシステムについて検討を開始する。」(25年度)というように、主体が異なる各所のFDの成果をいかに共有資産として全学で活用するかを計画。
- さらに大学教育研究開発センターの全学FDとは異なる目的と実施主体による全学FD、全学的改革課題に関し部局別FDへの出前ミニFDなどを実施。

5

一橋大学第2期中期計画におけるFD

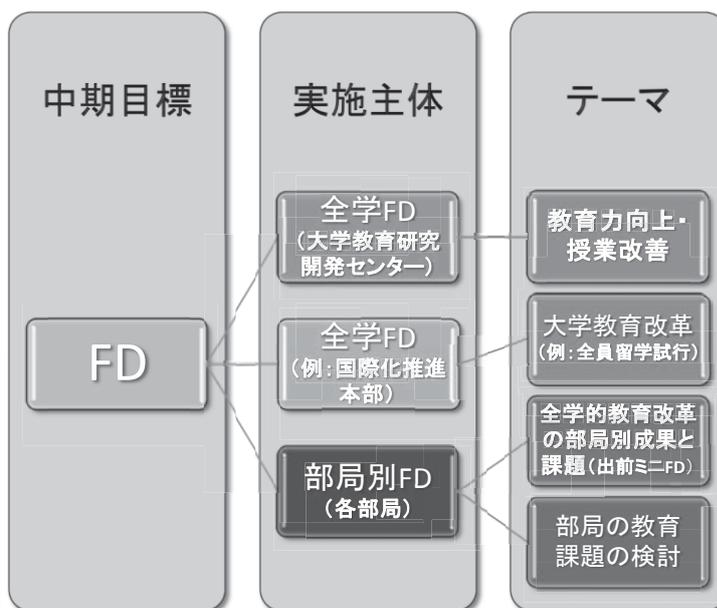
第2期中期計画

I 大学の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

- 1 教育に関する目標を達成するための措置
- ③ FD活動を継続的に実施するとともに、効果的な教材・資料の提供・蓄積システムを構築する。

具体的実践

- 全学FDと部局FDの並立
- 主体が異なる各所のFDの成果の、全学共有資産としての活用
- 別種の全学FD、部局への出前ミニFDなどを実施



6

一橋大学の部局別FD (平成22~25年度)

年度	商学部・ 商学研究科	経済学部・ 経済学研究科	法学部・ 法学研究科	社会学部・ 社会学研究科	言語社会研究科	国際・公共政策 大学院	法科大学院
平成22年度	・第5回商学研究科・商学部FD「導入ゼミ・前期ゼミ・古典講読の成果」 ・GPA経過(出前)	・GPA経過(出前)	・政治学をいかに教え、いかに評価するか(大学教育研究開発センターとの共催) ・GPA経過(出前)	・学生・院生のメンタルヘルス(出前) ・教職員のメンタルヘルス(出前) ・GPA経過(出前)		教員・学生意見交換会(6回)	FD会議(1回)
平成23年度	・第6回商学研究科・商学部FD(話題:導入ゼミ、前期ゼミ、古典講読、ジュニア・フェロー、GPA等)	・教育の改善に向けた懇談会 ・教員Tの授業への学生の反応を素ジュニア・フェロー、材としたFD GPA等)		・「社会科学概論」について		教員・学生意見交換会(2回)	FD会議(2回)
平成24年度	・第7回商学研究科・商学部FD(話題:導入ゼミ、前期ゼミ、古典講読、ジュニア・フェロー等)	・英語による授業の現状と課題について		・学生相談室の活動紹介と問題を抱えた学生への対応について(出前) ・実験自習型ゼミ活動の紹介		教員・学生意見交換会(3回)	FD会議(2回)
平成25年度	・第8回商学研究科・商学部FD(話題:導入ゼミ、前期ゼミ、古典講読、ジュニア・フェロー等)	・日本の若手研究者の英文発信力を強化するための英語論文執筆セミナー	・求められる研究者の倫理とは何か?(大学教育研究開発センターとの共催)	・院生向けキャリア支援の実践と課題(出前) ・大学進学と高校生・院生のメンタルヘルス(出前) ・学生・院生のメンタルヘルス(出前) ・社会学部への評価・理解とイメージ	・院生向けキャリア支援の実践と課題(出前)	教員・学生意見交換会(3回)	FD会議(1回)

平成26年1月現在。資料の残る「部局FD」のみ記載 7

第1回国際化推進FD 「学部教育のグローバル化に向けて」 (国際化推進本部主催、平成26年4月30日)





今後の課題 1

1. 「教育力向上・授業改善」というFD目標への全学的取り組みが不十分

ベテラン教員がメンターとなる新人・若手教員育成制度は、一橋大学には未導入

代わりに、大学院生の教育能力の育成を目指し、平成18(2006)年度より、事前講習・授業観察・授業実習・事後講習の4段階からなるティーチング・フェロー(TF)トレーニング・コースを実施

- ・ コース修了者には「TFディプロマ」を授与
- ・ 各自の教育ポートフォリオ(自分の教育力の判定と改善のための基礎資料)の充実に寄与
- ・ 平成25(2014)年度までのディプロマ取得者は57名
- ・ 授業実習の機会をはじめとするコースの有益性は、ディプロマ取得者から高評価

9

TFコース:プログラム概要

【目的】
大学で講義を担当するための教育技能の習得

【参加資格】
(1) 本学大学院社会学研究科博士後期課程在籍者で、原則としてTA経験のある者
(2) 本学大学院社会学研究科博士後期課程の休学者で、原則としてTA経験のある者
(3) 本学大学院社会学研究科修士課程在籍者(講習会のみ限定的に参加可)
PDなど、上記にあてはまらなくても本プログラムへの参加が認められる場合もありますので、参加を希望する場合は、事前に青木深特任講師に問い合わせてください。社会学研究科以外の院生でも関心のある方がいれば、問い合わせをしてみてください。

【プログラムの構成】
① ガイダンス(5月頃)
② 講習会A(7月の約半日を使って開催)
講習会Aでは、指導案やシラバスの作成、個々の授業の設計といった技術的側面と、大学教員としての留意点といった総括的側面とを学びます。
③ 授業観察 ⇄ 授業実習(授業観察1→授業実習1→授業観察2→授業実習2)

<授業観察(学期中に随時)>
授業実習にあたっては、講義内容や情報の提示方法だけでなく、授業担当者としてどういう点に配慮すべきなのか、どう工夫が可能なのか、これまでなされた様々な取り組みを知ることが大切です。そのために、第1回目の実習をする前に、実習予定科目以外の授業を1回見学し、レポートをまとめるなかで授業実習のイメージをつくりあげていきます。また、1回目の授業実習後には2回目の授業観察を行い、2回目以降の実習をより充実したものにします。

★提出書類★ …観察後、2週間以内にキャリア支援室大学院部門(本館1階)の事務担当者に提出してください(観察する科目・日時が決まった時点でメールでご連絡ください)
(1) 授業観察報告書(ダウンロードはこちらから)

<授業実習(学期中に随時)>
授業実習では実際に複数回教壇に立ち、(原則として)本学社会学部の学部生を対象に授業を行います。実習にあたっては、授業担当教員に事前に承諾を得て、助言を受けながら指導案を作成します。TFコース参加者同士で実習を観察しあい、ピアレビューをすることも推奨します。実習後は実習日誌をまとめ、授業担当教員の所見と照らしてふりかえる作業を行います。

★提出書類★
(1) 授業実習日申請書(ダウンロードはこちらから)
…実習日が決まり次第、キャリア支援室大学院部門(本館1階)の事務担当者(上記「授業観察報告書」と同じ)に提出してください。

(2) 担当授業全体のシラバス(Webシラバスのコピーで可)
(3) 担当時の指導案
(4) 担当時の使用資料(配布資料、映写資料など)
(5) 実習日誌(実習日誌A: 自身によるふりかえりを記録するものです。実習日誌B: 教員に所見を書いてもらい、署名・捺印してもらいます。所見に対する自分自身の意見を述べ、署名・捺印してください) 実習日誌のダウンロードはこちらから
…以上(2)~(5)は、実習後、2週間以内にキャリア支援室大学院部門(本館1階)の事務担当者に提出してください。



④ 講習会B(1月~2月の2日間を使って開催)
講習会Bでは、授業観察・授業実習で蓄積してきた実践をふりかえり、改善課題を析出します。それとともに、単発の授業を組み立てる以外に求められる、連続した授業体系の設計(シラバスの作成)や成績評価・授業評価のあり方、授業の「場」そのものの作り方などについて学びます。
※これまでの講習会では、アメリカや国内から高等教育の専門家や講師として招聘したり、また、大学の教壇に立っている本学若手OB・OGを講師に迎え、理論的・実践的示唆をえました。

【修了要件】
ディプロマ取得のためには、上記「講習会A」「授業観察」「授業実習」「講習会B」のすべてに参加する必要があります。ディプロマに加えて、授業科目「教育技法の実践」を履修登録する場合は、コースを最終的に修了する予定の学期に履修登録してください。

【修了認定】
コース修了者には、TFトレーニング・コース修了証(ディプロマ)を発行します。

プログラム概要出典:
<https://sites.google.com/a/r.hit-u.ac.jp/careersupport/academic/tfcourse/program>

今後の課題 2

2. 非常勤講師は全学FDの対象外

一橋では、GPA、チューニング、IRを連動させてグローバル化(学生・教員の国際流動性向上+教育プログラムの国際通用性強化)に対応し、教育の質保証を行い、大学としての特徴の強化を図っている。

しかし、非常勤講師の成績付与パターン等を分析すると、GPAの適正な運用の基盤となる成績付与の標準化が非常勤講師群(とくに全学共通教育担当者)において十分に達成されていないことが分かる。文書等で伝えてあっても、必ずしも実践されていない。

非常勤講師に対し、勤務時間外になる全学FD等に参加を求めることは難しい。

11

まとめ

1. 大学教育研究開発センター主催の全学FDは、当初の「教育力向上・授業改善」という色彩を薄めている。平成21～25年度には、FDのテーマとして「レポート剽窃問題を考える」、「GPA制度本格導入後の成績評価を考える」、「大学の災害対応を考える」、「男女共同参画と大学教育」、「障害学生支援」等が登場しており、全学FDは授業改善のためというより、その時々的重要なテーマについて全学の教員が集まり討議する場になっている。
2. 各学部・研究科がディプロマポリシーに基づくカリキュラムポリシーを持ち、それを教育実践に移している以上、「教育力向上・授業改善」が部局FDのテーマになるのは自然であろう。たとえば商学部では、前期ゼミ必修化を教育改革の一環と位置づけ、部局内FDでその実践と振り返りを重ねている。
3. 一橋大学では、近年、教育改革、ミッションの再定義、機能強化、スーパーグローバル事業申請など大学改革が最前面に出ている。しかし、大学教育研究開発センター主催の全学FDは、これら諸改革と連動していない。これらについては、大学本体や執行部による全学FDが開かれるようになっている。
4. 非常勤講師の本学FD不参加問題

12



ご清聴ありがとうございました

特別講演 II

京都産業大学の組織的かつ対話する “楽しそうな”FD活動

京都産業大学 教育支援研究開発センター長・総合生命科学部教授 佐藤 賢一

司会 北海商科大学商学部長 阿部 秀明

2. 特別講演 II

京都産業大学の組織的かつ対話する“楽しそうな”FD活動

京都産業大学教育支援研究開発センター・総合生命科学部 教授 佐藤 賢一

阿部：本日2つ目の講演の司会を務めさせていただきます北海商科大学の阿部と申します。どうぞよろしくお願いいたします。第2報告は、京都産業大学総合生命科学部長そして教育支援研究開発センター長の佐藤先生でございます。講演の前に先生の略歴をご紹介します。お手元にすでに配布されている資料にありますけども、佐藤先生は1988年神戸大学医学部を卒業したのち、1990年に神戸大学の大学院修了後、1991年に神戸大学遺伝子実験施設に勤務されております。その後2001年遺伝子実験センター助手、2002年にはアメリカのマサチューセッツ大学の客員研究員を経て京都産業大学に2007年に赴任され、その後2010年には同大学の総合生命科学部の教授。そして2013年に同大学の教育支援研究開発センターの副センター長として、現在は2014年よりセンター長をされています。今日のテーマは京都産業大学の組織的かつ対話する楽しそうなFD活動で講演いただきたいと思います。佐藤先生、どうぞお願いします。

はじめに

ご紹介いただきありがとうございます。京都産業大学の佐藤です。京都産業大学のFD活動についてご紹介する機会を提供していただきました北海道大学の細川先生と関係者のみなさまにお礼を申し上げます。ご紹介いただいたように私は長い間助手として神戸大学に職があったものです。専門は生命科学の実験系で、15,6年前までは、研究室に入った大学院生と実験ばかりしている状況でした。7年前に京都産業大学でポジションを得ることができまして、学部の授業の現場に本格的に関わることがようやくできるようになりました。6,7年の間に授業アンケートであるとか、大学のディプロマ・ポリシーに関わるようになり、気が付けば2,3年前ぐらいからは全学的に組織的なFDを推進する学内部署の教員メンバーとして参画している次第です。そのようなものに関わり始めて日が浅く、まだまだ新米なので、こういった由緒ある研究会で皆様のお役にたつような情報提供ができるかどうか甚だ不安ではあります。タイトルで思い切って「楽しそうなFD」と書かせていただいたのは、今回のテーマにある「これでいいのかFD」を明るい見通しにするための1つの一材料として活用してもらいたいという願いからであります。どうかよろしく申し上げます。

私が今回のような機会を与えていただいたのは、このIDE大学教育の冊子の4月号に

今年の3月まで本学の教育支援開発センター長を務められ、今も副学長を勤めておられる大城先生（現在は学長）が書かれた記事がありまして、これを皆さんにご覧いただいたことがキッカケになっていると思います。ここには授業アンケートの取組を中心とする本学のFD活動の変遷、現状それから課題が書かれています。私の今日の話題提供も授業アンケートに概ね集約したものです。お手元に資料があるかと思いますが、右下に通し番号として80分の何々と分数が書かれたパネルが並んでいます。かなりの数のスライドが内容的に類似しているため、実質的には5,60枚の分量ではないかと思えます。通し番号の分子の数字が飛んでいるかと思えます。これは落丁ではなく、いくつか重複する内容がありますのでその分については割愛させていただいていることによります。少々わかりにくいかと思えます。お気づきになった点やご質問がある場合には、その番号を頼りにお知らせいただければ、なるべく対応します。では実際の内容に入ります。

本日の話題ですが、4つの話をさせていただきます。まず、教育支援開発センターがどういう部署なのかを簡単に説明します。その上で我々の推進するFD活動はいろいろな学部や事務部署の教職員とじっくり対話をしながら、トップダウンだけではなくて現場で働く我々が納得して相談しながら決めていく姿勢をもって進めていることをお話しします。加えて具体的なFD活動の事例として、授業アンケートの現状と課題、さらには私個人として授業アンケートを通じて考えてきたことを話します。京都産業大学のいくつかのレベルでの連携はFD活動を通して推進しています。大きなイメージを活動内容から汲んでいただければ嬉しく思います。

教育支援開発センター

このスライドは、まず1つ目の話題である教育支援開発センターの学内における位置づけを示したものです。一番上に理事会があって、学長の下にいろんな学内部署がある中で、事務部署として学長室があります。その中に教育支援開発担当があり、ここにいる専任の職員がチームを作って、教育支援開発センターを実際に動かす組織として機能しています。ここに教員メンバーが複数名参画する形で、センターの活動を行っています。私たち教育支援開発センターを別称でセラデスと呼んでいます。これは **Center for research and development for educational support** の略です。長い英語タイトルの頭文字をとって読むことにしたものです。つい先程に、セラデスという言葉がどれほど使われているか、Google検索してみました。初めてやってみました。残念ながらトップは、以前スペインの代表選手だったサッカー選手で、画像の中の2つ目に本学のセンターが掲げているミッションについてのポンチ絵が出てきました。筆頭ではありませんが、インターネット検索で出てくるようになっているようです。

私立大学の場合、建学の精神があって、本学の場合2015年に創立50周年を迎えますが、現在の学長が教学の理念を表明しています。学長が交代するごとにメッセージを発信するのですが、京都産業大学では、どういう教学理念を掲げるのかがこういった形で発信され

ています。さらにはどの大学でも共通かと思えますけど、3つのポリシーを大学全体で掲げています。アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー。本学に独自の、あるいは全国の大学に普遍的に見られるような仕掛けを通して、大学としてどういった個性を発揮していくのか、あるいは大学としての基準を満たした教育の質を持っているのかどうか、全学的・組織的なFDを行うための動機づけになります。しかしながら従来は教職員一人ひとりにおいて、組織的なFDや全学的な授業アンケートに対する受けとめ方や感情に大きな差異があり、なかなか組織的な活動は浸透しにくいということがありました。これはどこの大学でもあった、あるいは今もあることと思います。今私が京都産業大学の建学の精神や教学の理念といったものを見ていただいた理由は、ここにあります。すなわち、本学独特の仕掛けとして建学の精神があり、さらに学長がリーダーシップの表れとして教学の理念があることで、大学としてどんな教育を提供するのかを考えるうえで大学構成員が共通認識とすべき概念があること、この点で国公立大学と比べると比較的教員職員が協力し合いやすいと考えたのです。私個人としては、国公立大から私立大学に移って、初めて現場での授業を恒常的に担当するようになりました。この状況下で私自身、この問題への考え方の内的変化があったことも大きな要因です。

京都産業大学のような私立大学でFDを組織的に実施する時に、どのような仕掛けが有効であるかを検討することはとても大事なことです。セラデスの機能は、学内で学生の主体的学習と教員の教育活動を活発で豊かなものに手助けをすることです。組織的なことをもうちょっと説明しますと、学長や部局長らが構成員である教育支援研究開発センター運営委員会があります。しかしながら、実質的には教育支援開発センターの事務担当者と教員メンバー+α、7,8名が構成するセンター会議がエンジンと歯車になって、日常的なFD活動の企画や実施運営を実行します。その下にぶら下がる形で、学部と大学院のFDを推進するワーキンググループ、高等教育分野の調査研究、あるいはその他のワーキンググループがあります。特に学部と大学院のFDを推進するワーキンググループは、今日の話題の中心である授業アンケートを円滑・効果的に実施するための会議体です。各学部の教員が、一人ずつ委員として参画しています。全学部の委員が、授業アンケートをどうするか、それをどう取りまとめていったらいいかを相談し議論する場として機能しています。大学には全学的なレベル、それから学部・部局のレベル、さらにはカリキュラム1つ1つの授業のレベル、3つのレベルがあります。より現場に近いところで授業の改善、満足度、学生の成長を促すようなよい仕掛けを相談しながら、現場のレベルとトップのレベルできちんと話をまとめていきながら進めていく機能としてセンターの働きが期待されているとして組織的FD活動を概念化しています。ここで3つのレベル、トップ、ミドル、ボトム、すなわち大学のトップ、理事会でのPDCAそれから学部単位のPDCA、さらには現場の授業が実際に行われている教育、学生が活躍するようなレベル。それぞれでPDCAがうまく機能する必要があるわけですが、加えて上下の異なるレベルを繋ぐ橋渡し役として、センターの機能が期待されています。なお教員メンバーとしては、現在は私と法学

部の先生が入っています。教員メンバーは、学部教員が担当する形になっており、センター専任の教員メンバーはおりません。加えて事務職員として、学長室課長が1名、さらに職員が8名で、現在11名でこのセンターの機能を担っています。

多様なFD活動

教育支援研究開発センターは、授業アンケートの他にもいくつかの全学的な取り組みを推進しています。そのうちのいくつかを紹介します。新任教員研修会を年に2、3回実施しています。毎年10数名、多い年では30数名を超えるような新任教員の方が毎年のように入ってこられます。私自身も新任教員として7年前に新任教員研修会に出席したわけです。冒頭で見ていただいたような本学の建学の精神、教学の理念、3つのポリシーあるいは具体的な授業の現場で行われているFD的な取り組みについて、その意図や実施・運営方法について先輩教員の声を聞く場となっています。また赤字で書いていますが、全学FD/SD研修会では、ここ数年は3つ、4つのテーマを重点的に扱っています。そのうちの1つ「障がい学生支援FD」は、障がい学生が受講する授業はどのようなものであるべきか、平成28年4月に施行される障害者差別解消法に謳われている合理的配慮とは何か、といったことがテーマです。高等教育フォーラムは、本学で行われている教育活動を論文やレポート等の形で学内外に発信する活動です。これは年1回発行しています。こうして新しく来ていただいた先生方に、本学を理解してもらう取り組みや最新の高等教育の流れをきちんと把握してもらって、日常的な業務にあたってもらうための研修会を行います。

また、授業アンケートをはじめとする、具体的な授業の現場における学生との向き合い方についても日常的に相談しています。そのひとつの示し方として教育支援開発センターの教職員メンバーが学部長あるいは学部長補佐がいるところに出向いて行って、それぞれの学部が抱えている案件、たとえば授業アンケートがカリキュラム改善にどう役に立つのか、について意見交換をします。個々の教員レベルだけではなく、学部レベルの教育の質の改善のための作戦会議として位置づけ、年間2～3回実施するようにしています。こうした取り組みにより、教員と職員、教員同士といった大学で働いている者同士での緊密かつ納得のいく合意形成を目指しています。

センターの主な事業、障がい学生支援を含めて真ん中の赤で書いている4つが、ここ2、3年の間に全学FD研修会で取り上げてきたテーマです。学生実態調査とあるのは行動観察を伴う質的調査の一種で、少人数の学生に調査対象として、その学生が大学での学びを含めて1日どんな活動をしたかを本人の了解を得て、数日間観察記録します。その結果をふまえて学生が現在抱えている悩みや将来への希望、そしてそれらのことと現在の学業成績やそれ以外の活動の成否との関係を明らかにします。そして、どのような施策によれば大学のディプロマ・ポリシーに則した学生の成長が見込めるのかを検証することを目的としています。

次はティーチング・アシスタント問題です。大学院生が担当するティーチング・アシス

タントが大学院生の経済的支援として機能するという話がありました。最近ではティーチング・アシスタントが大学院生の成長を促す仕組みに役立てることを前面に出すということが問題意識となっています。その際、ティーチング・アシスタントをどういうふうに導くべきなのか。あるいはティーチング・アシスタントを見守る指導教員であるとか授業の現場でティーチング・アシスタントを活用する教員は、どういったスタンスでティーチング・アシスタントとやりとりすべきなのかディスカッションする、そういう場です。

最後4つ目は全学ゼミ実態調査です。いろんな学部で比較的少人数の研究活動が授業科目として設定されています。たとえば3年次、4年次に特定の教授のところで、あるテーマについて卒業研究として掘り下げるのはどこの大学でもされていることだと思います。理科系学部比べて人数の多い文科系学部におきましても、少人数体制・ゼミ形式の初年次、2年次授業が多く開講されています。各学部でどのようなゼミ活動が行われているかを学内で広く共有して、同じ学部内でのFDだけでなく全学的FDに役立てる狙いで進めています。

さて、これからお話しする授業アンケートの話は、教育支援研究開発センターが大学全体のいくつかあるPDCAのサイクルのうち、現場に近いレベルでの支援、すなわちボトムとミドルをつなぐ支援としておこなっていることの話となります。「対話を重視した本学のFD活動」は重要なキーワードです。大学における3つのポリシーの策定の時には、全学の3大ポリシーと学部の3大ポリシーはどういう関係なのか。どういった文言が適切なのかの技術的なことも含めて、高等教育の場で3つのポリシーがどういうふうに使われているのかについて情報共有と意見交換をおこないました。3つのポリシーについては、今後、授業アンケート等を使って各学部カリキュラムおよび各教員の授業レベルで実際に教育活動がうまくいっているのか、最終的には学生のGPA等の基準等に照らして授業の質が保証されているといえるのかまで昇華させて検討する必要があると考えています。

本学のFD活動について、もう少し説明します。高等教育に関連した図書が閲覧できる部屋を設置しています。授業アンケートについて国内だけでなく、海外の大学等でどういった取り組みがされているのかについての情報がある程度ここで手に入る、そういう場所を設けています。そうした情報の中にある必要な情報を、各学部あるいは教員のレベルでニーズに応じて教育支援開発センターの方で取りまとめて、その内容を編集して提供するサービスもあります。このあたりはIR的機能として教育支援開発センターが担うべき領域、職務領域として問題意識を持ちつつあります。

本学には学生FDスタッフが存在します。3年前に発足した団体で、名前を燦(SAN)と言いますが、つい先日京都産業大学で、学生FDサミットが開催されました。これは学生FDスタッフが企画運営する年間行事として5年ほど前から、当初は立命館大学が主導する形で始まりましたが、今年の夏、第10回目に当たるサミットが開催されたところです。学生FDスタッフは、学生の視点で、大学の教育活動に提案・テコ入れをする。今ではそういうことだけではなく、広く大学として取り組むFD活動に学生の声を取り入れること。

彼らが主体的に取り組んだことに、京都産業大学共創プロジェクトという独自のイベントがあります。そこで教員と学生の授業に対する考え方の違いが明確化され、新しい授業アンケートの設問内容が変わる、といったことが実際に起こっています。彼らの活動が、教育支援研究開発センターの主導するFD活動や、理事会・部局長会レベルの意思決定などに彼らが参画する、授業アンケートの作成に関わる、といったことはまだありません。しかしながら彼等の活動状況・アクティビティは、今後そういうことがあってもいいのではと学内教職員が考えることを促しつつあります。

授業アンケート

本学が対話を重視したFD活動をしていることを再三申し上げてきましたけども、その具体的な事例として授業アンケートの話をさせていただきます。今日話している3つ目の話題になりますが、本学では対話シートと学習成果実感調査を1回ずつ、1つのセメスターの中で実施しています。対話シートは教員と学生の対話を促すための仕掛けとして機能させています。学習成果実感調査はカリキュラム改善に役立てるための機能を強く打ち出しているものです。

まず、授業アンケートが今の形式になった経緯についてお話します。先ほど学生FDスタッフが主催するイベントがきっかけとなり授業アンケートが変わった、と言いました。彼らが2010年度に実施した「第1回学生と教職員と一緒に考えるFDフォーラム」がもととなった話です。ここでは、学生が考えるよい授業とはどういうものか、教員側が考える良い授業とはどういうものか、について学生、教職員がそれぞれに意見を出し合ってまとめました。その結果出てきた声では、学生が考える良い授業の要件は授業の方法に優れていること、教員の考えるよい授業の要件は優れたコンテンツを持つこと、と意見が分かれました。どちらもないがしろにできない項目ですが、学生と教員でよい授業のイメージの違いが明確化したわけです。本来授業アンケートの意義は、狭い意味では授業内容を改善する、質を向上させる点です。これが、ある意味授業アンケートをきちんと行う動機づけになると思います。このフォーラムでは、日常的な授業の場で意思の疎通を図ることが教員と学生がお互いに授業を全うする上で大事なことだとする気づきが得られたわけです。

当時まで京都産業大学で行われていた学期末の授業アンケートでは、学生と教員のやり取りがあっても授業は終わってしまうわけで、タイミング的には対話・相互作用するには遅いわけです。アンケートの振り返りがあっても授業はもう終わってしまっている。そうではなくてもっと早い段階で教員と学生の対話を促すことで今まで得られなかった気づきを授業中に得て、教員も学生もよりよい学びを生み出すべきではないかとする問題意識が生まれたわけです。そこで学期内に1回であった授業アンケートのあり方を大きく変えるものとして新たに出てきたのが対話シートです。特徴ですが、対話シートの実施時期は授業が始まってから5、6回に限っています。そして、6週目に実施した場合は7週目にその結果を授業中に学生にフィードバックしてくださいと、先生方をお願いしています。

これが教育支援研究開発センターで作成した対話シートのフォーマットです。教授方法の質、授業の現場を学生はどのように感じているか等を問います。また、授業の内容をよく理解できているか、授業に興味があるか、など授業全体に対する印象を尋ねる形になっています。

対話シートについて、ここ2年間で私がデータを採った結果、どんな印象を持ったかをお話します。対話シートであまり印象の良くなかった点を改善するために、次年度の同じ授業で意識的に授業アンケートに対応した授業形式を取り入れたらどうであったか、という話です。生命科学系3年次の選択科目として腫瘍生物学（がんの生物学）を担当しています。一方的にしゃべって板書してビデオを見てもらってというような授業をしていました。特にこの科目に学びの必要性を感じていない人がいるとガックリきます。これが一人もいないと穏やかに楽しく授業が行えるのですが、レクチャー型の授業ですので、学生との対話もなく質問もあまり受け付けていません。こんなアンケートを使って意味があるのかなと自問自答するようなどころがありました。ましてや学生にはしゃべるなど言っていますから、学生同士のコミュニケーションは基本的にないことになります。しかしながらアンケートをとっているからには、アンケートのポイントの低いところを何か工夫するのも1つのFDかなと、次第に思うようになりました。

その次の年はここらへんがやっぱり低くて、ただこの年はみんなが授業を楽しく受けているような感じがありました。そういう年は何もやっていないのにスコアが高くなったりするんですね。ですからこれ自体あまり深い意味のあることだとは思っていません。やっぱりアクティブ・ラーニング的なものがないというのが欠点としてある、そういう気付きを得るために対話シートは有効だと思います。そういうわけで平成24年度はそのままスルーしましたが、平成25年度においては対話シート実施直後の授業で演習タイプの授業をおこなうことにしました。従来型の授業を何回かおこない、その上で学生たちが課外活動として調査するような仕掛けを用意して、学生たちが話し合わない先に進まない授業をおこないました。そうして、セメスターの終わりに学習成果実感調査を実施しました。

これはアクティブ・ラーニング的授業をやっていなかった年のもので、学部独自に設定した設問が3つ並んでいます。こういうデータを採ってみると、この年は大体平均点ぐらいの点数をとっていて、演習タイプの授業を導入したときにどうなったか。さほど満足度に影響しているとは思えない。演習形式の授業をとり入れたことの評価をこの設問だけでは拾えないと思ったので、自分で別紙を作って対話シートや演習タイプの授業についてどう思ったか聞いてみました。まず、対話シートがあまり役に立ったとは思わないという答えが出て、愕然としました。始めから特に問題はなかったっていうのがあって、だれがどういうふうに答えているのかは探れないしくみになっています。いろいろな声が上がってくるようになりました。演習タイプの授業に対しても、有意義だったと思う人もいれば、やりたくないと思う人もいるわけです。アクティブ・ラーニングを全員に一気にやろうとすると、それに対して壁を持っている学生も少なからずいます。つまり一定の方法を

とることが必ずしも全員にとってハッピーとは限らない。これはアクティブ・ラーニング形式であれ講義形式であれ同じことのようにです。

確かに対話シートを通して重要な気づきを得ることができましたし、自分なりに対応策をやってみることもできる。しかもそれに対する反響も手に入れることができる。授業アンケートという仕掛けを通して今までなかったような工夫の出し入れが学生との関係でできるようになる印象をここ2年間の取り組みで実感することができました。

学習成果実感調査

もう1つの授業アンケートとして学習成果実感調査があります。その特徴は授業の最後に実施することに加えて、シンプルな全学共通設問があることです。他は学部や先生個別の単位で自由に設計してもらい形になっていて、私の所属する総合生命科学部であれば、そこで決めた設問が並ぶことになります。教員の独自質問は学部で把握しません。全学共通設問と学部独自設問がこのアンケートの肝です。回答結果を各学部やセンターのカリキュラムがよく機能しているかを判断する材料に用います。教育支援研究開発センターは学部単位の調査結果を取りまとめて各学部に戻却して、次年度に向けてどのように取り組むかについてホームページで公表してもらっています。調査をやりっぱなしにするのではなく、次の年に役立てるために使ってもらっています。ですから、調査の内容については学部単位の問題意識や独自性が非常に重要です。本学には8学部と1センターがあり、それぞれの授業アンケートを作る上での方針を決めてもらっています。

学習成果実感調査で個人的にどんな取り組みができるのかを紹介させていただきます。私自身が担当している別の必修科目です。こちらからしゃべってばかりではなくて、学生にテキストを読ませてその中にある重要事項を抜きだして書いてもらう授業を去年半年間展開しました。そうすると学生の満足度はガタ落ちになりましたが、平均して成績は上がったので面白いなと思った事例です。例年シラバスを読んでいない学生が多かったので、90分間かけてシラバスを読みこむことを中心とする授業を初回時におこなってみました。読み書き中心の授業をおこなったときの対話シートデータがこちらですが、読み書き中心授業ではなかった前年度にくらべて満足度が非常に低くなっていくのがわかりました。授業の形態によって、そうした結果が出る。ただ満足度の成果とは裏腹に、彼らのその年度の成績は顕著に上昇しました。シラバスには「身に付く力」を書くことが学内的に義務化されています。学生自身が身に付く力の“付き具合”を授業後にどう振り返っているかも大事な問題であると、教育支援研究開発センターでは考えています。たとえば論理的思考力というものを学生はどうとらえているのか。こちらが教えていることがきちんと学生に反映されているのか。シラバスに基づいてきちんと振り返るためには何をしたらいいのか。

まとめ

ここからはまとめに入ります。対話シートで表れ始めている成果。なにがしかのやり取りをすることが互いのメリットになるとして、学内ではポジティブな声が上がってきています。一方で学期末に行う学習成果実感調査についても結果について学部単位で責任をもって振り返ってもらうことを当初からお願いしており、どのようなアンケートを実施したか、改善計画はどのような内容か、といったこと等も学内で共有・確認できるようになっています。これが総合生命科学部の改善計画の内容で、今後どうするか簡単ではありますが文言化されております。こういったものを作ることで、教育の質の保証を図るPDCAという地味で組織的に取り組みにくいことが本学では機能し始めてきているという状況です。学部単位のPDCAに授業アンケートが活用された、振り返りの中で見つかった良い授業は積極的に公開し共有するような仕掛けも用意しています。各学部のカリキュラムで何が大事なのかを明確化することに授業アンケートが役に立っているのではないかと考えています。ただし一方で、対話シート、学習成果実感調査の両方に対して教員からいろいろな問題点が指摘されています。スライド内容をご参照ください。

最後の数枚のスライドは、残り時間の都合上、2枚のスライドに絞って、お話します。現在行われている授業アンケートは、定期試験の間までの時間で対話シートと学習成果実感調査を実施するものとして位置づけられています。教員は、学生に対してシラバスに書いてある約束事を読んだ上で授業に出てきてもらいたいと考えています。しかし、これが授業の中でうまく位置づけられていないことが本学の抱えている問題点です。加えて成績評価は定期試験を受ける形で決定するわけです。学習成果実感調査が、学生がどのくらい学べたのかを問うものです。しかしながら、回答する学生は何を基準に実感を表明するのか。結果としての成績がまだわからない状態で調査項目に答えてもらっている現状に、わたしは制度としての矛盾を感じています。私自身はこの成績評価も明らかにされた上で授業全体を振り返る仕掛けが必要なのではないかと考えています。

これまで私が授業アンケートについて考えてきたことをまとめます。授業に参加した学生にとって当該のシラバスが授業を全うするために不可欠なものであることを明確化する。教員側は自分が用意したコンテンツをしっかりと注入できたのか、指導できたのかを成績に基づいて決める仕組みがあっているのではないかと。それから学生側からすれば、自分の最終成績を把握した上で、自らの学びの到達度を振り返る必要があるのではないかと。そうした相互の振り返りがあれば、アンケートを実施する主体である教員側にとってもメリットがあるのではないかとぼんやり考えています。こうしたイメージを具体化する施策はまだないのですが、授業のアンケートを通してあるいはセンターの中で意見を交換していきたいと考えているのが、今私個人が考えている問題意識です。大変時間を超過して申し訳ありませんでした。私からは話題・情報提供は以上です。ありがとうございました。

質疑応答

阿部：先生ありがとうございました。大変興味深いご講演でございました。私の大学と比較しますと、いろんな取り組みをしているなど感じました。そのさまざまな取り組みを通じてフィードバックしながら次の戦略につなげていくという意味で、非常に参考になりましたので、持ち帰って議論したいと思っています。何か質問ございましたらどうぞ。

小笠原：北海道大学の小笠原と申します。学生FDサミットの結果によると学生は授業のやり方に興味を持つのは大きな発見だと思いますが、なぜ学生はコンテンツに興味を持たないのか。学習した後で学生がある意味で自分のスキルの方に関心を持つのは当然でその後の問題として教員が働きかけることがあります。学生がコンテンツに対して興味を持たないのに、対話しようというのはやっぱり無理なんじゃないかと私は思います。そこに出てくる成績評価を含めて、コンテンツに依存した振り返りができないかというのは妥当だと思います。そういう意味で言いますと対話シートで授業の外形的なものをみせて問いかけるのではなくて、自分の内容に関して学生の反応を調べてそれからフィードバックをかけることが妥当ではないでしょうか。いろいろ方法はあると思いますが、文書に書かせると非常に時間がかかるわけですね。だからどこの大学のセンターでも実行していない。ですから私は問題の1つの解決としてはライティングさせて内容から学生の現状・実態を理解できるようなシステムを作る必要があるのではないかと考えています。そのようなシステムを構築するのが1つの方法ではないかと思っています。

佐藤：どうもありがとうございました。対話シートで教授法についてよい面について話をしましたけども、私自身もその手前にあるこの授業に面白味を感じているのか、この授業を理解できていると感じるのかとか抽象的な部分で、何を根拠に理解できているのかそこが私としては一番知りたいところですね。学生が書いたものをじっくり読まないで学生がどれくらい到達したのかを教員が見たことにならないんじゃないかと思っています。表向き理解できたかって質問に「はい」と答えることが多い中で、安心してはいけないという問題意識があります。わかっている中身を終わった段階で問うことができているのか。定期試験で問うやりかたを従来はしていると思うのですが、シラバスには書いていない文章力とか論理展開ができるとかといったところも見ることがある。では、どれだけできるのかがこれからの課題だと思います。

小笠原：ありがとうございました。対話シートの分析をしてそれを生かすにはかなり時間がかかったのではないかなど。このフィードバックの流れをどうしているのか。あくまで自分自身の事例ですが、実際にデータが出たときにデータを見てもらうのが学生にとってインパクトがあると思うので、次の授業の冒頭15分ぐらい時間をかけて、データを見てもらったお終り、もしコメントがあれば、個別に応えることはできますが、もらえるこ

とがあまりないので、表面的なものでは10分、15分くらいでフィードバックできます。さっきの質問にもあったように、どのくらい理解できたかっていうのを掘り下げるのは課題ですね。学生がどういうスタンスで答えているのかを含めて熟成できていない問題だと思います。

阿部：ありがとうございました。他にどなたかいらっしゃいませんか。ではもう1つだけ、学生のFDと教員のFDのマッチング。ミスマッチも起こるでしょうし、組織的なものもあるでしょう。すり合わせをどうやったらいいのかを具体的に教えていただければと思います。

佐藤：回答を持っているわけでは決してないんですけども、京都産業大学では半年に1回くらいのペースで学生と教職員が集まってディスカッションするイベントを、ここ2年、3年続けています。その場合に来る学生と教職員はそれぞれにFDに理解・関心のある方が多いので、あらかじめマッチングはうまくいくんですね。学生の視点からFD活動ができる、やっていったらこういうことになるっていうのをどういうふうに浸透させるかが一番難しく、これは声掛けで仲間を増やしていくしかないと思っています。きれいな広告をいくら作ってもあまり効果がなく、行ったことのある人が口コミでふれ込む。そういう動きができるかできないかだと思っています。

阿部：ありがとうございます。それでは時間もかなり超過しておりますので、今回の講演これでおわらせていただきます。

平成25年度 春学期 学習成果実感調査 教員返却シート 40/80

科目名 : 腫瘍生物学 履修者数 : 35
 担当教員名 : 佐藤 賢一 木曜日 1時限
 職員番号 : 3884 回答者数 : 30
回答率 : 85.71%

ノリが良かった年

設問3.この科目で学びの面白さを感じた。

□ 強くそう思う □ そう思う □ どちらともいえない □ あまりそうは思わない □ そう思わない

全体		出席率80%以上	
回答数	30	回答数	30
科目平均	4.50	科目平均	4.50
学部平均	3.78	学部平均	3.80

設問4.この科目の学習を通じて、知識を得たりスキルを伸ばすなど、自らの成長を実感することができた。

□ 強くそう思う □ そう思う □ どちらともいえない □ あまりそうは思わない □ そう思わない

全体		出席率80%以上	
回答数	30	回答数	30
科目平均	4.13	科目平均	4.13
学部平均	3.61	学部平均	3.65

設問5.総合的に見てこの科目に満足している。

□ 強くそう思う □ そう思う □ どちらともいえない □ あまりそうは思わない □ そう思わない

全体		出席率80%以上	
回答数	30	回答数	30
科目平均	4.17	科目平均	4.17
学部平均	3.78	学部平均	3.80

明らかに高実感?

腫瘍生物学 2013年度 まとめの試験(時間:50分間) 2013/07/24

【学習成果実感調査の別紙設問シート: 回答後、本紙ウラ面にテープで貼付け】

1. 5月におこなった対話シートは「対話」に役立ちましたか。

① そう思う **8** ② どちらともいえない **12** ③ そう思わない **10**

2. 1での答えが①あるいは②の場合、その理由を書いてください。

3. 自分にとって、対話シート実施後に授業はどうなりましたか。(複数可)

① 良くなった **3** ② 変わらなかった **7** ③ 悪くなった **2** ④ わからない **5**
 ⑤ はじめから特に問題はなかった **17**

4. 3での答えが①あるいは③の場合、その理由を書いてください。

5. 総じて、対話シートは授業の一コンテンツとして効果的でしたか。

① そう思う **8** ② どちらともいえない **20** ③ そう思わない **1**

41/80

腫瘍生物学 2013年度 まとめの試験(時間:50分間) 2013/07/24

50

【学習成果実感調査の別紙設問シート：回答後、本紙ウラ面にテープで貼付け】

1. 5月におこなった対話シートは「対話」に役立ちましたか。

- ① そう思う **8** ② どちらともいえない **12** ③ そう思わない **10**

あれ～？

2. 1での答えが①あるいは②の場合、その理由を書いてください

3. 自分にとって、対話シート実施後に授業はどうなりましたか。(複数可)

- ① 良くなった **3** ② 変わらなかった **7** ③ 悪くなった **2** ④ わからない **5**
 ⑤ はじめから特に問題はなかった **17**

それはどうも

4. 3での答えが①あるいは③の場合、その理由を書いてください。

5. 総じて、対話シートは授業の一コンテンツとして効果的でしたか。

- ① そう思う **8** ② どちらともいえない **20** ③ そう思わない **1**

42/85

6. 講義中盤におこなった新聞記事を使った演習・プレゼン合戦について(複数可)。

- ① 有意義だった **21** ② 有意義でなかった **1** ③ 楽しかった **12** ④ 辛かった **4**
 ⑤ またやりたい **8** ⑥ もうやりたくない **0**

7. 講義終盤におこなった英文総説を使った演習・プレゼン合戦について(複数可)。

- ① 有意義だった **14** ② 有意義でなかった **1** ③ 楽しかった **5** ④ 辛かった **23**
 ⑤ またやりたい **4** ⑥ もうやりたくない **8**

8. 上記4および5のような演習について。

- ① 講義とのバランスが良かった **12** ② もう少し講義が多いほうが良い **6**
 ③ 講義だけのほうが良い **2** ④ もう少し演習が多いほうが良い **1**
 ⑤ 演習だけのほうがよい **1** ⑥ わからない **8**

9. 上記8での答えが①～⑤の場合、その理由を書いてください。

10. この試験の予想される成績(100点満点)を書いてください。

43/80

6. 講義中盤におこなった新聞記事を使った演習・プレゼン合戦について（複数可）。

- ① 有意義だった ²¹ ② 有意義でなかった ¹ ③ 楽しかった ¹² ④ 辛かった ⁴
 ⑤ またやりたい ⁸ ⑥ もうやりたくない ⁶

7. 講義終盤におこなった英文総説を使った演習・プレゼン合戦について（複数可）。

- ① 有意義だった ¹⁴ ② 有意義でなかった ¹ ③ 楽しかった ⁵ ④ 辛かった ²³
 ⑤ またやりたい ⁴ ⑥ もうやりたくない ⁸

8. 上記4および5のような演習について。

いろいろインパクトあったようですね

- ① 講義とのバランスが良かった ¹² ② もう少し講義が多いほうが良い ⁶
 ③ 講義だけのほうが良い ² ④ もう少し演習が多いほうが良い ¹
 ⑤ 演習だけのほうがよい ¹ ⑥ わからない ⁸

どちらかだけよりは良いみたいですね 理由を書いてください。

10. この試験の予想される成績（100点満点）を書いてください。

44/80

京都産業大学「授業アンケート」の特徴（2）



2) 学習成果実感調査

(1) 目的：①学生による自分の成長の実感に関する自己評価を行う。
 ②京都産業大学として提供すべき授業の質が実現されているか否か等の現状を把握し、学部・センターでのFDやカリキュラム改善等に活用する。

(2) 実施時期：第14週目～第15週目

(3) 対象科目：各学部・センターの方針に基づき選定する。

(4) 調査設計：①全学統一設問（出席率、シラバスの活用状況）
 ②学部独自設問、③教員独自設問

※各学部・センターのカリキュラム改善・プログラム改善に有用となるよう、実施方針、対象科目の選定、設問内容の設計を、学部等教授会で検討・決定、実施している。

(5) 報告：集計結果を、各教員（担当科目分）、学部長、学部FD/SD推進ワーキンググループ委員、学部長補佐（以上三者には当該学部分）に返却し、「結果分析および改善計画」を学部長が作成し、実施計画から結果分析・改善計画までの一連の流れをHPに公開する。

45/80

京都産業大学

60

平成 25 年度 秋学期
「教員 — 学生間の授業に関する対話シート」

このアンケートは、授業の進め方について、学生との対話を促進することを目的とするものです。なお、このアンケートは成績には一切関係がありませんので、率直な回答をお願いします。※学生証番号は、担当教員の指示がある場合に記入してください。

担当教員名	佐藤
科目名	薬生生物学
学生証番号	

1. [授業理解]
この科目の内容をよく理解できていると感じる。
a. そう思う **34** b. どちらともいえない **59** c. そう思わない **3**
2. [授業への興味]
この科目の内容に学びの面白さを感じている。
a. そう思う **40** b. どちらともいえない **48** c. そう思わない **7**
3. [授業技術]
以下の各項目のうち、この授業に該当するものについて、「良い」「普通」「改善を希望する」のいずれかに○を記入してください（該当しないものは無回答で結構です）。

	良い	普通	改善を希望する（希望する場合は具体的に）
① 教員の話し方	71	26	2 ()
② 授業の進め方	58	40	1 ()
③ 授業の進む速さ	53	43	3 ()
④ 板書やパワーポイント資料	70	29	0 ()
⑤ 教材（教科書やプリント）	79	20	0 ()
⑥ 音響・映像資料	61	34	1 ()
⑦ 私語対策	45	51	0 ()
⑧ 教員と学生のコミュニケーション	38	58	0 ()
⑨ 学生どうしのコミュニケーション	41	51	1 ()

55/80

京都産業大学

平成 25 年度 秋学期
「教員 — 学生間の授業に関する対話シート」

このアンケートは、授業の進め方について、学生との対話を促進することを目的とするものです。なお、このアンケートは成績には一切関係がありませんので、率直な回答をお願いします。※学生証番号は、担当教員の指示がある場合に記入してください。

担当教員名	佐藤
科目名	薬生生物学
学生証番号	

1. [授業理解]
この科目の内容をよく理解できていると感じる。
a. そう思う **34** b. どちらともいえない **59** c. そう思わない **3**
2. [授業への興味]
この科目の内容に学びの面白さを感じている。
a. そう思う **40** b. どちらともいえない **48** c. そう思わない **7**
3. [授業技術]
以下の各項目のうち、この授業に該当するものについて、「良い」「普通」「改善を希望する」のいずれかに○を記入してください（該当しないものは無回答で結構です）。

	良い	普通	改善を希望する（希望する場合は具体的に）
① 教員の話し方	71	26	2 ()
② 授業の進め方	58	40	1 ()
③ 授業の進む速さ	53	43	3 ()
④ 板書やパワーポイント資料	70	29	0 ()
⑤ 教材（教科書やプリント）	79	20	0 ()
⑥ 音響・映像資料	61	34	1 ()
⑦ 私語対策	45	51	0 ()
⑧ 教員と学生のコミュニケーション	38	58	0 ()
⑨ 学生どうしのコミュニケーション	41	51	1 ()

読み書き重視型で
傾向が逆転？

56/80

平成25年度 秋学期
「教員 — 学生間の授業に関する対話シート」

このアンケートは、授業の進め方について、学生との対話を促進することを目的とするものです。なお、このアンケートは成績には一切関係がありませんので、率直な回答をお願いします。※学生証番号は、担当教員の指示がある場合に記入してください。

担当教員名	佐藤
科目名	薬生生物学
学生証番号	

1. 【授業理解】

この科目の内容をよく理解できていると感じる。

a. そう思う **34** b. どちらともいえない **59** c. そう思わない **3**

2. 【授業への興味】

この科目の内容に学びの面白さを感じている。

a. そう思う **40** b. どちらともいえない **48** c. そう思わない **7**

読み書き重視型で
傾向が逆転？

3. 【授業技術】

以下の各項目のうち、この授業に該当するものについて、「良い」「普通」「改善を希望する」のいずれかに○を記入してください（該当しないものは無回答で結構です）。

	良い	普通	改善を希望する (希望する場合は具体的に)
①教員の話し方	71	26	2 ()
②授業の進め方	58	40	1 ()
③授業の進む速さ	53	43	あまり変わっていない
④板書やパワーポイント資料	70	29	0 ()
⑤教材 (教科書やプリント)	79	20	0 ()
⑥音響・映像資料	61	34	1 ()
⑦私語対策	45	51	2 ()
⑧教員と学生のコミュニケーション	38	58	こちらに逆に改善？
⑨学生どうしのコミュニケーション	41	51	1 ()

57/80

シラバスを使ったイントロダクション (1回)

授業中の読み書きを毎回点検する授業 (2~5回)

試験と振り返り (5~6回)

対話シートの実施 (6回)

授業中の読み書きを毎回点検する授業 (7~14回)

試験と振り返り (9~10回、14~15回)

成績の振り返りと学習成果実感調査 (15回)

58/80

シラバスを使ったイントロダクション（1回）

授業中の読み書きを毎回点検する授業（2～5回）

試験と振り返り（5～6回）

対話シートの実施（6回）

授業中の読み書きを毎回点検する授業（7～14回）

試験と振り返り（9～10回、14～15回）

成績の振り返りと学習成果実感調査（15回）

59/80

平成24年度 秋学期 学習成果実感調査 教員返却シート

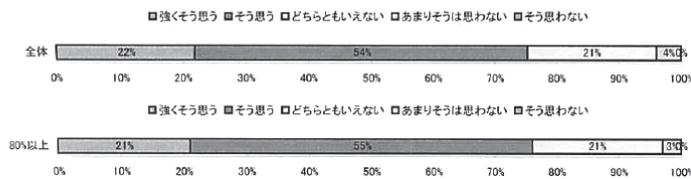
科目名 : 発生生物学
 担当教員名 : 佐藤 賢一
 職員番号 : 3884

月曜日 1時限

履修者数 : 88
 回答者数 : 78
 回答率 : 88.64%

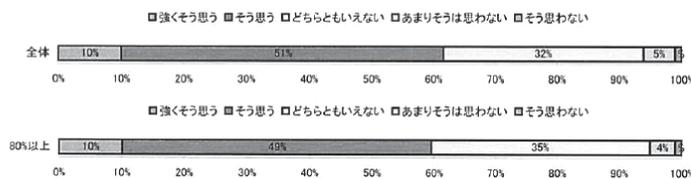
従来型の講義形式中心

設問3.この科目で学びの面白さを感じた。



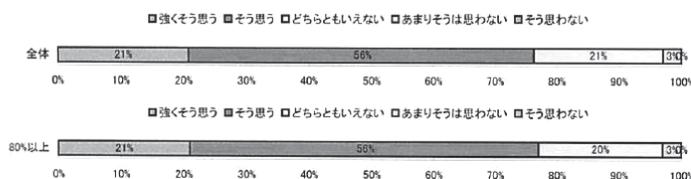
全体		出席率80%以上	
回答数	78	回答数	71
科目平均	3.94	科目平均	3.94
学部平均	3.75	学部平均	3.76

設問4.この科目の学習を通じて、知識を得たりスキルを伸ばすなど、自らの成長を実感することができた。



全体		出席率80%以上	
回答数	78	回答数	71
科目平均	3.64	科目平均	3.62
学部平均	3.62	学部平均	3.64

設問5.総合的に見てこの科目に満足している。



全体		出席率80%以上	
回答数	78	回答数	71
科目平均	3.95	科目平均	3.96
学部平均	3.77	学部平均	3.80

60/80

平成24年度 秋学期 学習成果実感調査 教員返却シート

61/80

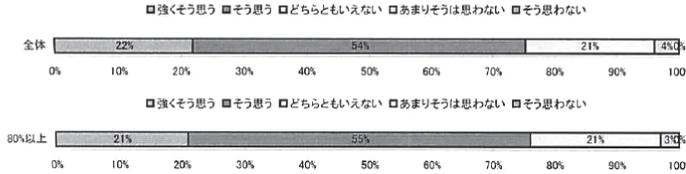
科目名 : 発生生物学
 担当教員名 : 佐藤 賢一
 職員番号 : 3884

月曜日 1時限

履修者数 : 88
 回答者数 : 78
 回答率 : 88.64%

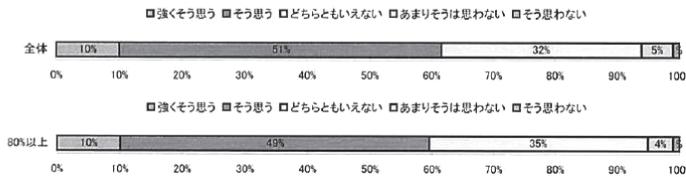
従来型の講義形式中心

設問3.この科目で学びの面白さを感じた。



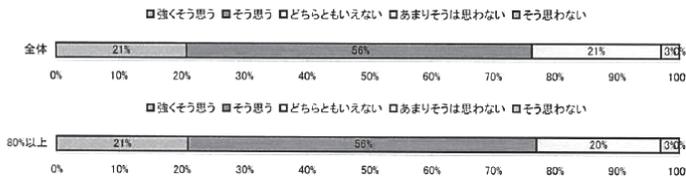
全体		出席率80%以上	
回答数	78	回答数	71
科目平均	3.94	科目平均	3.94
学部平均	3.75	学部平均	3.76

設問4.この科目の学習を通じて、知識を得たりスキルを伸ばすなど、自らの成長を実感することができた。



全体		出席率80%以上	
回答数	78	回答数	71
科目平均	3.64	科目平均	3.62
学部平均	3.62	学部平均	3.64

設問5.総合的に見てこの科目に満足している。



全体		出席率80%以上	
回答数	78	回答数	71
科目平均	3.95	科目平均	3.96
学部平均	3.77	学部平均	3.80

とても平均点な状態

平成25年度 秋学期 学習成果実感調査 教員返却シート

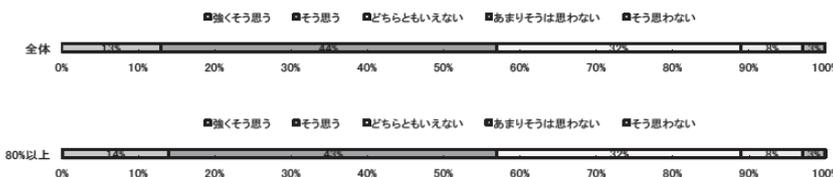
科目名 : 発生生物学 / 発生生物学 I
 担当教員名 : 佐藤 賢一
 職員番号 : 3884

月曜日 1時限

履修者数
 回答者数
 回答率

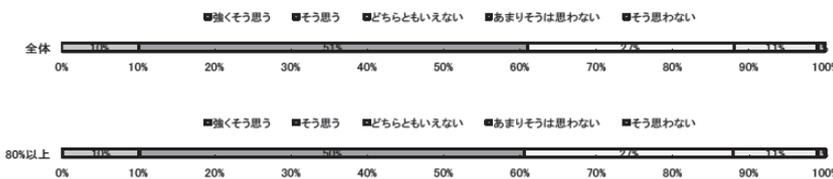
新しい読み書き中心型

設問3.この科目で学びの面白さを感じた。



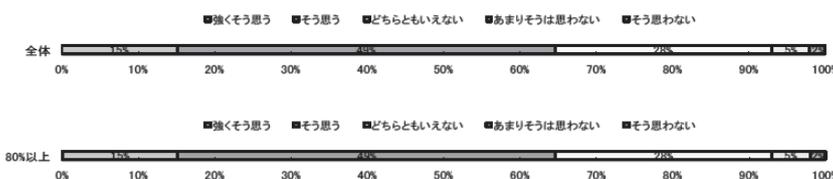
全体	
回答数	98
科目平均	3.56
学部平均	3.81

設問4.この科目の学習を通じて、知識を得たりスキルを伸ばすなど、自らの成長を実感することができた。



全体	
回答数	98
科目平均	3.58
学部平均	3.73

設問5.総合的に見てこの科目に満足している。



全体	
回答数	97
科目平均	3.71
学部平均	3.84

62/80

平成25年度 秋学期 学習成果実感調査 教員返却シート

科目名 : 発生生物学 / 発生生物学 I
 担当教員名 : 佐藤 賢一
 職員番号 : 3884

月曜日 1時限

履修者数
回答者数
回答率

設問3.この科目で学びの面白さを感じた。

新しい読み書き中心型

全体	
回答数	38
科目平均	3.56
学部平均	3.81

設問4.この科目の学習を通じて、知識を得たりスキルを伸ばすなど、自らの成長を実感することができた。

全体	
回答数	36
科目平均	3.58
学部平均	3.73

設問5.総合的に見てこの科目に満足している。

**(やっぱり?)
平均点を下回る
満足度の低下**

全体	
回答数	37
科目平均	3.71
学部平均	3.84

63/80

【教員独自設問】(担当教員から指示があった場合回答すること)

設問6. 論理的思考力(主に学習力)は身に付いたか。

- 参考資料から引用すべき箇所を見つける力、正確に引用する力、
- 長時間にわたり、読み書きをおこなう力、
- 複数の情報源を用いて、その中にある共通項や相違点を読み取る力、など。

5 4 3 2 1

設問7. 態度・志向性(主に規律性)は身に付いたか。

- 毎回の授業を健全な状態で受けることができるように準備を怠らない、
- 授業中に眠くならない、注意散漫にならない、などの集中持続ができる、
- 授業の前後に必要な学習を意識的に取り組むことができる、など。

5 4 3 2 1

設問8. 本授業を受ける前とくらべると、今は主体的に学べるようになった。

5 4 3 2 1

設問6.(担当教員から指示があれば、その質問に答えて下さい。)

全体	
回答数	89
科目平均	4.24

	1	2	3	4	5	回答数	無回答	回収数	科目平均
【設問7】態度・志向性(主に規律性)は身に付いたか	0	8	27	38	17	90	9	99	3.62
【設問8】本授業を受ける前とくらべると、今は主体的に学べるようになった。	1	5	29	43	11	89	10	99	3.65

64/80

京都産業大学「授業アンケート」の特徴（3）

3) 「対話シート」であらわれ始めている成果

- (1) 各教員の問題意識に応じ、実施内容・方法に教員独自の様々な工夫が見られるようになった
- ・ 学生生活を把握するための意識調査（大人数講義）
 - ・ 学習に困難をかかえている学生の早期発見・個別対応（語学科目）
 - ・ moodleを活用したリアルタイム集計およびフィードバック
- (2) 丁寧にフィードバックする教員の姿勢が、クラスの活性化に繋がった
- ・ 集計結果とその対応策を記したレジュメの配布・解説（大人数講義）
 - ・ 「学生がオープンに色々反応してくれたので、クラス全体の雰囲気は非常によくなった」（少人数講義）

「教授法を評価するもの」から「学習を促進するもの」へ

- ・ 学生と対話をしながら授業を進める風土の醸成
- ・ クラスの活性化 ・ 「やらされ感」の軽減

65/80

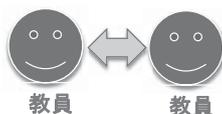
京都産業大学「授業アンケート」の特徴（4）

4) 「学習成果実感調査」であらわれ始めている成果

- (1) 各学部の重点プログラム・課題等が「見える化」され、既存の取組が調査結果と連動した、より一層実質的なFD活動になりつつある

- 「学部による公開授業&ワークショップ」（毎年秋学期実施）
学習成果実感調査結果を活用し、学部の課題に応じたFD活動が行われるようになった。

文化学部の事例： 講義科目における事前事後学習、双方向性の促進ポイントの高かった教員数名から、授業の実践事例を紹介してもらい、学部教員間で共有し、意見交換を行った。



66/80

京都産業大学「授業アンケート」の特徴（5）

4) 「学習成果実感調査」であらわれ始めている成果

(2) 結果分析・改善計画報告を学部長の責任においてweb公開することで、教育の質保証、教育情報の公開の仕組みを構築しつつある

実施すること自体が目的化されていた授業アンケートが、各教員の授業改善や学生の学びの促進、学部のカリキュラム改善・改革に活用するための重要なツールになりつつある。

- ・各学部の重点プログラム、課題の明確化、具体化
- ・組織的FDの実質化
- ・教育の質保証

67/80

京都産業大学「授業アンケート」の課題

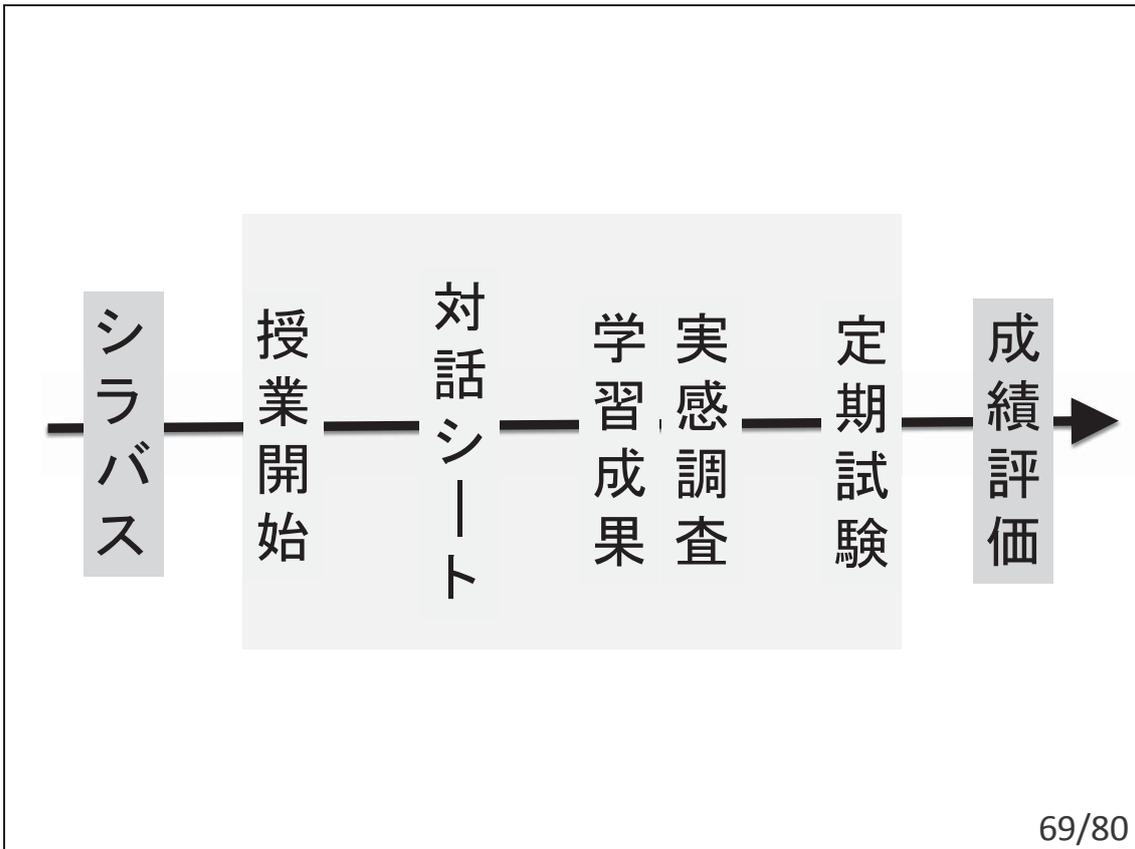
1) 「対話シート」における課題

- ・結果から何が学べるのかが不明瞭な設問
- ・少数意見の扱い
- ・専任教員と非常勤教員のあいだでの認知度の差
- ・同じ設問（特に講義技術）を毎年問うことへの疑問

2) 「学習成果実感調査」における課題

- ・学部の学位授与方針や教育目標と個々の授業科目の関係
- ・授業の到達目標・身につく力（シラバス）と学習成果の関係
- ・成績や教員側の「指導成果実感」との関係
- ・この調査を行うことによる学生側のメリット

68/80



69/80

4. 1 教員として実感するFD活動の意味と意義

学習成果実感度と成績評価の関係
(学生にとっての客観的要素の導入)

学習成果を含む授業全般の振り返り
(教員による指導成果の振り返り)

70/80

4. 1 教員として実感するFD活動の意味と意義

指導成果を振り返ろう！

↓

ではどのように振り返るのが良いか？

↓

まずはデータが必要

↓

授業の実施状況、アンケート、成績・・・

↓

**必要と思われる事柄・データはなにか！？
みなさん、ノート・メモ用紙に書き出して
みてください！**

71/80

4. 1 教員として実感するFD活動の意味と意義

授業アンケートにおける課題の解決むけた京都産業大学の取組み

課題を発見する(例:学部からの報告書、教育支援セでの議論など)

課題を共有する(例:FDSD推進WG、学部まわり、各種研修会など)

課題を解決する(例:教務・カリキュラム、高等教育調査・研究WGなど)

授業アンケートの目的は何か？

その目的は十分に果たされているか？

他の取組と授業アンケートはどのように関係しているのか？

例：建学の精神・教学の理念・3つのポリシー、シラバス、
成績評価、（教員評価）

72/80

4. 1 教員として実感するFD活動の意味と意義

授業アンケートにおける課題の解決むけた京都産業大学の取組み

課題を発見する(例:学部からの報告書、教育支援セでの議論など)

課題を共有する(例:FSDS推進WG、学部まわり、各種研修会など)

課題を解決する(例:教務・カリキュラム、高等教育調査・研究WGなど)

授業アンケートにかかわる課題をどのように共有し、
取り組んでいるか

上記の3つの取組を通してみる対話を重視した
課題共有のアプローチ

「～してください」から「手伝わせてください」
そして「学ばせてください！」へ

73/80

4. 1 教員として実感するFD活動の意味と意義

80

授業アンケートにおける課題の解決むけた京都産業大学の取組み

課題を発見する(例:学部からの報告書、教育支援セでの議論など)

課題を共有する(例:学部まわり、FSDS推進WG、各種研修会など)

課題を解決する(例:教務・カリキュラム、高等教育調査・研究WGなど)

3つのポリシーと連動させたカリキュラム改革、
カリキュラム全体像の見える化

京都産業大の学生像を知る量的および質的調査
ゼミ・研究室活動の実態調査

学びのポートフォリオ、ループリック、ラーニングコモンズ

学生FDスタッフが企画・実施する
学生・教員・職員の相互ディスカッション

74/80

シンポジウム

テーマ

「北海道におけるFDの現状」

シンポジスト

北海道科学大学	副学長・FD委員長	有澤	準二
札幌大学		准教授	堀江 育也
旭川医科大学教育センター	FD・授業評価部門長	教授	吉田 成郎
北海道大学		教授	細川 敏幸

司会

北海道大学高等教育推進機構		教授	細川 敏幸
---------------	--	----	-------

3. シンポジウム 北海道におけるFDの現状

3.1 北海道科学大学のFD活動

北海道科学大学 副学長・FD委員長 有澤 準二

細川：みなさんおはようございます。IDE大学セミナー2日目でございますが、早い時間からお集まりいただきましてありがとうございます。今日初めていらっしゃる方もいらっしゃるのでは会場の方に少し説明させていただきます。まず座席は、お名前が書いてある札が置いてありますのでそちらにご着席ください。ネームプレートが席上にあると思いますが、シンポジウム終了後、机の上に置いて帰ってください。それから封筒に入った資料ですが、講演資料、プログラム、それから発表者の資料の3つが入っていると思います。参加者名簿、入会案内それから昨年度のこの大学セミナーの報告書があると思います。IDEの説明をさせていただきます。このIDEは普通の学会と異なりまして、入会していただきますと、ほぼ毎月雑誌が送られてきます。大学改革の進行具合をテーマごとに選んで記事にしております。レビューをする場合もあります。教育改革、大学運営にお困りの方は是非入会していただきたいと思っております。バックナンバーは1年分ほど受け付けております。今回のテーマ、FDに関する号もあります。今年の4月号ですね。今回のセミナーで発表していただいた一橋大学の落合先生、京都産業大学の佐藤先生のFDについて記されてありますので是非興味がある方はご購入いただければと思います。

それでは本日のシンポジウムの案内をさせていただきますと思います。昨日は道外の2つのFDについてお話をうかがったのですが、今日は道内のFD、特に新しい試みをしている所の先生方をお願いしてお話をうかがいたいと思います。お一人の発表時間は15分ほどを予定しております。発表後に質問を受け付けます。終わりましたら休みを取って発表者の方全員に並んでもらいまして、質問する時間を設けたいと思っております。それではプログラムの順番に進めてまいりたいと思います。北海道科学大学副学長有澤先生からお願いいたします。

有澤：北海道科学大学副学長の有澤です。本日はよろしく願いいたします。今細川先生からご紹介をいただきましたけれど、新しい試みということでご指名をいただいたのですが、私たち北海道科学大学はこの春に北海道工業大学から学校法人名も変えた北海道科学大学となった関係もございまして、新しい試みというよりは法人全体が新しい試みをしておりますので、その状況をお話するしかないということでございます。今日はその辺

のお話をさせていただいて、本学としてどんな動きをしているのかご紹介していこうと思っております。

北海道科学大学の構成

これまで本学は3月まで創生工学部、空間創造学部、未来デザイン学部、医療工学部という4つの学部がございまして、そして今年の4月からこういう3つの学部に変更をいたしました。キャッチコピーとしては「+Professional」というもので、この色はちょっと移し方によっていろいろ違うのですけれど、この横のバーにありますこの色ですね。こういうスクールカラーから赤色に変わりました。ビジョン(実学系総合大学です)を一新していると、まあそういうところがございます。恐縮ですが紹介しておかないと、FDの関係でご理解いただけないので宣伝をさせていただきます。工学部は5学科、保健医療学部は5学科、この黄色の未来デザイン学部が2学科となっております。この4月から新しく変わっております。

これは本学学校法人の北海道科学大の構成を示しております。学校法人としましては90年を今むかえております。平成36年になりますけれども、この百年をめざしているのが今のところの状況であります。このなかで北海道科学大学は3学部12学科に変わって、これから北海道薬科大学の建物が完成します。来年度の4月に手稲前田のキャンパスに移転してまいります。学校法人本部も中の島のほうから前田のほうに移ってきました。今目指しているのは、実学系総合大学を目指しているということです。まだキャンパスは中の島にございますが、北海道自動車短期大学はすでにこの4月から北海道科学大学短期大学部と名称変更してこのキャンパスに移設しております。残りの高校と自動車学校につきましては検討中という段階で計画を進めています。

2024年の百年に向けて、こういうグランドビジョンを掲げました。これは基盤能力と専門性を併せ持つ人材を地域とともに発展させていく北海道ナンバーワンの実学系総合大学に発展するというものでありまして、プラスプロフェッショナルのプラスは基盤能力という意味でございます。これはシンボルのHなのですが、短期大学、科学大学、薬科大学、高校という学校の教育方針ながら、末広がり広がっていくという意味合いも含んでおります。この4月から基盤能力と専門性をもつプロフェッショナルを作り上げていきます。今流行のゆるキャラも本学は作ってございまして「かがくがおー」という名のかわいいマスコットです。ネコライオンの赤ちゃんみたいな、そういうキャラクターで、手稲区のでいぬ君と一緒にいろいろなところに出動する状況になっております。

北海道科学大学のFD

早速ですが、北海道科学大学のFDということで説明させていただきます。これは委員会の構成で、FD委員会というものを作っており、副学長が委員長を兼任しております。それで副委員長の一人は教務を兼務している教授で、自己点検の幹事長も副委員長でございます。委員会としては各学科から12名選出しております。これは資料を出しましたので見

ていただければと思います。事務局が3人業務を手伝ってくれまして、データの解析等で一人情報技術の専門員が解析してくれているというもので、こういう構成でございます。それから就職支援センターはオブザーバーで入っております、卒業した学生が就職後どういうふうに通っていて、現状はどのようになっているかということを追跡調査していくものでございます。そしてアンケートを集めていただいて、FD委員会にフィードバックして教育効果が卒業生に対して実践できているのかどうか検証するということを考えております。

FDの効果と環境、そしてFDを進めていくために現状はどうなっていくかということの2つを分けずにやることはできませんので、研究業績の「見える化」というものを行いました。まず大学全体の教員がどういう動きを持って何のスペックを持っているかということ「見える化」することを考えておりました、だいぶ前からこれを行っております。だいたい完成しましたので、今本来のFDの状況に改善を要求することに着手しようということなのです。「見える化」について説明いたしますと、こういう風に教育研究、社会貢献、総合的貢献というように、ABCDEという5項目を定量的に評価するポイント制度というものを導入し、それをデータチャートで評価していくものです。これは北見工業大学さんのやり方を勉強させていただいて取り入れたものです。それを2010年あたりから準備してトライアルしながら、だいたいそういうふうな動きをしました。これは全ての項目を表にしたものですが、教育活動の場合ですと学部、大学院、修士の学生、博士の学生が学会でどのような発表をしたか、賞を受賞したのか、大学院でどのような指導を行ったのか、それには賞があったのかなかったのかななどをポイント化しました。これを集めていって最終的にはポイントの点数となりますけれどもAであるとかBであるとかCであるとかDであるとか5,4,3,2,1という5段階評価によって最終的な評価を行う仕組みでございます。それでそういうものをレーダーチャートで教育、学術、大学、社会貢献、総合評価の5項目評価を行い、チャートで示しながら先生方がお互いの立っている位置を客観的に理解した上で、FDを行う点でどのようなステージかを考えている次第であります。FD委員会でこれまで重点的に北海道工業大学（北海道科学大学）の改革として実務的な教育を続けてまいりましたので、実務的社会的教育の実践という点は、ある程度できておりました。これからもこの計画は続けていくつもりですが、あと、これに何ができる学生に育てるかということ記述できるかについて考慮していきたいと思っております。工学系ですと何ができるかということ、漠然と「これはできる」というものはあったのですが、現代流に言いますとそれはなかなかきちんとイメージできない。ということもありまして、これからどうするかということについていろんな資料を集めました。工科系ですとか保健医療系とかは、ある中間目標の到達度を証明していくことはそう難しくはないのですが、それは大学としての認識で、それをどう評価していくかということになりますので、現在の課題でございます。

アンケートの解析

今日は時間の関係もございまして、佐藤先生の方からお話がありましたけれどもアンケートをどうやって解析していくかということについてお話しさせていただきます。本学は今年度から授業参観を始めました。この話をさせていただくとともにニューカリキュラム計画の評価として、補習教育の効果を検証するために毎年1回全学FD題材に取り上げてその効果を皆さんに共有していただくことをやっておりますが、今回は時間の関係上割愛させていただきます。授業参観はFDとは違うのではないかという考えをお持ちの方も多いと思いますが、本学の考え方がございます。授業内容が浸透していないためとする反省のもとに立って、委員会が発動しています。留年率につきましてはほしい5パーセント以内にとどめるようにあらかじめ各学科に協力依頼し、学科の責任として留年率を低減させていこうと思っております。けがとか病気とかの留年率の相関関係は明らかでございませぬ。

授業評価の一環として、成績評価についてはGPAの話などがございます。本学としましてはこの7年間GPAを使ってまいりました。特にQfGPAというさらに特殊な算出方法を採用しております、一科目に良い点がつきますとそれが大きく評価に反映されるようなGPAを作っております。これはなかなか先生方、学生ともに理解が得られず、今年からはシンプルなGPAにしております。この点とシラバスの点検は、FD委員会として大学院の授業を含めて点検する制度を導入しています。このヒストグラムは授業アンケートの結果をウェブで表現したものです。また、コメント欄はこういう風にやってほしいというコメントを必ず載せて公開いたしますので、それで学生との会話を成立させる仕組みになっております。アンケートの内容ですが、授業の目的は理解できたか、できないかという風にだいたいの感じをみていただきますと、よくできた、まあまあできた、のところ集中してしまうのは、アンケートの仕組みとしていいのかどうかわかりかねるところではございますが、ある先生の科目を例としておりますので、すべての科目がこうなっているということではございません。授業内容を振り返って分量はよかったのであろうか、説明は明快であったのか、先生の対応はどうだったのかということを一学的に統一しております。それから、アンケート項目を追加する仕組みにもなっております。これは長いので読んでいただく必要はないのですが、先生が科目によってつけたコメントの例です。工学概論については工学に関するセンスを身に着けることということで初めていますから回答では97パーセントが授業科目の目標を達成できたといっています。そして9パーセントの学生が分かりにくいといったことや12パーセントの学生は努力していないと回答した。先生としては興味関心を高めて自主的な勉強を喚起させることです。コメントの集計では全科目の先生が、今の所FDで催促して、95パーセントですが、ちょっと足りない状況です。これはそういう授業アンケートの項目Q3、Q5、Q6、Q11を抜き出して解析したものです。授業内容は理解できましたか、教員の説明は理解しやすいものであったか、それから教員は学生の質問に対して適切に対応していたか、総合的に判断してあなたはこの

授業に満足していますか、といった重要な項目だけを取り出して、1点から3点の重みづけをしたものです。これも最大値は3となるのですが、そうはならない科目についてです。1点以下、これはちょっと厳しいですが、どんな項目についてもよく理解できないと評価されたものです。そういうことでその項目の教科がここに示されてございますが、1.5ですからこれにちょっと特徴がありますね。これはいいか悪いかという問題ではなくて、こういう評価を残しておいてカリキュラムの再編に利用するというを必ずやっていただく。それをただ改良したものではなくて、このポイントを平均と考えると、2に近づけるためにはどうすればいいのかっていう対策を示してからFD委員会に報告することになっています。

これは先ほども申しあげましたが授業アンケートを基に授業参観を始めておりますが、これは3科目限定です。12学科ありますので最大36科目の授業講座がありまして、基本的にこれは学科の先生の時間が空いている場合、所定の参観シートに丸を付けるという簡単なものです。例えばこれは字が小さいのですが、シラバスに沿った授業を展開しているかどうか、最後には学生の取り組みが適切であったかをチェックしてコメントとして提出しています。これは昨年からやっております。3年ほどやっておりますと学科の指導要領が参観できますので、それが終わった段階で期間を決めて一般公開しようという状況です。これは授業改善のルールのお話ですが授業参観をやりまして、授業アンケートが数値化されていますので数値に沿って学科のカリキュラム再編の議論を行い、改善策を必ず報告する。その際に学長も必ず参加するという中で、教員はもうちょっとやってくださいということで、それを自己点検に回して最終的に学長、副学長に申告します。授業改善を行いましたという内容のものでこれをぐるぐると回して改善策を実施するよう努力しています。授業評価の所でプラスプロフェッショナルとは何ぞやという話について基盤能力だと話しました。これについては時間の関係で失礼させていただきます。

専門科目と教養の1, 2年生の科目がありますが、評価の基準はこういう内容に分類して力がついているかということ点を点検していきます。本学としましてはGPAを利用して退学勧告をすることにいたしました。というのはGPAが2セメスター連続で1未満をとった場合は指導がはいります。これは最初の指導ですので、そうとう厳しくいたします。次に3セメスターで警告が入って最後に4セメスターで退学勧告します。これじゃしょうがありませんという風になるわけでありまして。これはこの4月から実施しております。

全学FD

次は全学FDを含めたFD回数でございます。これは昨年の例ですが71回と数だけはそこそこ行っておりますが、数自体を評価はしないことにしております。ここにありますように全学FDは6回あります。この6回が計画的なところですね。こういうところが中心となって発動してそれに沿った内容でやっていただく。大学院を含めていろいろなことをやって報告をあげてもらっております。これは全学FDの昨年の題材です。今年は新任教職員がたくさん採用に成りました。毎年、新任教職員には建学の精神に始まり、運営管理、

教育や情報システムなど定番のガイダンスを行います。また大学は今変わっておりますので、学長から直接、大学の目標を設定してもらおうという話をしております。

それから学士教育課程については昨年全部入れ替えました。教育の効果を測定するという意味でたまたま工学系の教育には工学教育協会という教育に関する制度がございますので、教育士を取るということも1つの目標に設定しております。すいませんが時間が超過してまいりました。これが学部のFD、これが学科のFDの題材となりまして、資格・英語教育、アクティブ・ラーニング、授業公開の3点これは今年から医療系カリキュラムができましたのでその辺の話です。シラバスで予習復習の提示とその検証についてのお話をさせていただきました。まとめですが、点検をしながら、人間力、社会力というプロフェッショナルを目指した教育の内容、本学の建学の精神であるヒューマニティーとテクノロジーの融合ということで、2つの研究所を作り、研究面でもリードを目指しています。教育は教育、研究は研究としてメリハリを付けて、そういう方針でやっていこうと思っています。これで終わらせていただきます。ありがとうございました。

細川：それでは質問をお受けいたしたいと思うのですが、どなたかご質問のある方はいらっしゃいますでしょうか？それでは織田先生お願いいたします。

織田：どうもありがとうございました。今日の説明で確認したいところがあるのですが、評価配点標準とはどういったものなのでしょうか？

有澤：これはアンケートとかかわることなのですけれど、こういうことをうたって点数をつけています。定期試験とかレポートの評価をしているときにこういう項目を何で検証していくかということです。これは割合を示してまして、その割合でたとえば専門科目の場合は40点分しか見ません。残りは応用力です。合計100点で評価します。今後のシラバスの採点基準です。それでその内容を説明するだけで詳細は省略してしまったものからご理解いただけなかったかもしれませんが、そういうものをレポートで見ますとか小テストで見ますとか中間試験で見るとか定期試験で見るとかその割合も考慮します。

細川：では有澤先生どうもありがとうございました。
続きまして札幌大学の堀江先生に発表をお願いしたいと思います。よろしくお願ひします。

北海道科学大学のFDについて

2014年8月29日

副学長・FD委員長

有澤 準二



© 2013 Hokkaido Institute of Technology All Right Reserved.

4月より北海道科学大学へ名称変更

北海道工業大学
(平成26年3月まで)



創生工学部
空間創造学部
未来デザイン学部
医療工学部

学校法人
北海道科学大学

北海道科学大学
工学部
保健医療学部
未来デザイン学部



+Professional

© 2013 Hokkaido Institute of Technology All Right Reserved.

2

北海道科学大学 (812名)



- ・超高齢化社会の到来を前に医療スタッフの養成急務
- ・膨大な医療費(約40兆円)の抑制
- ・工学的センス(効率、経済性、安全性など)が医療スタッフには必要

2000年の学部学科改組以降の課題
(創生工学部、空間創造学部について)

- ・学部・学科名称をシンプルに
- ・日本では工場の海外移転が進む中、
時代の変化に対応した教育

工学部: 機械工学科 92
(392名) 電気電子工学科 80
情報工学科 90
建築学科 80(学部変更)
都市環境学科 50(学部変更)

保健医療学部: 臨床工学科 70(名称変更)
(290) 義肢装具学科 50(定員増)
看護学科 80(新設)
理学療法学科 40(新設)
診療放射線学科 50(新設)

未来デザイン学部 :
(130名) :メディアデザイン学科 80

* 既存学科はカリキュラム改訂を伴う
人間社会学科 50

学校法人

北海道科学大学

H26年 法人90年
H36年 100年

前田 キャンパス

北海道
薬科大学

H27年4月 6年制

北海道科学大学
(3学部12学科体制)

H26年4月～

H36年(法人100年)までに 北海道科学大学に統合
目指す

法人本部の移転
H25年8月～

実学系総合大学

H26年
北海道科学大学
短期大学部
27年移転

北海道尚志
学園高校

北海道自
動車学校

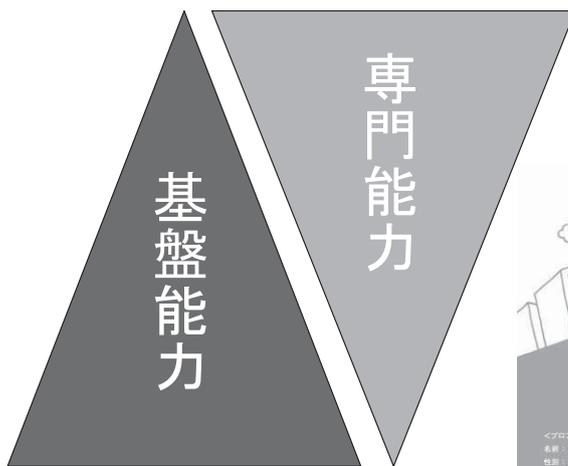
中の島キャンパス

100周年(2024)ブランドビジョン



基盤能力と専門性を併せ持つ人材を育成し
地域と共に発展・成長する
北海道No.1の実学系総合大学を実現する

+Professional



かがくガオー



北海道科学大学のFD

FD委員会構成

16名

委員長:副学長

副委員長:学生支援センター長
:自己点検評価委員会幹事長

委員:各学科から12名

オブザーバー:就職支援センター長

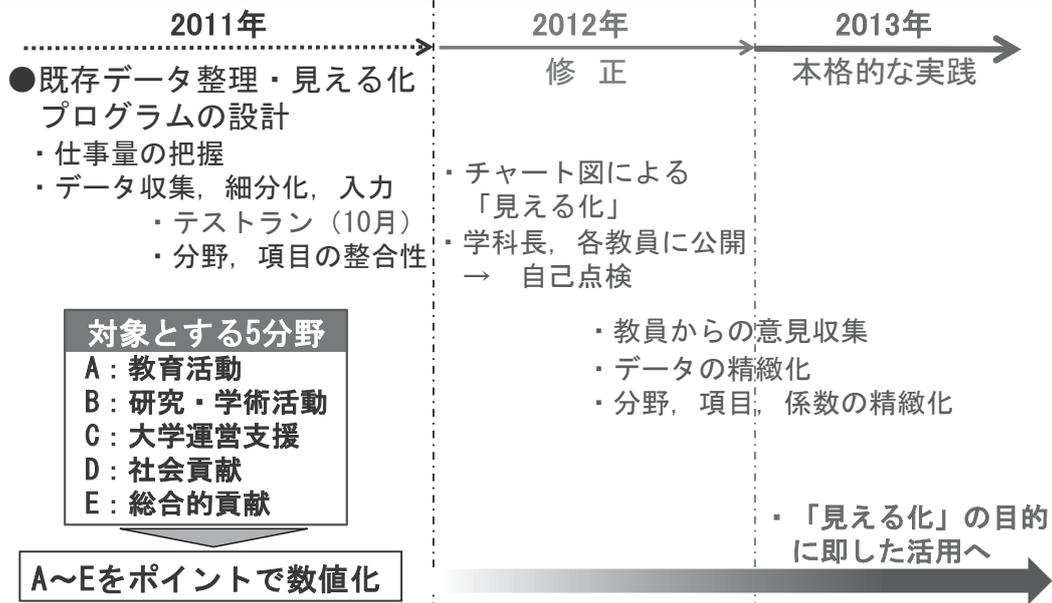
FDのための大学環境の把握

・教育研究業績の見える化

- ・授業参観
- ・授業アンケート
- ・シラバスの点検
- ・Active Learningの実践
- ・その他

改善を要する

「教員業務・業績の見える化」の実践



「業績の見える化」の数値化事例 (2012年度版)

A: 教育活動

A-1: 教育活動, A-2: 研究指導, A-3: その他

項目詳細	数値化の方法
A-1-1 学部授業	2×(コマ数)
A-1-2 大学院授業と履修者数	2×(コマ数), 履修者なしは0
A-2-1 卒論学生指導数	0.8×(指導人数)
A-2-2 修士課程学生指導数	4×(指導人数)
A-2-3 博士課程学生指導数	12×(指導人数)
A-2-4 学生の発表指導(主たる指導者で, 受賞無, 国内)	2×(発表数)
A-2-4 学生の発表指導(主たる指導者で, 受賞有, 国内)	1.5×2×(発表数)
A-2-4 学生の発表指導(主たる指導者で, 受賞無, 国外)	4×(発表数)
A-2-4 学生の発表指導(主たる指導者で, 受賞有, 国外)	1.5×4×(発表数)
A-2-4 学生の発表指導(その他の指導者で, 受賞無, 国内)	1.5×(発表数)
A-2-4 学生の発表指導(その他の指導者で, 受賞有, 国内)	1.5×1.5×(発表数)
A-2-4 学生の発表指導(その他の指導者で, 受賞無, 国外)	3×(発表数)
A-2-4 学生の発表指導(その他の指導者で, 受賞有, 国外)	1.5×3×(発表数)
A-3-1 その他	委員会でポイントを決定する

「業績の見える化」のレーダーチャート

閲覧に制限(教員→個人, 学科長→学科教員)



© 2013 Hokkaido Institute of Technology All Right Reserved.

11

FD委員会活動

1. 各分野の専門家による実務的、体験的な教育の実践
2. 「学位授与の方針」に沿って「何ができる学生か」を明示し、実践
3. 「授業改善アンケート」の抜本的改善と授業公開のフィードバック
4. 授業参観と「学科カリキュラム編成会議」を制御
5. リメディアル教育、専門教育などの定量的測定方法
6. 退学・留年率の対策
7. 成績評価と学修の質の保証」マニュアルの点検
8. シラバス点検

© 2013 Hokkaido Institute of Technology All Right Reserved.

12

授業アンケートのWeb画面

授業改善のためのアンケート

アンケート管理【教員用サービス】

科目コード: 311320 科目名: 工学概論 曜日・講目: 前期/火曜日(講時1(402)) 校番: 00R 形態: 講義 集計結果: [ヒストグラム] 実施期間: 2014/06/23~2014/07/29

選択	科目コード	科目名	曜日・講目	校番	形態	コメント	集計結果	実施期間	実施期間
<input type="radio"/>	311320	工学概論	前期/火曜日(講時1(402))	00R	講義		[ヒストグラム]	2014/06/23~2014/07/29	2014/06/23~2014/07/29
<input type="radio"/>	311318	工学概論	前期/火曜日(講時3(402))	00R	講義		[ヒストグラム]	2014/06/23~2014/07/29	2014/06/23~2014/07/29
<input type="radio"/>	411429	工学概論	前期/火曜日(講時4(406))	00R	講義		[ヒストグラム]	2014/06/23~2014/07/29	2014/06/23~2014/07/29
<input type="radio"/>	414402	医学概論	前期/火曜日(講時4(425))	00R	講義		[ヒストグラム]	2014/06/23~2014/07/29	2014/06/23~2014/07/29
<input type="radio"/>	511542	工学概論	前期/火曜日(講時5(402))	00R	講義		[ヒストグラム]	2014/06/23~2014/07/29	2014/06/23~2014/07/29
<input type="radio"/>	611842	工学概論	前期/火曜日(講時6(416))	00R	講義		[ヒストグラム]	2014/06/23~2014/07/29	2014/06/23~2014/07/29
<input type="radio"/>	612618	特別工学	前期/火曜日(講時6(631))	00R	講義		[ヒストグラム]	2014/06/23~2014/07/29	2014/06/23~2014/07/29
<input type="radio"/>	912618	特別工学	前期/火曜日(講時6(631))	00R	講義		[ヒストグラム]	2014/06/23~2014/07/29	2014/06/23~2014/07/29

科目名 コメント ヒストグラム

授業アンケートのWeb画面

授業改善のためのアンケート

集計結果【教員用サービス】

科目コード: 411842 科目名: 工学概論 実施期間: 2014/06/23~2014/07/29

回答数: 18人

共通設問

設問	回答	割合
1) 授業の目的に記載されている「授業の目的」は理解できましたか。	1.理解できた	31%
	2.ほぼ理解できた	67%
	3.理解できない	2%
2) 授業の目的に記載されている「達成目標」を達成できそうですか。	1.達成できそう	28%
	2.ほぼ達成できそう	69%
	3.達成できそうにない	3%
3) 授業内容は理解できましたか。	1.よく理解できた	20%
	2.ほぼ理解できた	67%
	3.理解できなかった	4%
4) 授業内容の分量は適当だと思いますか。	1.ちょうど良い	60%
	2.多すぎる	37%
	3.少なすぎる	1%
5) 教員の説明が聞き取りやすいものですか。	1.大変わかりやすい	20%
	2.大體わかる	70%
	3.わかりにくい	9%
6) 教員は学生の質問などに適切に対応していましたか。	1.適切に対応していた	30%
	2.ほぼ適切に対応していた	65%
	3.適切に対応していない	5%
7) あなたは授業中、授業内容に集中していますか。	1.いつも集中している	22%
	2.大體集中している	73%
	3.集中していない	4%
8) 授業でわからないことがあるとき、自分で調べたり人に聞くなどして、解決するための努力をしていますか。	1.積極的に努力している	20%
	2.必要に応じて努力している	67%
	3.努力していない	12%
9) この授業で新しい知識や技術を習得できましたか。	1.習得できた	28%
	2.ある程度習得できた	66%
	3.習得できなかった	6%
10) この授業によって視野が広がり楽しみが深まりましたか。	1.大いに広がった(深まった)	26%
	2.ある程度広がった(深まった)	66%

2014年度前期「工学概論」授業アンケート結果について

科目担当者

「工学概論」は、機械システム工学科、電気デジタルシステム工学科、建築学科、都市環境学科、ならびに医療福祉工学科の5学科の学生を対象とした科目で、シラバスにもある通り「技術と工学との関りおよび工業分野における一般的包括的な内容について、考え方の基礎から応用面までについて学び、エンジニアとして身に付けておくべき素養と工学的センスを身につける」ことを授業の目的としています。

授業アンケートには98名からの回答があり、結果を見ますと授業の達成目標に関しては「達成できそうだ」、「ほぼ達成できそうだ」が合わせて97%とほとんどの受講者が目標達成できたと自己評価しており、また授業の内容理解については「よく理解できた」、「ほぼ理解できた」が合わせて96%と同様に高い理解度を得ることができました。

他の回答結果を見ても全体として高い評価を得ることができたと考えられますが、あえて述べるならば「教員の説明は明快でわかりやすいものですか？」に対して9%の学が「わかりにくい」と回答していたこと、また「授業でわからないことがあるとき、自分で調べたり人に聞くなどして、解決するための努力をしていますか？」に対して12%の学生が「努力していない」と回答していました。

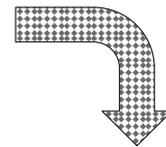
上記の回答結果を踏まえ、来年度の授業実施に向けた授業改善として、専門分野外の学生にもよりわかりやすい授業展開を心掛けるとともに、学生のさらなり興味・関心を高め、自主的な学習・努力を喚起させる授業実践をはかっていきます。

© 2013 Hokkaido Institute of Technology All Right Reserved.

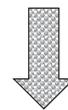
15

授業アンケートの指数データ

学年	科目コード	科目名	回答数	Q3	Q5	Q6	Q11	4項目平均値	全平均値
1	4015	基礎物理学	73	1.452	1.507	1.904	1.534	1.599	0.797
1	4303	力学基礎演習	48	1.563	1.458	1.813	1.646	1.620	0.807
2	4520	建築構造力学Ⅱ	24	1.833	1.833	1.917	1.875	1.865	0.929
2	4530	建築構造力学Ⅱ演習	22	1.909	1.864	1.909	1.864	1.886	0.940
3	4611	住宅設備	17	2.000	2.000	2.059	2.059	2.029	1.011
3	4707	住宅設備	17	2.000	2.000	2.059	2.059	2.029	1.011
3	4806	住宅設備	17	2.000	2.000	2.059	2.059	2.029	1.011
2	4530	建築構造力学Ⅱ演習	36	2.083	2.139	2.222	2.222	2.167	1.079
2	4530	建築構造力学Ⅱ演習	36	2.083	2.139	2.222	2.222	2.167	1.079
2	4010	日本国憲法	46	2.087	2.152	2.283	2.152	2.168	1.080
2	4520	建築構造力学Ⅱ	49	2.041	2.102	2.408	2.146	2.174	1.083
2	4520	建築構造力学Ⅱ	49	2.041	2.102	2.408	2.146	2.174	1.083
1	4404	情報処理演習Ⅱ	109	2.174	2.110	2.294	2.174	2.188	1.090
平均値				1.944	1.954	2.120	2.012	2.007	



学科カリキュラム編成会議の資料



必ず改善策を示して報告

Q3 : 授業内容は理解できました

Q5 : 教員の説明は明快でわかりやすいものです

Q6 : 教員は学生の質問に適切に対応していました

Q11 : 総合的に判断して、あなたはこの授業に満足しています

各回答: 1~3点

© 2013 Hokkaido Institute of Technology All Right Reserved.

16

成績評価と質の保証」の基本フレーム

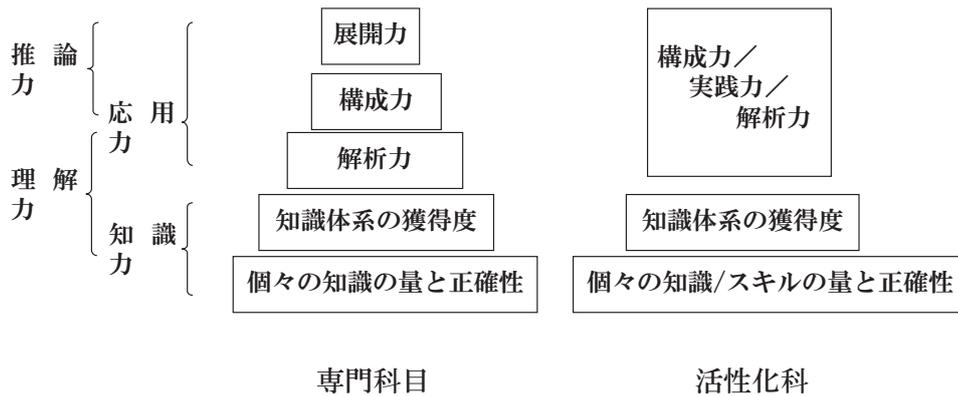
1. 本学における「成績評価と質の保証」の目的：プロフェッショナルへのいざない

2. 望ましい成績評価

+Professional

- 得意専門分野を見つけ易い成績評価
 - 専門適性のスペクトルを知りやすい成績評価
 - 得意分野を活かす知力のレベルを把握しやすい成績評価
 - プロフェッショナルとしての教養レベルを把握しやすい成績評価
 - 達成感を獲得しやすく意欲を湧出しやすい成績評価
 - それ自体で「学修の質の保証」の一端を担い得る成績評価
- 基礎能力**

評価配点標準



[社会側(要約的)表現]

[教育者側(分析的)表現]

GPA(Grade Point Average)の計算方法

$$\text{GPA} = \frac{\text{科目(単位} \times \text{GP)の総和}}{\text{履修登録総単位数}}$$

GP:

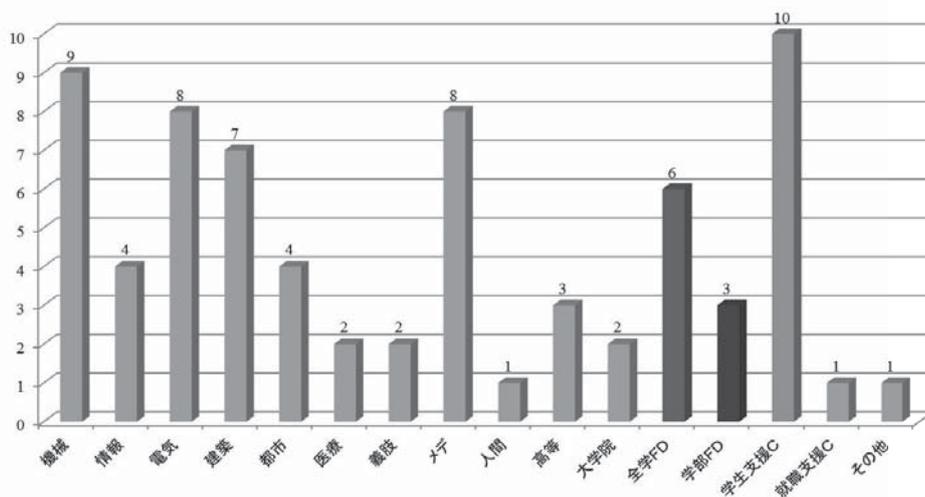
S:4	90~100点
A:3	80~90点
B:2	70~80点
C:1	60~70点
D:0	50~60点

* 科目の上限:各セメスタ24単位。臨床工学:28単位。義肢装具学:30単位

GPA-Sによる質の保証策(安易な登録はさせない)

- A. GPA-Sが1.00未満の者は、クラス担任により指導:最初が肝心
- B. 2セメスタ連続してGPA-Sが1.00未満の者は、学業成績郵送時に学科長名の注意
- C. 3セメスタ連続してGPA-Sが1.00未満の者は、学業成績を保護者に郵送に学科長名で警告書
- D. 4セメスタ連続してGPA-Sが1.00未満の者は、退学勧告

平成25年度学科別FD実施状況(71回)



全学FDの内容

- ・平成25年度新任教職員研修会
- ・平成25年度の大学運営について(目標設定)
- ・新入生学力調査と教育効果の測定について
- ・競争時代における事務職員が担う役割について
- ・学士課程教育の構築に向けて
- ・教育力の向上を目指して～教育士制度の概要～

学部FDの内容

- ・多様化する入学生に対する基礎教育について
—新学部新学科を見据えたこれからの基礎教育とは—
- ・創生工学部が目指す資格教育について
その2—情報工学科が目指す資格教育—
- ・授業公開・参観の実施結果と今後の授業改善について

学科FDの内容

- ・学科推奨各種国家資格に関する平成25年度の取り組み
 - ・英語教育の在り方について:シラバスの検討
 - ・アクティブラーニングへのアプローチ
- H25前期の授業公開・参観を終えて
- ・大学における医療系カリキュラムの特徴
～看護師養成課程を例にして～
 - ・シラバスの予習・復習の記載と検証について

まとめ

- ・FDの現状点検中
- ・平成26年4月; 学士教育課程を刷新
問題解決型、人間力、社会力など強化
+Professional
- ・ヒューマニティとテクノロジーの融合(建学の精神)

寒地環境エネルギーシステム研究所
寒地ヒューマンサポートシステム研究所

ご清聴ありがとうございました。

3.2 学生と共に考えるFD

札幌大学 准教授 堀江 育也

堀江：それではわたくし堀江が札幌大学の取り組みに関してお話をさせていただきたいと思えます。ではよろしくお願ひいたします。

本学のFDの取り組みに関しては、教員改革の取り組みとかいろいろあります。今日の内容としましては、学生FDの取り組みを中心にお話をさせていただければいいかなと思ひます。本研究会に大学間連携で昨年山形大学の小田先生が特別講演で大地連携ワークショップという内容でお話しされていたと思ひますけれども、札幌大学がどのように関わっているかそのあたりのお話もできればと思ひております。

学生参加FDとサツトーーーク

本学では2008年から学生と共に考えるFDが始まっております。そのきっかけとなりました山形大学の翼への加盟をきっかけに、アンケートFDから動くFDという形で始まっております。2008年にアンケート型のFDとして、ウェブでアンケートを実施したことがありました。ウェブ型のアンケートは2007年、2008年ということでやってきましたが、そのFDが進まないということで、2008年から本学では学生を取り入れたFDを進めてまいりました。札幌大学は良い大学になることができるということを知らせたい学生がいることを、当時のFDアンケートをやっておられた先生方が知ったことがきっかけだとおっしゃっておられました。学生FDの組織化をおこなったのは2008年からです。2008年における教員サイドの活動といたしましては本学が初めての授業公開があります。この公開授業は私がつるし上げられたのですけれども、私のほかにもう1人と、2人で公開授業をやりました。公開授業をするだけではなくて、ここにありますように公開授業後の検討会に学生が参加して、学生からの意見を聞いたということが2008年にありました。うちの大学は早くから学生と一緒に考えるFDという方針の下で進んでまいりました。同年2008年に学生FD委員会というものが誕生いたしまして、通称「おこし隊」ということで呼ばれたのであります。全国的には学生FDというのはこれだけありまして、2013年度では60大学が学生FDを持っているということでさらに増えていっている状況にあります。ここに昨日お話があった京都産業大学が入っていないのですけれども、その京都産業大学をいれると61大学になり、ほかにもいろいろと増えていっている現状であります。本学の学生FDの活動といたしましてはいろいろやっておりますサツトーーーク、おこし隊、学生発案型授業「スキサポ」「サツナビ」「授業マナーマナーNG集」などいろいろやっておりますが、

この発表ではサットーークと学生発案型授業サポート「スキサポ」について少し詳しくお話しさせていただきたいと思っております。サットーークといいますのは学生、教員、職員のしゃべり場ということであるテーマを基にしていろいろ考えるということを学生委員が企画して考える場であります。では今までどのようなことが話されてきたかといいますと、2009年度は三つのテーマで行われました。こんなことについて語り合おうとかこんな授業があったらいいのにとということなどです。このあたりが先ほどもちょっとお話ししましたけれども、発案型の授業につながるきっかけになったということができると思われます。2010年には気になる学生マナー、あなたが楽しいと思った授業、よい授業を作るために私たちができること。これも先ほど申し上げたような楽しい授業につながるのだということで、これがアンケートについてです。授業評価アンケートを生徒たちと一緒に教職員もともに考えるものです。その後サットーークは2012年、2013年とテーマを申し上げますと年に3回やっていたのですけれども、だんだん2回となり、1回となり、だんだんとトーンダウンしました。教員との調整が難しいという問題があるといえます。学生FDが企画をいたしましても教員の集まりがなかなか悪くなっているというのが現状で、今後の課題でもあります。札幌大学としては学生と一緒に対話する場を用意しているというのが特徴であると思っております。そしてサットーークを通して見えてきた学生の現状は、サットーークをやらなくても学生の声は聞こえるのかもしれませんが、けれども、学生といろいろ話してみますと、やはり学生からの壁がある。学生がなかなか教員と話すきっかけがないとこともあげられます。さきほどの授業のアンケートに改善点があったとしても、教員に伝わらないため改善につながらないだとかいろいろな声が聞こえてきました。そこでサットーークのもととなったアンケートの見直し。それは山形大学のつばさネットワークに加盟した時にいろいろな大学が参加している共通アンケートのフォーマットを利用し、アンケートをしていたんですけれども自分の大学に合っていないようなものがありました。つばさネットワークには加入しているのですけれども、アンケート独自のフォーマットに切り変えております。それは2008年ごろだったと思います。その時に学生の声を反映させながらアンケートの質問項目を考えたとすることがあります。あと中間アンケートですね。学期末のアンケートですとどうしても自分が受講しているときにフィードバックされないもので、中間アンケートを現在実施しております。京都産業大学のほうで対話シートという用紙が示されていますけれども、うちのほうは3項目ですね。これはシンプルに自由記述だけでできております。あとは学期末アンケートで、中間アンケートでいろいろ出した内容が、学期末にきちんと改善されていたかどうかを確認するようにしております。

そのほかに「054 (おこし) カフェ」ですね。「054 カフェ」というものもやっております。これは学生と教員の対話する場ということで、カフェということで実際にコーヒーを飲みながら対話ができる場です。常設はできてないのですけれども、学生と教員の壁をとりはらうためにそういう場の形成にも学生FDが中心となって設ける試みを実践しております。来てなかなか学生同士であるとか教員同士であるとか職員同士にどうしてもなっ

てしまうので、そこに何かきっかけを与えなければなりません。そこで去年は特技を持っている職員さんに、手品とかを見せてもらいながら学生達と一緒に話したりだとか、野球好きな先生がおりまして教員は研究者としてどのように野球観戦しているのかなど学生自身に話してもらったり。そういう仕掛けづくりをしながら学生との授業以外でのコミュニケーションの場というものを学生FDが企画してやっております。

学生発案型授業

そのほかにサットーークを通して見えてきた学生の学びたいことも見えてきました。具体的にどんなことかといいますと、学生発案型授業というものをやっております。通称「スキサポ」といいます。この発案型授業につきましては2009年にプレ講義ということで、FD 委員長をやっておりました、亡くなってしまわれたのですが、梶浦先生がプレ講義を実施いたしまして、「賢い消費者になろう」が始まりでした。2年間にわたり、実際に正式に単位認定される科目として2011年に発案型授業が開始されました。ここに関しても学生が発案型授業の企画から実施まで積極的に活動しております。生徒主体で展開することができるように活動することになりました。どのような形で開講になるかといいますと、最初1年目は全学にアンケートを配りまして、どのような授業を受けてみたいのか、授業の募集をします。内容が不十分な点、明らかに問題があるものを選別してリストを教員に配り、どなたか担当できませんかと投げかけます。教員と調整してうまくいった場合は発案者の学生に連絡を取ります。2年目に今度はプレゼンを行いまして、どんな講義を受けてみたいのかということを投票し、1案に絞って決定し、そのあと教員と学生でシラバスづくりを行います。決まった授業案は、教員だけでシラバス作りをするのではなく、発案者となった学生も一緒にシラバスを作成するというところまでやっております。その3年目に授業を開始ということで発案型授業が実施されます。ここにあるようにこの授業は単位化されておりまして2単位で、今はアクティブ・ラーニングの科目の一つです。発案型授業に関しましては2年サイクルで行っておりまして、1年おきに新しいテーマを募集し、2年間その発案型授業を実施するというをやっております。その後は、新しい授業にどんどん変えていく形式をとっております。本学のほかに岡山大学様も発案型授業をやられているのですが、いい授業を残していくようなやり方で実施しています。しかし本学は2年行ったら終了します。

第1回目の授業案は「北海道の政治学」で、発案型授業としてはとてもまじめな題名がついています。2年目は1年目に比べて一度取った学生はとりませんので減少しました。2回目の2013年ですね、このときは「映画における現代社会」です。これは映画のDVDを授業で使いましていろんな映画から現代社会を学ぶというものでした。これはとても人気の授業となり、195名の学生が受講する結果となりました。学生の評価といたしましては授業後に行われるアンケートをみましても普通の科目の平均点あるいはそれ以上の得点となりました。ここからみると学生にとってニーズがあるというか魅力ある科目が展開され

ていることが言えると思います。今は第3回目の授業を計画中なのですが、今までの授業は1人の教員が15回担当するという形式をとっていたのですが、今回の教員のマッチングを行ったところ、15回は難しいということになりまして、3回か4回くらいなら何とかかなという意見が出ました。これからどのような形でやっていこうかということで話し合いが行われて、オムニバス形式がいいのではという案が出ました。次回は複数人の教員で担当するという形になるものと思われまます。このあたりにつきましても今後よく考えていかなければならないのかなと思っております。

このような授業の案につきましてもなかなか集めるのが難しいと思います。今回は50案から70案ですかね、それくらい集まりました。アンケートにつきましても、ある教員に授業中にアンケートを配ってもらいました。従来はアンケートを学生が良く集まる場所において自由に記入してもらった形式をとっていたのですが、そうするとなかなか学生のほうが気付かないであるとか、授業案を引き受けてもよいという教員が出てこないということがあります。今回もある教師に頼み込んでアンケート用紙を回収したという状況なので、いかにして多くの募集案を集めるかということが問題であります。

もうひとつは学生FDの世代交代、引き継ぎの件です。学生FDは2年間の周期で交代していくこととなります。前やったスキサポの流れをいかにして次の世代へと引き継いでいくかということも大きな課題となっております。また短大生は2年間しかいないのでどのように実施するかが課題となっております。そしてその発案型授業を考案しても、それを担当してくれる教員をいかにして確保するのかということも課題となっております。

次に大学間連携についてお話していこうと思います。平成24年度の大学間連携共同教育推進事業で山形大学が代表校として採択されたプロジェクトです。

体験型ワークショップ

昨年の報告書でも山形大学との連携については言及しましたが、今回はその資料を合わせてありますのでご覧になっていただければと思います。現地体験型ワークショップです。本学も今年度実施いたしました。これも資料に載せてありますのでご覧ください。大学間連携主体型学習ということで3泊4日のワークショップを行います。このワークショップは8月8日までの4日間、8月の初めに、平取町で行いました。このプロジェクトには全国19の大学が加盟しており、いろんな大学から学生が集まり数日間寝食を共にします。このワークショップの特徴は、東京造形大学であるとか、日本女子大学であるとか、東京家政学院大学などの様々な大学から1, 2名ずつ参加してワークショップを行うことです。平取町のワークショップは、北海道の厳しい自然を生き抜いたアイヌの知恵に学ぶことをテーマに実施し、クチャチセと呼ばれるアイヌの人たちが作っていた簡易小屋作りを体験してもらうために、実際に山に入り木を切り出し作成することもやりました。今年度は全部で5つのワークショップが行われましたが、本大学の試みとしましては、具体的にワークショップの内容を事前に決定するのではなくて、授業と同じように、研修期間は決まっ

ていますが、具体的なタイムテーブルを各グループに考えてもらいました。参加学生 14 名を 7 名ずつの 2 グループに分けました。つまり与えられたことをただ単にやればよいというものではなくて、自分たちで主体的に何をするかを考える機会を与えるところに特徴があります。このプロジェクトの特徴は、体験して終わりではなくて、毎日夜の 7 時から 8 時までその日の振り返りを行う時間を設け、グループごとに話し合い、発表し合いその日を終わります。そして最後に「このワークショップの体験をしてよかった」で終わらせるのではなくて平取町へどのような還元ができるかということを考えていきます。これからどのように生きていったらいいのか、たとえばアイヌ文化やアイヌ語をどのようにすれば広められるか、どうすれば平取町に来てもらえるかなど、発表会を行いました。

発表会は、テーマを指示しただけで、どのように発表するかは指示しませんでした。ただ、パワーポイントはあえて、使用しないことにしました。パワーポイントは、機械を操作できる人にお任せということになりがちなので、模造紙を利用した発表にすることにしました。すると、グループごとにいろいろなやり方があり、見ているこちらの方としても勉強になります。この体験を通して学生同士は、一時的なつながりだけでなく SNS を使い、その後もつながりを持つ学生が多いようです。ワークショップでお互いを刺激しあいながら、今後も学生生活に活かせる何かを得たのではないかと感じております。また、学生だけのつながりではなくて、私も FB(フェイスブック)を利用しているのですけれども、ワークショップに参加した学生が私に友達申請を送ってくることもあり、私も快く申請を承諾しております。このワークショップを通じて、本来深く関わることのない他大学との学生さんとのネットワークの形成にもなっております。

最後の締めといたしましては、時間がだいぶ押していますけれども、こういうワークショップを開こうといたしますと、山形や東京の学生さんですと、どうしても交通費がかかってしまいます。今後は、道内の大学とも積極的に連携して、こういうワークショップの計画をしていけたらいいんじゃないのかなあと考えています。たとえば、大学間連携による学生発案型のワークショップや学生発案型の何かを実践できればなと思っております。以上です。

細川：ありがとうございました。それでは会場の皆様のほうから何かご質問などがありましたらお願いいたします。それでは私の方から質問させていただきます。学生発案型というものについてですが、カフェをやるにしてもどうやって学生さんを巻き込んでいくのかということについてお話をうかがわせていただきたいと思います。

堀江：今の 054 カフェにつきましては見える場所でやっておりますが、今まではふらっと立ち寄った際にお話しなどするという形をとっていました。最近、そのカフェにお

いてイベントをやって、あとはそこにいらっしゃる教員にお願いするという形をとっています。こういうイベントなどを積極的に行っていかないと集めるのは難しいと思われま。メインの正面口であるとかそういう見える場所で行うというのがポイントであると思ひます。

細川：ありがとうございました。続きまして旭川大学の吉田先生にお願いいたしたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

平成26年度IDE大学セミナー

学生と共に考えるFD

札幌大学

堀江 育也

2014/8/29

内 容

1. 学生と共に考えるFD
2. 学生FDの活動
3. 大学間連携

学生と共に考えるFD

2008年

山形大学の
”つばさ”への加盟を機に
「アンケートFD」
から
「動くFD」
への転換

”札幌大学はもっとよい大学になれる。

そのことを広く知らせたい”

という思いで活動している学生達の存在

学生FDの組織化が始まる

一方、教員サイドのFD活動

本学はじめての

授業公開

授業検討会に学生が参加

参加学生からも意見が述べられる

同年
学生FD委員会
誕生
通称：おこし隊



出所：学生FDサミット奮闘記 大学を変える、学生が変わる2：追手門FDサミット編 ナカニシヤ出版

学生FDの活動

学生FDの活動

- ・ サットーーク
- ・ 054Time
- ・ 054Cafe
- ・ 学生発案型授業「スキサポ」
- ・ サツナビ（おこし隊ブログ）
- ・ 授業マナーNG集（DVD）

など

サットーーク

学生・教員・職員による

しゃべり場

テーマに対して討論

サットーーク

2009年

第1回テーマ：「札大のいいところについて
語り合おう！！」

第2回テーマ：「ここがへんだよ札大
～札大の悪いところと
改善案をだしていこう～」

第3回テーマ：「こんな授業あったらいいのにな」

サットーーク

2010年

第1回テーマ：「気になる気になる学内マナー」

第2回テーマ：「学部と学部をつなぐ虹」

第3回テーマ：「あなたが思う楽しかった講義を
教えて？
～良い授業を作るために
私たちができること～」

サットーーク

2011年

第1回テーマ：「What's 講義？
～高校と大学はこんなに違う！？～」

第2回テーマ：「アンケート書いてる？
～本当は知らない、
授業アンケートのこと～」

サットーーク

2012年

第1回テーマ：「課外活動

～サークルの存在意義などについて
語る場にしよう！～」

2013年

第1回テーマ：「Youは何しに札大へ？

～あなたにとっての札大とは？～」

サットーークから見えてきた

学生の声

学生と教員との”壁”

・アンケートの見直し

→質問項目の見直し

→中間アンケートの実施

・054Cafe

→コミュニケーションの場を提供

サットーークから見えてきた

学生の声

学生が“学んでみたい”こと

学生発案型授業
”スキサポ”

2009年

プレ講義を実施

”賢い消費者になろう”

2年間にわたり実施

2011年

正式に共通科目として
学生発案型授業が
単位化

学生FDのプロジェクトとして
学生発案型授業の誕生
“スキサポ”

開講までの流れ

1年目

- ①学生から授業案を募集
- ②内容が不十分なものを選別
- ③授業案に対する教員探し
- ④発案した学生に連絡

開講までの流れ

2年目

- ⑤全学投票
- ⑥集計
- ⑦決定
- ⑧学生と教員でシラバス作成

開講までの流れ

3年目

⑨授業開始

実施状況

2011年

第1回目

“北海道の政治学”

300名を超す履修

※2年目は177人

2013年

第2回目

“映画で学ぶ現代世界”

196名の履修

受講生の反応

・世間の問題を新たに知り、問題を認知したことで社会への関心を高める事ができた。

(経営学部2年)

・今まで考えなかったことや、知らなかったことについて、とても興味深く、知ることができた。そして、考えるきっかけになった。とても面白い講義だ。

(経済学部2年)

・TPPなど現在の日本の政治についてわかって、選挙につながられたので、よかったです。

(法学部2年)

第3回目
現在企画中

問題点および課題

- ・ 授業案の募集
 - ・ 学生FDの世代交代による引き継ぎの問題
 - ・ 短大生の発案型授業
 - ・ 発案授業と教員とのマッチング
- など

大学間連携

文部科学省
平成24年度「大学間連携共同教育推進事業」

『FDネットワーク"つばさ"プロジェクト』

東日本広域の大学間連携による教育の質保証・向上システムの構築

現地体験宿泊型
「大地連携ワークショップ」

FDネットワーク"つばさ"プロジェクト
東日本広域の大学間連携による教育の質保証・向上システムの構築

HOME | ご挨拶 | 概要 | 質保証 | 実践体制・実践計画 | 事業内容 | スケジュール | 活動報告 | 連携校・機関 | 行方物・リンク

本事業の目的
本事業は「FDネットワーク"つばさ"」のプロジェクトです。
東日本広域圏(北海道・東北・関東)の国公私立の大学・短大・高专が連携する「FDネットワーク"つばさ"」を基盤として、効率的かつ実質的な大学教育の質保証・向上システムを確立します。それにより、予期困難な時代を生きる学生が自己学習力と社会人基礎力を身に付けることを目指します。

連携校・連携機関

北海道	連携校	札幌大学 札幌大学 札幌大学女子短期大学部 札幌大学短期大学部
	連携機関	北海道教育委員会 釧路市 平取町 NPO法人阿摩観光協会まろづくろ推進機構
東北	連携校	山形大学 金沢大学 青森中央学院大学 石巻専修大学 東北芸術工科大学 東日本国際大学 専修中央短期大学 岩手学院短期大学 いわき短期大学
	連携機関	新庄市 釜山町 葛上町 舟形町 真室川町 大蔵村 鮎川村 戸沢村 (山形県)
関東	連携校	明治大学 国際武道大学 了徳寺大学 東京家政学院大学 東京造形大学 日本女子大学
	連携機関	川崎市 相模原市 (神奈川県)

News & Topics

- 2014年7月7日
2014年8月6日(月)～10日(水)にFD合宿セミナーを開催します。
- 2014年7月7日
2014年8月5日(金) 大学間連携SD研修会を開催します。
- 2014年7月4日
2014年8月12日(金) 基礎教育FDワークショップを開催します。
- 2014年7月4日
2014年8月3日(水)に札幌大学にて学生FDを開催します。

大地連携ワークショップ
※大学と地域の人が共に学び連携した現地体験型授業
山形大学の特色ある授業を公開しています。
学生主体型授業 公開授業

FDネットワーク"つばさ"プロジェクト代表校 山形大学教育開発連携支援センター
〒990-8580 山形県山形市山形1-4-12 TEL: 023-628-4400 FAX: 023-628-4720 E-Mail: k3aan@yjn.kj.yamagata-u.ac.jp

参考URL: <http://www.yamagata-u.ac.jp/gp/tsubasa-p2012/index.html>

FDネットワークつばさプロジェクト
東日本広域の大学間連携による教育の質保証・向上システムの構築

HOME ご挨拶 概要 質保証 実施体制・実施計画 事業内容 スケジュール 活動報告 連携校・機関 刊行物・リンク

本事業の概要

本取り組みは、東日本広域圏の国公私立の大学等が連携する「FDネットワークつばさ」の実現を基盤として、効果的かつ実質的な教育の質保証・向上システムを確立することを目的とします。この取組の目標は、学生が自己学習力と社会人基礎力を身につけることにあります。

目的・目標を達成するために、次の3つのプログラムを共同して実行します。

(1) 連携主体的学習プログラム
(2) 連携FD/SDプログラム
(3) 連携IRプログラム

(1) では、①学生主体型授業と②大地連携ワークショップを実施します。①では「合同成果発表コンテスト」を実施します。②では地域の人たごと一体となって現地体験型ワークショップを北海道・山形・青森県・海外で実施し、学生は広い視野と社会性を身につけます。

(2) では、各種プログラムによって教職員の質向上に努めます。

(3) では、客観的データを基とする連携システムを共同開発・運営します。

これら (1) (2) (3) を相互に実践させながら、そして、外部評価委員会によって客観的に改善を図りながら、東日本広域の大学間連携により教育の質保証・向上を実現させていきます。

FD ネットワーク つばさ プロジェクト代表校 山形大学教育開発連携支援センター
〒990-8560 山形県小国町1-4-12 TEL: 023-628-4480 FAX: 023-628-4730 E-Mail: k3com@ipc.yamagata-u.ac.jp

参考URL: <http://www.yamagata-u.ac.jp/gp/tsubasa-p2012/gaiyo.html>

2014大地連携ワークショップin平取

8月4日～8月8日

平取町にてワークショップ

『厳しい北海道の自然を生き抜いた
アイヌの人たちの知恵から学ぶ』

8大学14名の参加









学生どうしのネットワークの広がり

近隣大学との有機的な連携が必要では・・・

ご清聴ありがとうございました。

3.3 旭川医科大でのFDーより多くの参加を得るためにー

旭川医科大学教育センターFD・授業評価部門長 吉田 成孝

医学部の構成

吉田：旭川医大の吉田です。本日はお招き下さり誠にありがとうございます。授業評価部門をやっておりまして、FDとともに学生の授業評価アンケートを行っておりますが、今日はこちらのFDについて発表させていただければと思っております。まず医科単科大学ということですね、ほかの大学と大いに異なる特徴があると思います。これは医科大一般にいえることかもしれませんが、他の大学に比べると学生数に対して教員が多いということですね。本学は医学科と看護学科があるのですけれども、両方合わせて931名の学生が在籍しております。これに対して教員が328名となっております。ほかの大学に比べると教員数がかなり多いのですが、問題は、臨床医の多さにあります。実際に医療にたずさわっている教員が大半を占めていることにあります。もちろん大学病院におきましてはそのような教員が主役となっており、本学も例外にもれません。ただ臨床系の教員はですね、教員である意識よりも自分は医師であるという意識のほうが先行しやすい傾向にあります。つまり意識の流動性がかなり高いということですね。医局人事ということで助教授として大学に赴任してきても1年未満で転出してしまいう例も普通にあり、大学に対する帰属意識がどうしても低くなってしまいうということがあります。

もう少し教員の組織構成というものについて説明させていただきたいのですが、まず1学部医学部があり、そこに医学科と看護学科があります。それと並んで大学病院があり、そこには各診療科があります。ただここは臨床医学と一体的に構成されており、内科でしたらその科の科長を兼ねています。こういう感じですね。本当は、病院は別組織でオフィシャルにあるのですが、一体化していて、臨床医学講座と診療科の2つがあるということです。これらがどういう組織であるかというところそれぞれについて少しずつ様相が異なりますので、もう少し説明させていただきます。例えば、私は解剖学を教えていますのでこの基礎医学講座になります。うちの大学の医学部の基礎医学講座でございますので、これは13講座ありまして、だいたい1：1：2という定員配置になっています。まあこれはほとんど同じですね。看護学科は大講座制になっておりまして教授11人以下20数人の教員で構成を定めております。つまりそういう意味では看護学科はかなり一体化されているということが言えます。そして一般教育を担当する学科がございますが、ここは分野によって全く異なっております語学であるとか、それから科学、生物学であるとかそういったものがあるので、1名しかない講座もあります。教授とほかの教員が1：1：2という講座に近いものもございます。非常に多様な集団です。問題は臨床部門なのですけれども、本

学では15講座あって診療科も含めた構成として教授1, 准教授1, 講師2, 助教5が配置されています。今は特任であるとか, 病院のほうの呼吸器センターなどのセンターの教員も含まれます。ここから比較的多くの教員が在籍しているということが臨床の特徴であるといえます。

もう1つ医学あるいは看護にもあてはまることなのですが、医師あるいは看護師などの国家試験もあります。特に医学科は共用試験というものを臨床実習が始まるまでに合格しなければなりません。つまり患者さんの前に立つ前にこれを受けて合格点をとらなければならないということです。これは全国で同一のフォーマットで試験が実施されます。こういうことがありますので、到達目標はですね、医学教育界は意識して統一されているのですが、特に共用試験のための到達目標というものは完全にフォーマット化されています。これは全国の医科大学に配布されて、原則としてそれにのっとった教育を最低限行うことになっています。具体的には医学教育モデルコアカリキュラムというものがあり、これは身体づくり、準備教育として物理など、そして臨床と患者さんの診察の方法など事細かに、到達目標が示されています。ちょっとお読みいたしますと、運動器系これは筋骨格系ですね、運動器系の正常構造と機能を理解し、主な運動器疾患の病因、病態生理、症候、診断と治療を学ぶということが一般目標に設定されています。学ぶというのが一般目標として適切かどうかは置いておいて、その下に到達目標があります。1つだけ読ませていただきますと構造と機能の到達目標で、骨・軟骨・関節・靭帯の構造と機能を説明できるという目標が設定されています。そういったものについて、このように到達目標として100ページほどにまとまっているわけです。したがって何を教えるかというのは、最低これを教えればよいということで、そう難しく考える人はいないのが1つの特徴なのですが、それでもなかなか到達目標に到達するのは容易なことではない。それも1つの現実であるわけであります。

これまでのFD

そしてもう1つFD活動の中でいろいろやっていて、参加して欲しいと思うのですが、それがなかなか進まない原因の1つが、参加することによって得たなと思えることが少ないということです。本学においては教員評価というものがあることがあって給与等に反映されますが、現実にはそんなに差がつくものには今のところは、なっていない。その中でもFDのワークショップに参加したかどうかという項目はあるのですが、これだけある中の1つにしかすぎません。FDに参加したら得するなと思うかどうか。インセンティブの観点からこう思うかはかなり疑問かなと思っております。まあそこで最初に考えたのは、たとえば1泊2日でワークショップをやるとか言った場合にも数名は参加してくれるかもしれませんが、臨床系の教員が参加してくれるのはほぼ不可能である。ということで、期間を短くしたら参加してくれるんじゃないか、ということを考えました。講演形式やワークショップ形式もやっているのですが(あとでお話ししますが)、なるべく短い、もう1時間以内で

やる。そして特にみんなに知ってもらいたいことは何回も何回も同じことをやって、都合のいい時間があれば、どの教員も1回は参加してくれるようなものにしたらどうか。最後に、ここにありますように、内部講師での講演では、どうしてもみんなに伝えたいことは、テーマを絞って1回40分で行います。1時間だと長くてもういやだ。40分ならぎりぎりしゃべりたいこともしゃべって参加もしてもらえるのではないか。40分という時間を設定いたしました。

その講義内容は2つに大別され、「いまさら聞けない医学教育の変遷」。医師国家試験だとか共用試験だとかありますが、私たちが昔の国家試験だとかを受けたのですが、その時と比べるとずいぶん様変わりしておりますので、その試験の傾向の変遷について臨床の先生にさせていただくということです。そしてもうひとつ、これはもう少し実践的なのですが、「よい客観試験の作り方」ということで問題の作題、学内の定期試験を含めて、客観試験で行われるものは多いので、そういったものの作り方やコツというものを解説するものを行っています。これも40分間でやるとしております。

例えば3年前、平成23年の私どもの行ったFD活動はこういったものがあるわけです。講義形式、さきほども申しあげたこれ「いまさら聞けない」とか「客観テスト」。前半後半2回ずつ合計4回開きました。これは蒔田というのは教育センター専任の教授でありますけれども4回同じ講義、話をしました。あと外部から講師を呼んでの講演会、これについて対象は医学部の教員です。ワークショップということで行っています。講演会は外から講師をお呼びする場合、こちらにも広報に多少気を使いますから比較的たくさんの参加者がいます。講演会を何回もやると、それなりの参加者はあって、合計ですと1年間で364名ということで事務職員の参加もありますが、教員、平均にしますと延べ人数で年一人1回程度の参加はできております。ただ、こういう授業でも何でもそうなんです、受け身の講演で聞くよりも、アクティブ・ラーニングというわけではありませんが、ワークショップとして自ら能動的に参加してほしいというのが私の希望です。けれどもワークショップの参加者は2回ずつやって10名しかいない。300人程度の中の20名ならばまあ良しという考えもあるかもしれませんが、もうちょっと来てほしかった。この20名の参加者について詳しくみていきますと、先ほどありました基礎、臨床、看護、一般参加の4つの区分に分けると、この年は基礎教員が5名、看護系が14名、学生は1名（特に学生を対象とはしていませんが参加してくれました）で合計20名でした。職種別にみていきますと教授、准教授4名ずつでまあまあいいかな。講師3名、助教9名ということでした。これで良しとするかどうかということですが、できるだけワークショップに参加して、何か持って帰ってもらいたい。

参加人数を増やすための方策としていろいろ考えられると思います。1つは強制参加にするということです。参加しないと授業をできなくするというルールを作ってしまう。あるいは、学長、執行部から命令する、参加を強制するということであれば参加者は増えるかもしれません。これは相当な反発を覚悟しなければいけないというか、執行部に相当な

理解がないと難しい。もう1つはインセンティブの付与。さきほど現状ではほとんどインセンティブはないということを述べましたが、たとえばワークショップに参加すれば給与が上がるとか、昇進のために必要という形式をとれば、参加者は増えるかもしれません。しかし能動的参加といえるかはワークショップに参加しないといけないということがあれば、参加者は増えるかもしれません。が、能動的に参加してもらえるかという、どうなんだろうなという考えがありました。

新しいFD

それで私たちが考えたのは、もうこっちで開催して向こうに来てくださいと言っても来ないというのなら、こっちのほうから向こうに行きましょうということです。参加者の都合やニーズに合わせて、こちらから開催していきましょう。これしかないなと考えたわけです。これは昨年度の企画ですが、外部講師は例年どおりいろいろやってもらっているわけなのですが、これは従来どおりやりました。次に先ほど申しあげました、40分、全部質問時間を含めて40分間です。これについても昨年度5回行いました。

今日の中心となるワークショップなのですが、対象が第2内科、1つの講座です。第3内科、泌尿器科、産婦人科などの科に、その都合に合わせて何月何日の午後6時からということで行うことを企画しています。ニーズのあるところというよりはニーズがあるはずのところからです。こういうことをやりますから参加者に日時、具体的には医局ですね、そこと相談して都合のいい日を決めます。講座内の会合を開く場合がほとんどです。それに併せて行う。時間も長いとダメです。1時間半というのはダメです。絶対1時間以内で完結するよう手際よく終わる。ミニレクチャーを入れて1時間。実際どういうふうにするかという、何月何日午後7時から1時間。参加者は数名から10数名です。参加者は自分の授業の到達目標をブラッシュアップしたいなということです。しかし到達目標を作っていない、そのものがわからないという方も結構いますとかほとんどです。そういった場合は、何もないところからやる。授業法、ミニレクチャー、カリキュラム、到達目標とある。非常にプリミティブなことをお話しして、それから作業に移り、到達目標をみんなで作っていくというワークショップを行います。ここに私がいるのですが、2人開催側の人間ですね、あとここにバラバラバラと教室ですね。いわゆる医局という講座の中の図書室みたいな所で行っているのですが、見えないところにも参加している人はいます。こういった形で行います。これはミニレクチャーの様子です。

何をやっているか。ワークショップということですからプロダクトがあって、到達目標を書くということを行いました。例えばこれは外科でやった時のものなのですが、GIOを一般目標にして「大動脈疾患の治療を理解するために、治療の歴史、疫学、治療の現状と今後の展望について概説できる」これはみんなで作ったものですね、これは1つ大事なのは文言の使い方ですね。これは具体的な行動目標といわれるものなのですが、ここには「述べることができる」だとか、「挙げられる」とか「解説できる」とか、こうい

う行動をともなった文言で述べる。非常に単純なものなのですが、1回やるのとやらないのでは大違いで、だいぶ教員の意識も違ってきている。

それを見たのが、この参加者アンケートです。今までこういったものを講座に出ていってやりました。参加者88名、うち83名がアンケートを記入してくれました。開始時間についてと内容が良かったかどうかについて。ちょっと辛めです。こちらが開催してこちらに参加してくれる場合はもうちょっと有意義であると考える人の割合は高くなるのですが、うちの教室の教授が言うてくるからいやなのだけ参加するという方もいる。それで、まあまあな結果になった。コメントでいいますと、「やって到達目標はどういったものであるのか分かった」とか「もっと早くやってほしかった」だとか、「短時間で有意義なのでもっとやってほしい」だとか好意的な回答が得られました。一方で「難しかった」とか、「内容に具体性が欠けた」とか「講義が減っているの、そんなもののために参加するのは時間もったいない」とか。そういった逆の回答もありました。こういうことを行うメリットとしては、確実にその講座でやることは多くの方が参加してくれる。1つ良いのは、FD活動は全然関係ないという教員も多いのですが、やることによってお互い理解できる。教育法とかカリキュラムとかについて、私たちは教育センターに所属していますが、そことの意見交換が、顔と顔を合わせてやっているのでできるというメリットがあります。一方、もちろん面倒くさいというのがデメリットであって、人手が必要ですね。例えば私はこのために1年に何度も時間を拘束されるので、ちょっと面倒くさいというところはあります。それと全体に浸透させていくには、かなり時間がかかる。多くの参加者を得るには何年間にわたって活動をつづけていかなければならない。このようなデメリットがありますが、こういった方法はどうしても必要な場合は有効になりえるのではないかということです。本日はわが校の取り組みについてご紹介させていただきました。

細川：吉田先生どうもありがとうございました。それでは会場のほうから何かご質問はありませんでしょうか？よろしいでしょうか？それでは私の方から質問させていただきます。15ほど講座があるということでしたが、そのうちで出前に応じてくれる講座はどういうことで決まっていくのでしょうか。

吉田：こちらからですね、例えばFD部門というのがありましてそこに入っている方ですとか、あとはなるべく大きいところからやった方が効率がいいと思いますね。内科とか大きいところからこちらが指名して交渉するというところから始めて。今の所、そんなの要らないからという所はありませんでした。これからも、そうなるかどうかはわかりません。

細川：はい、どうもありがとうございました。他にご質問ございませんでしょうか？それでは次に下村先生のご質問お願いいたします。

下村：北海道医療大学の下村と申します。本日はありがとうございました。去年まで僕は医学部にいたので臨床医学系の講師についてはいろいろ知っているのですが、どうですか。先生から見られて18時以降のWS参加で発言する講師は少ないのではないのでしょうか。18時という時間は業務が終わって疲れている職員が多く、ワークショップを行うには教員の負担が大きいと思うのですが、先生から見られた印象というものを教えていただきたいです。参加と積極性は両立できているものなののでしょうか？

吉田：これは科によってだいぶ異なっていて、外科でありますと手術で疲れ切っていて居眠りしてしまう場合も散見されます。内科系は積極的で、一度参加していただくと積極的になっていただけますね。まあ少し日程の関係上、緊急手術があった後などには結構厳しいと思いますが、私の印象から申し上げますと、積極的に参加してくれます。初めて聞く内容なのです。到達目標を作るということが、いわば彼ら参加者にとって新鮮なようです。時間も短くしてありますので、せめてこれぐらいの時間は参加してくれるかなという感じですね。

下村：ありがとうございました。

細川：どうもありがとうございました。それでは吉田先生ありがとうございました。それでは長丁場となってきましたので10分休憩といたします。

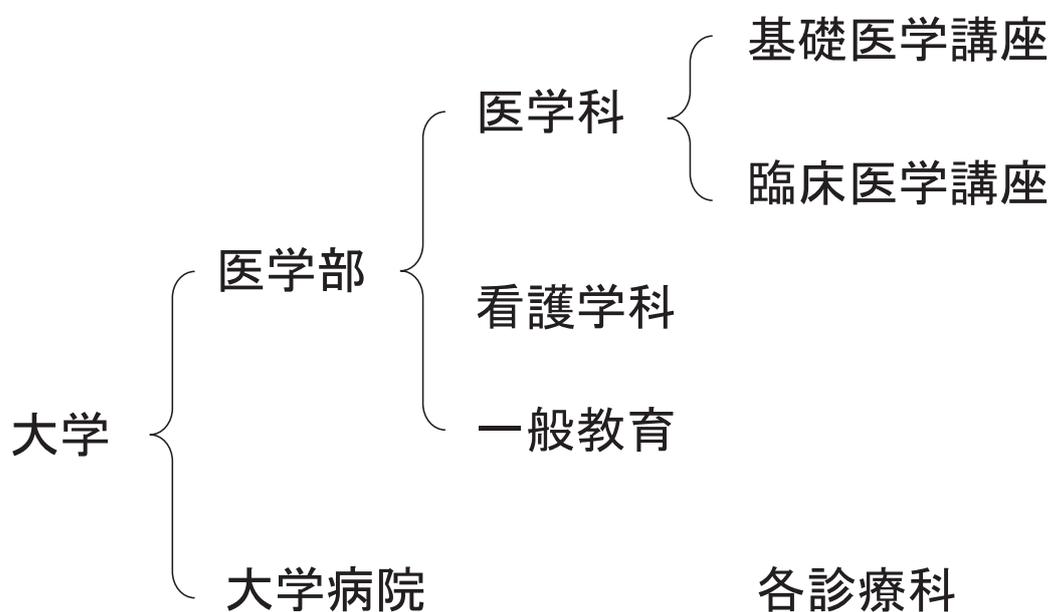
旭川医科大学でのFD より多くの教員の参加のために

旭川医科大学
教育センター FD・授業評価部門長
吉田成孝

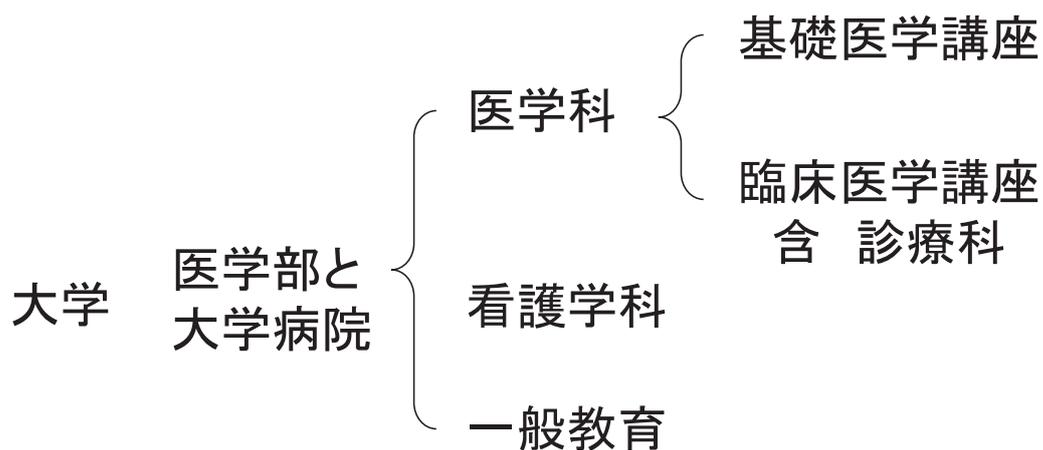
旭川医科大学(大学医学部)の特徴

- 教員が比較的多い
学部学生931人に対し教員327人
- 200名以上は臨床医学の教員
- 臨床医学の若手教員は教員というより、臨床医としての意識が高く、流動性が高い。

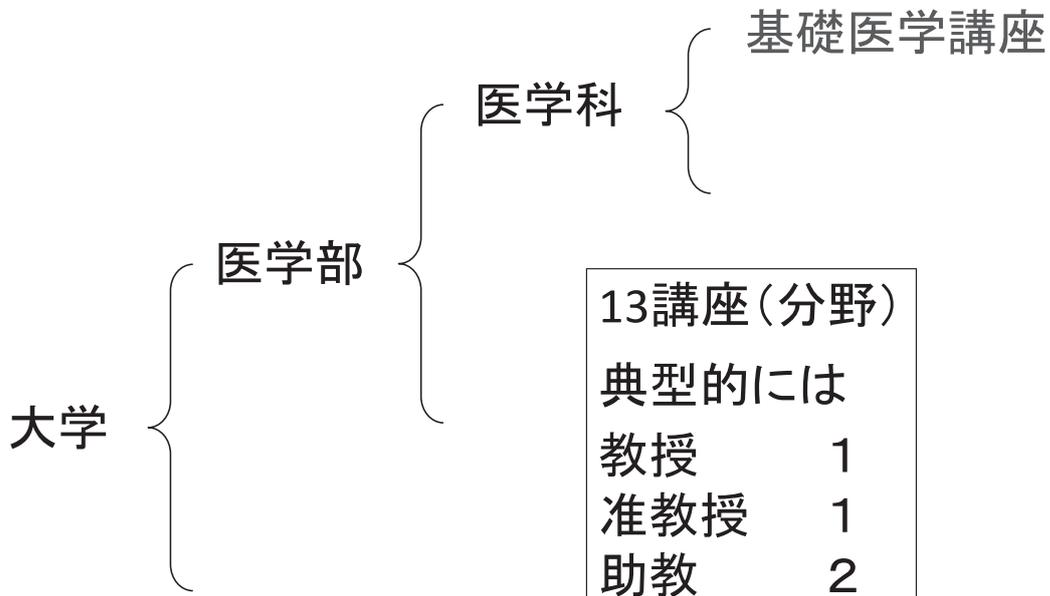
旭川医科大学の教員組織



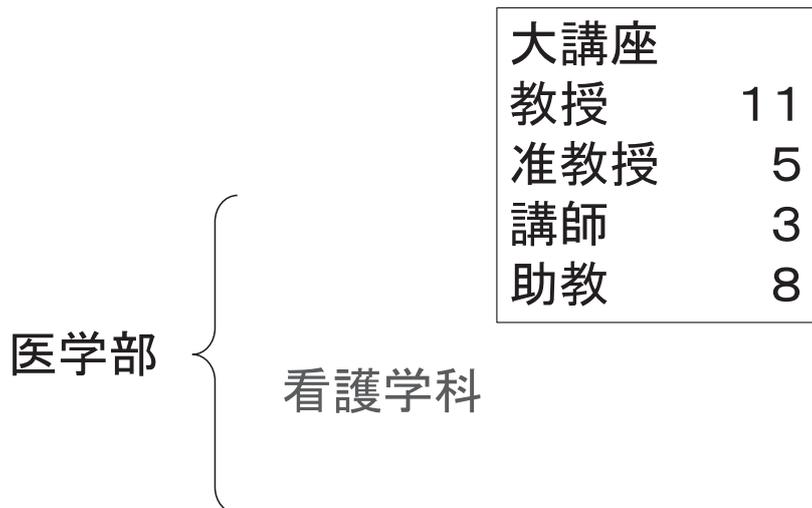
実際の運用では



基礎医学講座



看護学科



一般教育

大学

医学部と
大学病院

分野により大きく異なる組織
ある学科目 准教授 1名

別の学科目 教授 1名
准教授 1名
助教 2名

一般教育

臨床医学講座

大学

医学部と
大学病院

医学科

臨床医学講座
含 診療科

15講座(分野)

典型的には

教授 1

准教授 1

講師 2

助教 5(+ α)

教育目標・内容はかなり統一されている

- 国家試験と共用試験
- 共用試験では到達目標がかなり厳格に決められている

医学教育モデル・コア・カリキュラム

4 運動器（筋骨格）系

一般目標：

運動器系の正常構造と機能を理解し、主な運動器疾患の病因、病態生理、症候、診断と治療を学ぶ。

（1）構造と機能

到達目標：

- 1) 骨・軟骨・関節・靭帯の構造と機能を説明できる。
- 2) 頭部・顔面の骨の構成を説明できる。
- 3) 四肢の骨・関節を列挙し、主な骨の配置を図示できる。
- 4) 椎骨の構造と脊柱の構成を説明できる。
- 5) 四肢の主要筋群の運動と神経支配を説明できる。
- 6) 骨盤の構成と性差を説明できる。
- 7) 骨の成長と骨形成・吸収の機序を説明できる。
- * 8) 姿勢と体幹の運動にかかわる筋群を概説できる。
- * 9) 抗重力筋を説明できる。

（2）診断と検査の基本

FD参加によるインセンティブはない

- 教員評価の調書にFDワークショップ参加回数
の項目がある
- しかし、多くの項目の1つであり、動機づけと
なるかは疑問

参加しやすい活動 — 頻回で短時間 —

- 講演形式とワークショップ形式の多くは1回1時
間以内
- 同じ内容の講演を年に複数回かつ数年にわ
たって開催
- 内部講師での講演はテーマを絞り、1回40分間

内部講師の講演は テーマを絞って40分間

- いまさら聞けない医学教育の変遷
国家試験や共用試験(CBTとOSCE)の制度等
について
- よい客観試験の作り方
定期試験、CBT作題、卒業試験

平成23年度のFD活動

日時	種類	タイトル	講師・ファシリテーター	参加者数
6月27日	講演	3層構造による学生支援	大畑 昇 氏	116
7月26日	講演	教育活動に活かすコーチングスキル	坂井 慶子 氏	151
8月30日	講演	客観テスト作成法と評価法(第1回)	蒔田	31
9月 2日	講演	いまさら聞けない医学教育の変遷(第1回)	蒔田	30
9月12日	講演	いまさら聞けない医学教育の変遷(第2回)	蒔田	17
9月21日	講演	客観テスト作成法と評価法(第2回)	蒔田	9
12月13日	WS	到達目標と試験問題でPDCAサイクルを考える(第1回)	吉田、蒔田	10
12月19日	WS	到達目標と試験問題でPDCAサイクルを考える(第2回)	吉田、蒔田	10
				計 374名

ワークショップの参加者

基礎医学講座教員	5名	
看護学講座教員	14名	
学生	1名	計20名

(内訳)	教授	4名
	准教授	4名
	講師	3名
	助教	9名
	学生	1名

ワークショップへの参加者を増やすには

- 参加を強制する
WS参加者のみが授業をできる
学長命令
- インセンティブを付与する
給与
昇進の条件
- 参加者の都合やニーズに合わせて開催する

平成25年度FD企画

企画区分等	内 容
①<講演会> 外部講師	・アウトカム基盤型教育 ・千葉大学 田邊教授 ・11月27日(水)18時～
②<講演会のみ> 部門員	・いまさら聞けない医学教育の変遷 11月6日(水)、11月29日(金) ・よい客観試験の作り方 7月5日(金)、7月12日(金)、7月24日(水)
③ワークショップ 部門員によるワークショップ	・第2内科 3月31日(月)18時～ ・第3内科 12月9日(月)18時～ ・産婦人科 2月10日(月)18時～ ・腎泌尿器外科 2月14日(金)16時30分～
④<講演会とワークショップ> 看護学科企画のワークショップ	・教育、指導に役立つファシリテーション ・サードバリュースタッフ マイスター 徳田太郎氏 ・講演会 12月20日(金)13時～14時 ・ワークショップ 12月20日(金)14時15分～17時15分

ニーズのあるところで行う

- ・こちらで企画して参加者を待つより、参加者に日時を決めてもらい、講座等に出向いて、ワークショップを行う。
- ・ワークショップはミニレクチャーを含めて1回1時間以内

出前FD開催例

○月○日 午後6時から7時

参加者 12名

参加者から授業の到達目標を持参してもらう。
(到達目標はない、到達目標とは何かわからないという場合には不要)

ミニレクチャー15分間

「カリキュラムとは、到達目標とは」

ワークショップ30-40分間

「到達目標の立て方」



プロダクト例 大動脈外科

GIO: 大動脈疾患の治療を理解するために、治療の歴史、疫学、治療の現状と今後の展望について概説できる

SBOs:

- 1 外科対象の動脈疾患を列挙し疫学・病態を述べることができる。
- 2 外科対象の動脈疾患の現在の標準治療を述べることができる。
- 3 大動脈疾患に対する治療方法の変遷を概説できる(キーワード:人工心肺、人工血管)。
- 4 現在の治療の問題点と将来の方向性を概説できる。

参加者アンケート

参加者総計(8回)	88名
アンケート回答	83名

問1 今回のワークショップの開始時間について

① 適当	71
② どちらとも言えない。	11
③ 不適切	1

問2 今回のワークショップの内容について

① 有意義である	60
② どちらとも言えない。	17
③ 有用性を感じられない。	6

アンケートのコメントから(抜粋)

- ・GIO、SBOについて良く理解することができました。
- ・講義の初めにGIO、SBOを示すと学習しやすいと思いました。
- ・目標(GIO、SBO)を挙げるという考えがなかったので勉強になりました。
- ・非常に勉強になりました。学生実習へ応用していきたいと思います。
- ・今回のような短い時間での有意義なレクチャーを希望します。
- ・もっと早くしてほしかった。
- ・講義に関する視点が少しわかった気がします。

- ・もっと多くの具体例がほしい。
- ・指導は難しいと再認識した。
- ・カリキュラムを学生がそもそも理解して、それに沿って学んでくれるかが疑問です。
- ・教育者はいろいろ考えているのに教育されるほうはどれほどの熱意を感じてもらえるのだろうか・・・
- ・講義自体が教育の中でへっているなのでその対策についてやす講演会自体、時間がもったいない。講義のみが教育ではなくなっているなので幅広い教育について考えさせてみてはどうか

メリット

- 確実な参加者が見込める
- FD活動に対して理解が深まる
- 様々な意見交換が可能

デメリット

- 日程調整などの手間がかかる
- 人手が必要 毎回ファシリテーター2名(以上)と事務担当者1名
- 全体に広がるまで、時間がかかる(年単位)

3.4 北海道大学の新たな試み

北海道大学 教授 細川 敏幸

従来 of FD

細川：それではシンポジウムのほうを続けさせていただきます。私は企画者ということで例年は見ているだけなのですが、今年はFDがテーマなので発表も司会もするという事になってしまいました。そこで私は北海道大で何をやっているのか、何を考えているのかということについてお話していきたいと思います。これまで何をやってきたかということと次世代FDと書いておりますが、これから何をやっていくかという話をしていきたいと思います。

北海道大学の取り組みはこの3つです。どれも1998年から取り掛かっておりまして、これは全国的にも比較的新しい取り組みです。昨日学生FDのお話がありましたが、3番目のTA研修会ですね。これが学生参加のものです。PFFは昨日お話ししましたが、いろいろな形で展開しておりまして、UCバークリーの先生方をお呼びして英語で集中講義でやるものですか、私どもが日本語で15回でやるものなど、新しい形で展開しております。今日は教員対象のFDを中心に話しをさせていただきます。TA研修は昔からやっているものですね。ずっと続けておりましたが、以前は参加者50名ほどであったのですが、現在は200名から300名ほど参加してくれます。これは1日だけです。毎年これほどの人数が1回で集まってまいります。新任教員研修会に関しましてはほしい50名から100名ほどの参加者がありまして、1日かけてやるのですが、これは2006年に修了いたしました、新任教員対象の研修はFDワークショップで行うことになりました。毎回30名から40名で、2007年度からは年2回実施しています。内容に関しましては先ほど吉田先生が話されたものを展開したものです。ベースが医学部の方々を対象としたもので内容はほぼ同じです。基本的に1泊2日で、各学部からの希望者と書いていますが、実は総長名で各学部に依頼が来ます。ある程度強制的ですが必ずしも出さなくてもいいというしくみです。新任教員研修会とワークショップの規模はこれぐらいです。

ワークショップがどうなっているかなんですが、小グループ学習が基本です。これが結構効果的ですし、現在もアクティブ・ラーニングが話題となっておりますが、小グループ学習もアクティブ・ラーニングの一種ですし、この教授法を北大に広めるのに大いに役立ったのではないかと考えております。学生の立場で小グループ学習を経験します。能動的に参加してもらおうのでそれなりの学習効果がある。基本的にはシラバスを書いてもらうというワークショップです。教育の基本である学習とシラバスの書き方を身につける、とい

うことが柱となっております。ちょっと古いのを持ってきましたが、温泉ホテルでこれぐらいの人数で実施しています。グループ学習ですので各グループ7、8名から多い時は10名ほどの人数で勉強します。基本的にお伝えしているのはこういう教育の基本です。昔の話ですと学習者と教授者だけがいて、それだけで話が終わっています。そうではなくて、ちゃんと目標があってそれにしたがって教育をして評価をしないとイケませんよという話をお伝えして、この上でシラバスの目標をきちんと立てることから始めて、方略と評価を実施するシラバスを書いてもらうのが基本です。それとここ5、6年は、これ以外の倫理の話も組み込んでおまして、教員はある種の職業規範が必要であって、北大は2009年に教育に関する倫理綱領を定めておまして、その説明をこういう具合にいたしました。

新しいFD

さて、これが今までのFDでございます。およそ6年前の話になりますが、これから新たなFDを考えないといけないのではないかとということで、いろんな話題が出てきました。個別の授業を向上させる。それからカリキュラムの検討をする。それから教育倫理と教育理論を分離してやってはどうか。実施主体をいろんなところが引き受けるべきではないか。それから、当時から話題になっていたのですが、国際化とグローバル化、これに対する対応のための研修。こういう、いろんな話題が出てきておりました。これに対応して、新たなFDを実施しています。

1つは大学院生対象のPFF, **Preparing Future Faculty**。将来教員になる学生のための研修あるいは教育コースとなるのですが、これは先ほどお話ししたとおりです。そしてもう1つは国際化、グローバル化。これは何をめざしているかということ、基本的には自分の専門分野について英語で授業を行う先生方のための研修です。もう1つは、中堅の教員対象のFD。これは後で詳しくご説明しますが、マネジメントです。大学の管理運営などです。こういうものを考えてまいりました。

今日は教員の話ということですので下の2つを、詳しく解説させていただきます。これは国際化対応研修を最初に行ったものなわけですが、文学部研究科で主催され、国際本部それに我々も加わりまして、こういうFDプログラムを実施しました。これは1回だけです。この国際化対応研修はいくつかお話ししますが、いずれも学部の要望によって企画することが多く、同じものは行っていません。これはマイクロティーチングというやり方ですが、実際に10分から15分くらい英語で授業してもらって、それで建設的なフィードバックを行う。つまりどういうことかといいますと、けなさないことです。これはアメリカから来たやり方ですので、ほめて育てる。ディスカッションとデモレクソンをして6回で終わる。これは6名の参加がありまして、マイクロティーチングをベースにした構成となっております。これ以外にもいろいろなことをやっておまして、例えば英語の発音の修正の研修というものもやっておきます。これに対応して、これは参考文献だったわけですが、北大オリジナルのテキストを作成いたしました。これは3年前のもの

なのですが総合化学院において行ったもので、英語による授業入門。それから授業で用いる英語表現と発音修正とマイクロティーチング。こういうセットで何日間かに分けて行いました。

次はがらっと変わって、中堅教員のFD研修会。これは、今までのFDの中では出てこなかった教員の能力を開発しようという企画です。基本的には研究教育以外の能力で、新しいプロジェクトを企画実行できる力をお伝えしたい。管理運営、マネージングという研修です。これまで4回やっております。そのうちの1つをご紹介します。これは2011年に実施したもののなのですが、学外からも来ていいですよということで実施しました。教育マネージメントワークショップとして20名を研修対象としました。本学からの8名のスタッフにより2日間実施しました。テーマは「北海道大学の国際化」です。初めてこういうところでご説明しますので、ちょっと詳しく説明させていただきます。まずこの研修全体の行動目標ですが、「教育改善のマネージメント」としています。そのテーマを変えて毎回実施しています。プログラムは通常1泊2日の新任教員のプログラムと同じになっていますが、違うのは中身です。例えば、国際化にとמונאう、ある仕事を課題として与えられまして、段階に分けてやっていきます。1つ目のこれですね。与えられたテーマの、ニーズと背景がどうなっているのかについて考える。次にそのテーマを実現するために何をすればいいのか、目標管理ですね。それから、チームによる課題解決。計画を立てましたら、役割分担をいたします。

結果ですが、これはグループ学習をやっていただいて、そのうちの1つのグループの成果です。これは留学生を増やすという使命を与えられたグループです。ちょっと古いので留学生10万人から30万人を目標にするということで話題になった時ですが、その背景です。この当時北大は留学生1000人でまだ少なかった。アジアの大学生は来たいと思っている。学位を出せる環境を整備することは必須だろう、しかし札幌は寒くて遠いなどという背景をまず検討していただきます。それで目的をどこに置くかという、優秀な留学生を確保することに設定し、それから組織的に奨学金を得られる環境づくりを計画する。既定の年限で学位を取れる指導体制を作る。こういういろいろな計画を出してもらいます。そのうちの全部をやることはできないので、一部を取りだして、それを達成するにはどうすればいいのかということをごさらにも考えてもらいます。例えば、ここでお示ししているのは、奨学金の話で、応募可能な国内外の奨学金制度を把握する。そのためにはどうすればいいかということで達成基準を考えてもらっています。こういう達成基準でこういう調査をすればいいのではないかというのが、このチームの計画です。

もう1つ実施方法ですが、支援組織が必要なのではないかという話がありました。5名の専任教員を中心にして各学部学科の支援教員を巻き込んで実施するという留学生支援室を作るというのがこのチームのアイデアです。ではアンケート調査を行うには具体的にどのようにすればいいのか。組織、留学生、教員へのアンケート、こういうものを5人いるうちのAさん、Bさん、Cさん、Dさん、Eさんのだれが担当するのか、Bさんは中心的

なメンバーとしてどの計画にもかかわるのですけれども、Aさん、Cさんは2つの計画にかかわる。Dさんは1つの計画だけにかかわるといふ風に作業分担の計画を立ててもらいます。さらに1年程度の事業計画を立ててもらい、どうすればいいか。目標項目を設定して、達成基準を実施方法を考えてもらいまして、こういう表を埋めていただく。こういう活動から何を学んだかといいますと、課題を与えられたらその問題解決のプロジェクトを構築する。その実施内容を時間軸にそって決定して、個人に役割分担を与える。これで1つのプロジェクトは完成することになります。こういうことを2日間かけて学ぶというのがこの研修の内容でございます。

最近のFD

また話が変わりますが、過去2年間いろんなことをしております。背景がございまして、私が所属している組織の改編がありました。もともと今お話ししたような事業を、専任2名と特任1名でやってきたのですが、この組織を解体しまして、他の研究部門と集めて、9名の部門としました。これは今年の4月からです。このFDに関わる研究グループを新たに作りまして、6名で構成されており、今までより強力なチームとなりました。3が6にそのまま増えたわけではなくて、このグループは教育支援の研究グループなのでほかにも仕事があり、専念するわけにはいかないのですが、それでも助けが増えた。それに加えここ2、3年で我々の機構に様々な組織ができました。研修をある程度専門的にやってくれる専任が1人増えました。これが1年半前からです。それからもう1つの研修の要望がいろいろ出てきてまして、国際化対応、新しい教育手法、教育技術ですね。これに対応したFDを実施するようになってきました。

国際化対応ですと発音の修正の研修を年に2回、これまでに3回実施しております。新しい手法としてはアクティブ・ラーニングとかディベートとかルーブリックとか、学生相談であるとか（これはこれからの予定ですが）を実施してきました。それから教育技術で言いますと、北大にはELMSというeラーニングのシステムがあるのですが、この講習会を2回実施しました。これは今年から始めたのですが、キャンパスツアーですね。これは主に新任の先生を対象としたキャンパスツアー実施しております。これはキャンパスツアーのプログラムですが、図書館と情報基盤センター（コンピュータのセンター）、それからわれわれがいます高等教育推進機構。図書館の話、それより前に新田先生に倫理綱領の話をしてもらいまして、図書館ツアー、教育情報システムの話、それからIR。アカデミックサポートセンター（これは学生支援の組織で、この場でも一度紹介してもらったことがあるのですが）、学習支援のセンターの話、それから北大でやっております全学教育と総合入試の話は鈴木先生の方から、それからさらに知財部門のほうで、これは特許の話なのです。一日でいろいろなところに移りながら、図書館であるとか情報基盤センターの説明とか、活動であるとか大学の仕組みの話もあります。こういう説明会を行いおよそ30名のご参加をいただきました。それからこれが図書館。去年、新装開店いたしました。こ

れを見ていただくと図書館とは思えないのですが、グループ学習できるような構造となっております。あるいはこの中に講義ができるような部屋も作られています。私も含め講義に携わっていらっしゃる先生方もこんなものがあるとは知りませんでした。これは、アクティブ・ラーニング等に使える設備でございます。

いろいろ話をしてきましたが、研修以外の地味な活動も行っております。たとえばHPを使った活動、印刷物の発行、新規授業の開発、こういうものもやっております。HPについては北大の先生方だけではなくここにいらっしゃるみなさんも使えますのでここで軽く説明させてください。開設してからこれまでに15万人以上の方から見に来ていただいております。これが研究方法のHPで、ここにいろいろな有用なデータがございます。教員支援や報告もありますし資料一覧、後から説明させていただきますが、学部ごとのFD研修の実施状況についての報告も含まれております。主なものを紹介しますと資料が見られます。ニュースとか論文集を出していると申しましたが、過去の分はここにすべて入っており、様々な活動の報告もここに載っております。各学部のFDにつきましても入っております。教員支援の所に何かあるかという、TA研修とかFD研修のマニュアル、これはあまり改訂していないので、だいたい今使っているものだと考えてかまいません。それから大人数講義での授業方法の悩みにお答えするQ&A。授業を良くする方法と書いていますが、基本的な教育の仕方だとかポイントとかがQ&A方式で書かれております。ここに書かれております。FDに関して言いますとFDマニュアルについては2005年度から実施しておりますので、すでに3万名ほどの方々から見に来ていただいております。各学部のFDの実施状況もこのHPに来るとわかります。学部毎のFDを北大もやっております、1泊2日の北大型のグループ学習をベースにしたFDというものはこれぐらいの学部が過去数年間を見ると、どこかでやったということです。それから、講演会や授業参観それから国際化に向けた研修についてさきほども申しあげましたけれども、こういう学部研究科で行っております。

まとめとしましてはFDへの要望が変わりつつある。この2、3年我々は様々な研修を提供してございまして、それまではだいたい2か月に1回やっている勘定でした。例えば今年ですと8月には研修を3つ実施してございまして、7月、8月、9月は、2、3回ずつ研修がありましたので、それぐらい学内の要望が増えてきた。たまたま、それに割ける人数が増えてまいりましたのでこれに対応することもできております。基本は大切だと思っております。倫理と教育の基本ですね。現在われわれは需要に応じてやっておりますが、中身を見るとさまざまなサービスをしております。この実施に当たっては今いろいろお世話になっているのは学内の組織なのですけれども、学会とかですね、それからコンソーシアム、こういうものがそろそろ必要になってくるのではないかと。学内だけではなく縦横にいろんな展開をしていくことが必要になってきたと考えております。発表は以上となります。ありがとうございました。

平成26年度IDE大学セミナーシンポジウム(2014年8月29日)

北海道大学の新たな試み

北海道大学高等教育推進機構高等教育研究部
細川 敏幸



1

概要

1. これまでの北大のFD
2. 次世代FD
3. その他
4. まとめ

2

FDの具体的な内容



これまでのFD(北大の場合)

- 教育ワークショップ
- 新任教員研修会
- TA研修会

各研修会の規模

- TA研修会: 50→300名
- 新任教員研修会: 50-100名
2006年度で終了
- FDワークショップ: 最大40名
2007年度から年2回開催

北大のFD

- ワークショップ(一泊二日)
各学部からの希望者, 教員 30余名
- 新任教員研修会(1日)
新任教員(対象約100名)
- TA研修会(1日)
修士・博士課程の学生(対象約1000名)

北大のワークショップ(FD)

- 小グループ学習が基本形態
学生立場で経験
能動的にワークショップに参加
- 教育の基本の学習
- シラバスの基本を身につける

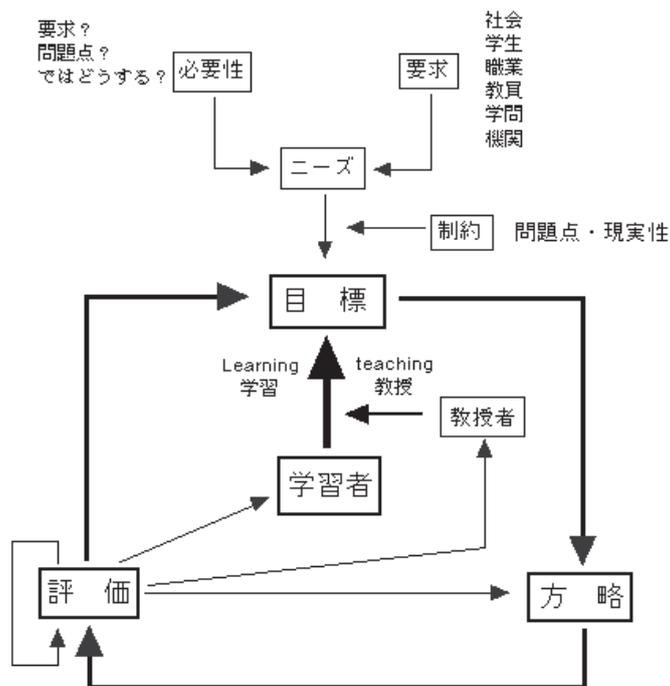
北大のFDの風景



北大のFDの風景



教育の基本



目標とは別に 「職業規範」が必要

- 学生への「敬意」
- 丁寧な態度と言葉づかい
- 職業で知り得たことの守秘義務
- セクハラ, アカハラの禁止
- 教育する義務と努力

未来に向かって



新たなFDの姿

- 個別の授業を向上させる。(TA・新教員対象研修)
- カリキュラムの恒常的な検討
- 研修内容の分離: 倫理・理論と教育技術
- 実施主体の多重化(大学, 研究科, 学協会, 地域, 大学間連携)
- 国際化, グローバル化対応

次世代FD研究会で試験実施(2008~)

- ◆ 大学院生対象のPFF
- ◆ 教員対象の国際化対応研修
- ◆ 中堅教員対象のFD

教員対象の国際化対応研修

文学研究科向け英語による授業に関するFD プログラム
H22年度, 2ヶ月に1回, 6名参加
主催: 学術国際部国際企画課 国際教育連携支援チーム

第1回: 英語での授業を行う際に最低限クリアすべき基本的な事柄について話し合い, 第2回目以降のデモレッスンで使用する建設的なフィードバックフォームを作成

第2～6回: ディスカッションとデモレッスン

- ①英語が母国語ではない教員が英語で教えること
- ②英語が母国語ではない学生に英語で教えること
- ③英語力のレベルが異なる学生が混ざったクラスを教えること

教員対象の国際化対応研修

マイクロ・ティーチングをベースに構成
発音の修正

発音力 ver 2.0(Windows XP, Vista, 7 対応版) 9300円(株)プロンテスト
授業で使う英語の言い回し

英語で授業シリーズ(1) 大学教員のための教室英語表現300 中井俊樹編、
アルク、94頁、ISBN 978-4-7574-1536-2、2008年12月。2380円

北大オリジナルテキスト(教育の基礎, シラバス, とっさの英単語, よく使われるフレーズ, 発音修正, 英語による数学表現)

教員対象の国際化対応研修(例)

総合化学院で今年度実施

- 1) 英語による授業入門(90分)細川 <日本語>
教育の基本を学ぶとともに、教室内における英語による対話の基本を学ぶ。
- 2) 授業で用いる英語表現(90分)山岸・細川 <英語+日本語>
テキスト「英語による授業入門」をベースに、教室で使われる英単語、英会話、英語による数学の表現方法を学ぶ。
- 3) 発音の修正(90分)12月2日 奥村 <日本語+英語>
日本人なら誰でも気になる英語の発音について、発音学習ソフト「発音力ver.2」の制作者を招いて、注意するポイントをうかがう。
- 4) マイクロティーチング・ワークショップ(Ⅰ)
導入(例:シラバスと自己紹介)(90分)山岸 <英語>
- 5) マイクロティーチング・ワークショップ(Ⅱ)
教えにくい/わかりにくい概念(90分)山岸 <英語>

17

中堅教員対象のFD研修

大学教員は研究, 教育以外の能力も必要
新しいプロジェクトを企画、実行できる力
モチベーション
企画力
実行
管理, 運営
マネージメント

中堅教員対象のFD研修(例)

2011年12月9, 10日

教育改善マネジメント・ワークショップ

学内から20名, 学外から2名(苫小牧駒澤大, 弘前大)

高等教育開発研究部門から3名, 本学名誉教授2名, 事務職員3名

テーマ「北海道大学の国際化」

行動目標

1. 大学の教育力向上に貢献するために, 大学の倫理綱領, PDCA サイクルをふまえ, 教育改善マネージメントができる。(全体)
2. 学生中心の教育改善マネージメントができる。(対象)
3. 同僚と協働して教育改善マネージメントができる。(協働)
4. 大学が求める方策を的確にとらえ, 教育改善マネージメントを実施できる。(行動)
5. 大学・学部・学科のカリキュラムの目的, カリキュラム構造にそった授業設計, 教育改善マネージメントができる。(教育改善行動設計)

プログラム

- 2010年10月22日(金)
- 8:15 受付 北海道大学・情報教育館(北図書館の北隣)
- 1階ロビー 集合
- 8:30 バス出発 研修開始:オリエンテーション(挨拶,自己紹介)
- 9:45 ないえ温泉「ホテル北乃湯」到着,玄関前で記念写真
- 10:00 オリエンテーション「趣旨」(5分)
- ミニ講義1「大学の歴史と今」(15分)
- ミニ講義2「大学教員の業務」(10分)
- 10:30 アイスブレイキング(教育で困ったこと,改善を要すること)(30分)
- 11:00 グループ作業1「課題のニーズ,背景の把握」(60分)
-
- 12:00 <昼食>(60分)
-
- 13:00 グループ作業1の発表(30分)
- 13:30 ミニ講義3「目標管理」(30分)
- 14:00 <休憩>(20分)
- 14:20 グループ作業2「目標設定・チームによる課題解決計画
:目的,目標項目,達成基準」(60分)
- 15:20 グループ作業2の発表(40分)
- 16:00 <休憩>(20分)
- 16:20 グループ作業3「目標設定・チームによる課題解決計画
:実施方法と役割分担」(60分)
- 17:20 グループ作業3の発表(40分)

プログラム

- 18:00 夕食(60分)
-
- 19:00 ミニ講義4「PDCA サイクルと目標設定」と質疑(40分)
-
- 20:00 懇談会
-
- 2010年10月23日(土)
- 7:30 朝食
-
- 8:30 グループ作業4「個人業務,大学・学部・学科業務」(80分)
- 9:50 <休憩>(10分)
- 10:00 グループ作業4の発表(60分)
- 11:00 <休憩>(20分)
- 11:20 ミニ講義5「実施内容・成果確認と評価」(30分)
-
- 12:00 <昼食>(60分)
-
- 13:00 総合討論・まとめ・振り返り
(このFD,これからのFDについて)(60分)
-
- 14:15 バス出発
- 15:30 JR札幌駅北口到着

プロダクツの例 (留学生を増やす: ニーズ)

留学生10万人計画達成。次の目標は30万人計画
北大は大学院生6000人、留学生1000人、まだ少ないと思
われている。

アジアの大学生は機会があれば日本に来たいと考えている。
学位を出せることが重要、日本の学位の価値が高い。これは学
部によって異なる。

・札幌は寒い、遠い(東京よりも交通費が余分にかかる)、アル
バイトが少ない。

プロダクツの例 (留学生を増やす: 目的)

1. 優秀な留学生を獲得する。
2. 組織的に奨学金を獲得する体制をつくる。
3. 既定の年限で学位を取得できる指導体制をつくる。
4. 留学生の多様性に対応できる受け入れ体制をつくる。
5. 北大の魅力を発信する。

プロダクツの例 (留学生を増やす:目標と達成基準)

目的:奨学金

- 1) 応募可能な国内外のすべての奨学金制度を把握
- 2) 奨学金制度のデータベースを構築

達成基準

- 1) 一括型で管理できる専門組織を構築する。
 - ・現在いる留学生の獲得している奨学金の調査。
 - ・応募可能な奨学金の調査。
 - ・他大学の状況の調査。
 - ・各国の領事館・大使館の調査。
 - ・入国管理局の調査。
- 2) 調査データをもとにデータベースをつくる。
 - ・英語・日本語の両方でのデータベース。
 - ・学外に公開する(海外からアクセス可能に)

プロダクツの例 (留学生を増やす:実施方法)

支援組織

留学生支援室をおく

5名の選任教員を中心として学部学科の支援教員を巻き込んで実施する。

<仕事内容>

- 1) 組織へのアンケート調査
 - a) 現在いる留学生の獲得している奨学金の調査
 - b) 応募可能な奨学金の調査
 - c) 他大学の状況の調査。
- 2) 留学生へのアンケート調査
 - a) 留学生の動機調査。なぜ北大を選んだか
 - b) 留学生の目から見た北大の魅力
 - c) 留学生への必要な支援体制アンケート調査
- 3) 教員への調査
 - a) 共同研究の調査
 - b) 北大で進んでいる特徴ある研究(雪や北方圏の研究など)
 - c) 教員ごとに受け入れ可能な留学生の基準
 - d) 新たにどのようなサポート体制が必要か
 - e) どのようなサポート(言語など)が可能か調査

プロダクツの例 (留学生を増やす:作業分担)

目標項目	メンバー				
	A	B	C	D	E
組織へのアンケート調査	○	○			
留学生へのアンケート調査		○	○		
教員への調査		○		○	
アンケート結果の共有	○	○			○

プロダクツの例 (留学生を増やす:メンバーAの作業分担)

月日	目標項目	達成基準	実施方法	他者との連携
12/20	組織(大学)へのアンケート	アンケートの内容, 方法の検討, 作成	各部局, 大学の教務に依頼	国内の大学, 学内各部局の教務課
1/10	作成開始	分析方法		
1/24	様式決定			
2/15	印刷発注			
2/20	納入			
2/20	発送			
3/20	締切解析開始			
4/30	解析終了			

何を学んだか

課題から問題解決のプロジェクトを構築する
実施内容を時間軸に沿って決定
それを組織内の個人に役割分担

過去2年に試行したFD(背景)

- ・組織改編と新組織
高等教育開発研究部門(専任2名+特任1名)→
高等教育研究部門(専任9名研究グループ6名)+
新渡戸カレッジ特任1名
- ・多様化する研修の要望
国際化, 新教育手法, 教育技術

過去2年に試行したFD(内容)

- ・国際化対応
発音修正(3回)
- ・新教育手法
アクティブラーニング, ディベート, ルーブリック
学生相談(予定)
- ・教育技術
ELMS(北大版e-ラーニング)
- ・その他
キャンパスツアー

31

キャンパスツアー(平成26年8月21日(木))

- | | |
|-------------|--|
| 13:00-13:30 | 『挨拶及びレクチャー:北海道大学の倫理綱領』
新田孝彦理事・副学長
附属図書館本館 |
| 13:30-14:00 | 『附属図書館本館ツアー ~授業支援の視点から~』
附属図書館利用支援課 野中雄司係長 |
| 14:00-14:30 | (移動・休憩) |
| 14:30-15:00 | 『北大の教育情報システムについて』
情報基盤センター 重田勝介准教授
情報基盤センター南館 108教室 |
| 15:00-15:20 | 『IRの取組み~データから見える北大生の特徴』
高等教育推進機構 IRネットワーク推進室
徳井美智代特任准教授 |
| 15:20-15:40 | (移動・休憩) |
| 15:40-16:00 | 『アカデミック・サポートセンターによる学生支援』
アカデミック・サポートセンター 多田康紘特定専門職員
高等教育推進機構 E208教室 |
| 16:00-16:10 | (移動・休憩) |
| 16:10-16:30 | 『北大の全学教育と総合入試』
高等教育推進機構総合教育部長 鈴木久男教授
情報教育館 スタジオ型多目的講義室 |
| 16:30-16:50 | 『北大教員が知っておくべき知財制度と学内ルールのポイント』
産学連携本部産業イノベーション部創造的知財創出部門長、
産学連携法務室長 寺内伊久郎特任教授 |

32

キャンパスツアー(図書館)



33

研修以外の活動も...



旭山動物園

その他のFD活動

- ジャーナルの発行(年1~2冊)
- センターニュースの発行(隔月)
- 新規授業の開発(PBL, 初習理科, フレッシュマン教育など)
- 授業手法の開発(e-Learning, クリッカーなど)
- ホームページでの資料公開(8/22現在で154264回)

ホームページでの資料公開

北海道大学高等教育推進機構 高等教育研究部
高等教育開発研究部門

home | 研究紹介 | 教員支援 | 資料閲覧 | 報告 | 関連講座 | 研究会・学 | リンク

Faculty Development

<p>最新のお知らせ</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 次回ニュースレター99号は2014年8月に発行の予定です。 ● 「高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—」取組募集 <p>締め切り：最速で22号に掲載となる原稿は2014年8月末日締め切りです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ほんの骨休めのために小さな飲み物(エッセイ)を連載しています。研究紹介で教員紹介を御覧下さい。 <p>コンテンツ</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 研究紹介 ● 教員支援 ● 資料閲覧 ● 報告 ● 研究部関連講座 ● 研究会・学会のお知らせ ● リンク ● アクセス ● 各学部、研究所等のFD・IA研修実施状況 	<p>新着情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 2014年8月14日より、平成26年度第2学期開講の全学教育科目(専門科目)を対象とするクリッカーの貸し出し予約受付を開始します。申し込み方法についてはこちらをご覧ください。クリッカー簡単マニュアルはこちらをご覧ください。 ・リモコンを番号順に並べて収納する必要のない「順不同セット」は2セットあります。ご希望の方は予約時にお問い合わせ下さい。 ● ニュースレター98号をアップロードしました。資料閲覧のページでどうぞ。こちら ● 初心者向け教員用LMS操作マニュアルができました。こちらをご覧ください。こちら ● 2014年3月10日より、平成26年度第1学期開講の全学教育科目(専門科目)を対象とするクリッカーの貸し出し予約受付を開始します。申し込み方法についてはこちらをご覧ください。クリッカー簡単マニュアルはこちらをご覧ください。 ・リモコンを番号順に並べて収納する必要のない「順不同セット」は2セットあります。ご希望の方は予約時にお問い合わせ下さい。 ● ニュースレター97号をアップロードしました。資料閲覧のページでどうぞ。 ● 2014年3月17-21日に予定しておりましたPreparing Future Faculty Workshop 2014は、講師の都合により中止となりました。次回の開催についてはこのページでお知らせいたします。 ● ニュースレター96号をアップロードしました。資料閲覧のページでどうぞ。 ● 2013年9月17日(火)より、平成25年度第2学期開講の全学教育科目(専門科目)を対象とするクリッカーの貸し出し予約受付を開始します。申し込み方法についてはこちらをご覧ください。クリッカー簡単マニュアルはこちらをご覧ください。 ・リモコンを番号順に並べて収納する必要のない「順不同セット」は2セットあります。ご希望の方は予約時にお問い合わせ下さい。 ・全学教育科目の予約に空きがある場合には、専門科目でも借りることができますので、お問い合わせ下さい。 ● 平成25年8月16日(金) 14:00よりクラーク会館講堂において、札幌コンサートホールキタラ専属オルガニスト、マリア・マグダレナ・カチョルさんとソプラノ・松井亜樹さんによるリサイタルが開催されます。詳しくはポスターをご覧ください。 ● 平成25年8月7日(水) 13:00より情報教育館3階スタジオ型多目的中講義室において、2013年度IRシンポジウム 「教育評価の国際的進展と日本の今後」を開催します。詳しくはポスターをご覧ください。 ● ニュースレター95号をアップロードしました。資料閲覧のページでどうぞ。
---	---

北海道大学高等教育推進機構 高等教育研究部
高等教育開発研究部門
〒060 札幌市北区北17条西8丁目情報教育館4F
Tel: 011-726-7520 Fax: 011-726-7521 e-mail: l.h.o.o@high.hokudai.ac.jp
(高等教育に関するご意見・ご希望をお持ちしております)
あなたは1999年7月25日(火) 15:42:64 人の読者です。

ホームページでの資料公開

- 目次
- ホーム
- 研究部紹介
- 教員支援
- 資料閲覧
- 報告
- 研究部関連講義
- 研究会・学会のお知らせ
- リンク(全国大学教育研究センター等協議会など)
- 各学部のFD実施状況

教員とTAのための教育支援

- 一般教育演習のガイドライン
- 私のTA体験記
- 北海道大学TA研修マニュアル(2006年11月2日以来3221人)
- 北海道大学FDマニュアル(2005年2月17日以来 31133人)
- あなたの授業方法の悩みにお答えします。
(2000年11月以来 11449人)
- 授業をよくする方法(2001年7月以来 12198人)
- 高等教育用語集(英語版)(2007年6月2日以来4213人)
- 高等教育用語集(日本語版)(2007年6月2日以来1597人)
- クリッカー簡単マニュアル(貸し出し用)
- 「北海道大学moodle」の使い方
数値は2014.8.26現在

各学部のFD実施状況

- 2012年から研究部門のホームページで公表（以下はそれ以前の実施を含む）
- 北大型FDの実施：医学部，歯学部，水産学部，工学部
- 講演会：文学研究科，地球環境科学研究科，理学研究院・生命科学研究院，農学研究院，教育学研究院等
- 授業参観：全学教育，公共政策大学院，法学研究科，農学研究院
- 国際化にむけた研修：獣医学研究科，農学研究院，総合化学院，地球環境科学研究科

まとめ

FDへの要望は変わりつつある。

- 基本は大切（倫理，教育の基本的構造）
- 新たな展開は需要に応じて
- 様々なサービスの展開
- 横の連携が重要に（学内共用組織，学協会，コンソーシアム）



3.5 総合討論

総合討論

加藤：札幌保健医療大学の加藤と申します。お2人の先生に質問させていただきたいのですが、アンケートの数値化をなさってそれを教員に返して授業改善を出してもらおうとかがいました。このアンケートの数値と教員の定期試験の結果というものは相関するものなののでしょうか。たとえばアンケートの数値が低くてもその授業の学習到達目標には達している場合があると思うのですが。次に札幌大学の堀江先生に質問したいのですが、大学間連携の事業と大学の理念教育目標との関連はどのようになっているのでしょうか。それから、大学間連携の取り組みがFDに活かされているとおっしゃっていましたが具体的にはどのように活かされているのかをうかがいたいです。以上です。

有澤：では、お答えさせていただきます。実はアンケートを数値化する歴史は相当長いのです。数値を選び出して学科のほうにフィードバックするというのはここ数年です。しかも今日発表させていただいたような内容で、それをきちんと項目を選んで、順番を付けてお返しするというのはこの春やったばかりです。ですからその効果を検証できる状況にはないというのが現状です。ただそういうことを先生方に意識してもらおうということと、内容がこうでなければならぬということをお話ししているわけではないのです。なぜこういう数値になったのかということは、教科の性質上やむおえないこともあります。それは教育上のテクニックの問題であるとか内容の問題であるということ进行分析して、教員のあるいは学科のそういうことを共有していただければ、その科目だけの問題ではなくて、学科の問題として必ずフィードバックすることを期待している。そういうことで科目はどうなったか結論を出して報告はさせていただきますけれど、まあそういう具体的な結果が出ないと行動が起きないと思ってそうしています。それが教育効果にどのように反映されているのかの検証まではまだ到っていないのが現状です。以上です。

堀江：ご質問ありがとうございます。大学の理念と大学間連携の関係はどのようになっているのかということですが、我が校の理念は「精気あふれる開拓者精神」であります。大地連携のワークショップといいますのは、まだやり始めたばかりです。学生たちと一緒に、どのような学びを設定すればどのような効果があるのかについて。フィールド自体は平取町で、そこで学生たちがどのように学びえるのか。自分で学ぶのではなくてその過程でどのように学ぶかをやりながら学べる、自分の大学に帰ったときに、専門科目とか共通科目の学びにつながるポイントレクチャー、そんなものを大地連携ワークショップで学び

えるのではないかと考えています。答えになっていないかもしれませんがそのように考えております。そして大地ワークショップはどのように生かされているのかという点については、今回始まったばかりですが、ワークショップには引率教員も一緒に行きまして、3泊4日ですね、参加する形をとっております。教員はあくまで引率で外から見ている感じなんです。振り返りの時間に学生たちとどう接するかということについて、私はアクティブ・ラーニングの専門家ではないので、学生達をサポートすることはできません。ただ他大学からいろんな先生が来ますと、学生達のまとめの部分を見る機会があります。他大学と一緒に学生達をどのようにサポートするか、どのように教育していけばいいのかということ、教員も学ぶこともあった。あとは、それをどのように大学内に還元していくかが課題だと感じているところです。以上で終わります。

細川：どうもありがとうございました。それでは、他にご質問の方いらっしゃいますか。

下村：北海道医療大学の下村と申します。北海道科学大学の有澤先生に2点ほどおうかがいしたい。教員の業績の見える化というお話をいただきましたが、今回は私、初めてFDに参加したのでいろいろ教えていただきたい。この数値化をする際に、大学のグランドビジョンにそった重みづけをなさっているのかについてうかがいたい。教育総合学術運営社会とありますけれども、たとえば国家試験の合格率を上げたいならばそれに沿った重みづけを、あるいは学科ごとに重みづけの変化をつけているかということについてお聞きしたい。もう1つ、学生と教員による授業の評価は2点あるとおっしゃっていましたが、全く逆の評価が現れる場合はあるかと思えます。そうした場合はどのように還元していくか。この2点をおうかがいしたいと思います。

有澤：まず一点の「業績の見える化」でグランドビジョンの兼ね合いをどう行っているかということによろしいでしょうか。グランドビジョンはグランドビジョンとしてお話ししましたけれども、われわれはグランドビジョンと直接というよりは大学の基本として、教育と研究が非常に重いと考えておりますので、これが見える化では50%になるように重みづけを最初からしてございます。それからその他の5項目に関しましてそれぞれの重みづけをしております。教育と研究に対して項目ごとにそういう重みづけですね、社会貢献を含めてFD研究の参加も含めまして、それは本当に入っております。そういうことをやりながらグランドビジョンは基盤能力を併せ持つ専門というグランドビジョンにしております。これは教員も学生も同じことですが、直接それと業績の見える化に絡んでくるということではない。教育と研究に重みを置いているということです。

それと2番目の学生のアンケートと教員の関係です。逆の結果が現れることにはならなくて、学生が授業アンケートをやったものを教員が見ます。見ていますので、それに対し

て教員はコメントを發します。この授業は難しいと思ったけれども、やはり皆さんの理解が十分に進まないということが理解できた。それがそういうことになったと先生に思っただけでなく、そういう場合に、これからその科目は、皆さん難しいと思ったのだから次回からこういう点に気を付けて授業を展開します、というようなコメントを返すことにしています。それは両方の内容がウェブ上で見えるようになっておりますので、そういう状況で学生と教員には、あるいは全教員に見えるようにしてありますので、それをもってやっているわけです。さきほど札幌医療大学の先生からご質問があったように、それでポイントを付加した項目をさらに抜き出しまして、ポイントが著しく低い先生の科目を、どうしてそういうことに到ったのかということ、いじめるわけではありませんが、教育改善の一環として学科のグループに戻します。そして、そういうことを議論するネタに使っていただくということをやしながら、学生と教員とのアンバランスも含めた内容の改善を図っていくのが、やり方でございます。回答になっておりますでしょうか？

下村：要するに学生アンケートありきの教員の評価という理解でよろしいですね？

有澤：学生ありきの教員の評価というよりは、教員は教員の目標設定がございますので、学生のアンケートと逆ということもあります。それはそれで事実ですので、それはそういうことになった原因がアンケートにありますので、それをカリキュラム編成会議の場において議論していただくしかありません。

細川：どうもありがとうございます。ほかにご質問のある方はいらっしゃいますでしょうか？

苦米地：北海道科学大学の苦米地です。旭川医大の吉田先生のご講演で非常に興味深かったのは、FD研修会で「いまさら聞けない医療」というテーマが取り上げられていることです。今日、先生方のお話を伺っていても、皆さん色々な新しいことを色々なところでやっていらっしゃるのですが、私も最近古い資料、講義資料などを見ていて意外にもこれは今でも使えるなというものが沢山ある気がしております。それで新しいものに取り組むのも勿論構わないのですが、吉田先生の「今さら聞けない」というのは、医療系に限らず工学系にも文系にもあるのではないかと思うのです。「忘れ去っているもの」について何かご意見がありましたら、お聞かせいただければ。

吉田：ありがとうございます。授業の基本というものは昔から変わらないと思っております。ただ最近では学生主体でやらなくてはならない。その基本は昔から一緒だとは思いますが、それが明確に教育者の方にもより知られるようになったと思います。こういうような変遷というのはあると思います。ただ、教育は学生が能動的に学ぶということは昔から

変わっておりません。技術的に手法的に e-ラーニングとかパワーポイントとか手法としてはいろいろ変わっておりますが、本質は変わらない。教育者として学生は能動的に学ぶ方がいいという意識も進化しているのではないかと思うのです。技術と手法は変わってきていると思います。以上です。

苦米地：何故このようなことを質問させて頂いたかという、例えば教員を採用する時に研究業績や面接では問題ないと思った方が、教育の現場に立つと欲していた以上に力不足だなと思うことが多々あります。そこでそういう教育の方法の観点から、吉田先生のおっしゃっているような普段聞かないことを聞いて、学部、学科の教育体系あるいは教育方法を学ぶFDが我々も必要なのではないかと思ひ聞かせていただきました。ありがとうございました。

和田：小樽商科大学の和田です。細川先生のほうにおうかがいしたいのですが、お話の中にあつたようにFDというのは多様なもので課題が次々出てくるのではないかと、ということでありました。その中で特に興味をそそられたのは中堅の教員のFDについてです。このFDの参加条件というのはどのようなになっているのか教えていただきたい。自主的に参加するのか、それとも有望な教員を選抜、推薦してやるのか。参加者の動機などを教えていただきたい。それとFDを終ったあとには教員にどのような変化があつたか、そしてこういうことができるのは人員と設備の関係上、北大しかないと思いますので、さきほどの国際化のお話の中にあつたような、もっと他大学の受け入れに関して北大はこれからどのような展望を予定しているのかについてお話をうかがわせていただきたい。

細川：まず中堅FDの対象者についてですが、集めるときに魅力的な言い回しで募集しております。いくつか条件がありまして着任後10年以上北大におられる方でいつ学部長になつてもおかしくないような方を募集しています。反応はさまざまです。毎年テーマを変えて行つたのですがここ2回は国際化にしてあります。これに興味があればつらい内容となります。FD後の反応ですが、残念ながら把握はしていません。私どもがやっている研修はどれもその後のトレースは行つておりません。一度FD経験者全員を対象にしたアンケートをやつたことがあります、それ以後については存じておりません。直後のアンケートは毎回行つていますが、時間をおいての調査は行つておりません。効果につきましてはまだよくわかつていないというのが現状であります。

他にどなたかおりますでしょうか？それではシンポジウムを終わらせていただきます。本日はどうもありがとうございました。最後に閉会のあいさつを北海道科学大学長からお願ひいたします。

苫米地：今年度のテーマは「これでいいのかFD」というテーマで行ってきましたが、2日間にわたりとても有意義な議論ができたのではないかと思います。このシンポジウムで得たものを各大学に持ち帰り、来年度また新たなテーマで議論できればと思っております。各大学の健闘をお祈りしつつ、皆さんと1年後元気にお会いできることを楽しみにいたしております。これで挨拶とさせていただきます。本日はありがとうございました。

2014 年度 IDE 大学セミナー報告書

2015 年 3 月 発行

発行者 IDE 大学協会 北海道支部長 山口 佳三

編集 IDE 大学協会北海道支部

〒060-0808

札幌市北区北 8 条西 5 丁目 北海道大学内

TEL 011-706-3907

印刷所 北大生協 印刷・情報サービス部